
魔法世界の双剣士

七夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界の双剣士

【Nコード】

N7153S

【作者名】

七夜

【あらすじ】

仲間と共に神を倒し“無”へと返った少年『ジューダス』 過去の名は『リオン・マグナス』 完全なる“無”へと返った筈のリオンだったが眼が醒めると…。 () この作品はリオン・マグナスがなのはstsの世界に行くというクロス物です。

作者は小説初挑戦なので拙い文章ばかりになると思いますが御了承下さい。 更新速度は亀以下…というよりも気分です。

『プロローグ』

全ての戦いが終わり、仮面を付けた少年は虚空にさ迷う

少年の名は『ジューダス』

それは偽名だが、今となつては何でも構わない

何故なら少年はもう直ぐ消えるのだから……。

「本当に…僕が手にするには大きすぎる代物だ…」

ジューダスは独り呟く

本来なら18年前に死んだ筈のこの身

今更未練などはない。

寧ろ満足している

“アイツ”の息子にも出会えた。

助ける側である筈の自分の方が救われた。

本当に楽しかった。

ジューダスはゆっくりと瞼を綴じる

「ありがとう……カイル……ロニー……リアラ……ナナリー……ハロルド……」

頭の中に浮かぶのは、自分には大きすぎる“絆”をくれた仲間達

そして

「スタン……」

かつて裏切った自分を“仲間”だと必死に言ってくれた人物

案外悪くない、と心の片隅で思い続けていた楽しかった日々の記憶

「シャル……もうすぐそっちに行くさ……」

ジューダスは完全に眠りにつく

二度と起きる事の無い深い眠りへと…

『坊ちゃん！ 坊ちゃん！ やつと見付けましたよ！』

消え行く意識の中、ジューダスはかつての相棒の声を聞いた。

〈注意事項〉（前書き）

い。坊ちゃんの活躍を望んでいるのは僕だけじゃ無い筈！
と思った

〈注意事項〉

皆さん初めまして。

リオン覇風の七夜です。

中々、リオンの小説は見ないなあと思い、書けもしない二次創作に手を出させて頂きました。

まず、この作品は作者の妄想を具現した内容となっており、本作の注意事項も交せて以下に書き記します。

- ・なのはs t sにリオンが介入
- ・リオンは空は飛ばません
- ・魔法と晶術は別物。 故にリオンにはリンカーコアは無い
- ・リオンは『リメD』 『D2』を経験した状態。
- ・性格は丸くなっている
(下手すれば完全な別人orオリ主化)
- ・リメD、D2の術技は完備。 凶悪性能の『悪魔の槍』も投擲可能
- ・術技、秘奥義に関してはリメDのBC基準
フラストキャラパー

つまり、気力とテンションさえあれば術技撃ち放題。 及び、秘
奥義はBCに対応

・要するに、秘奥義の発動はその場の雰囲気で…。

・シャルティエが万能デバイス化（御都合主義の原因）

・なのはstsはアニメを1回しか見ていない為、キャラ崩壊の
可能性大あり。

主に言葉遣いとか…。

以上の内容ですが、それでも見て頂けるのならば幸いです。

〈注意事項〉（後書き）

でも、最後のゆりかご戦では何とかして空中戦が出来るようにしてあげたいなあ…。

〈設定〉(前書き)

リオン鼻肩の七夜が通りますよ〜っと。

〈設定〉

『リオン・マグナス』

本作の主人公にして、魔法世界に來ちやった16歳の少年。

今回は仮面は付けていません

近接戦、晶術戦（魔法戦）の両方を熟す事の出来る万能型

ただ、防御力が紙。

魔法障壁は持っていないが……何、気にする事は無い。

スタンやカイル達との交流を経て性格はかなり丸くなった。

オリDやリメD、マイソロ系の性格がごっちゃになる事がしばしば…

だって作品によって性格が微妙に違うもん、彼…

『シャルティエ』

人格を持つ剣“ソーディアン”の1本であり、本作の御都合主義の
原因

なのはst sの世界に飛んで來た際に情報を読み取って自身をデバ

イス化

防御が紙の坊ちゃんのために魔法障壁を張ったり、非殺傷設定の短剣を晶術と魔力を練り合わせて作ったり、戦場の情報を随時把握する等、原作より遥かに高性能と化した。

ただシャル自身、本分は晶術であり魔力に関してはミッドに流れ着いてから得た情報を元に晶術を無理矢理魔力に変換している為、魔法障壁など合って無いような物

ガジェットのビーム3発防ぐのが限界。

〈設定〉（後書き）

キャラ崩壊を抑えられるか心配です。

次話からは本編ですが、更新は亀以下 七夜の気分次第になります。

拙い作品ですが、暇潰しにでも楽しんで頂ければ嬉しいです。

『降り立つ客員剣士』(前書き)

本編突入です。

『降り立つ客員剣士』

「……此処は…何処だ？」

少年、『リオン・マグナス』は体を起こしながら疑問を口にする

傍目から見れば冷静な表情をしているリオンだが、彼の内心ではかなり混乱していた。

それもそうだ。

自分は確かに消えた筈

過去の思い出を振り返りながら迫り来る死を受け入れて眼を綴じ、眠りについた筈

だが、綴じた瞼に眩しさを感じた為に眼を開けてみればどういう事であろうか…

見覚えの無い場所で、木の木陰で昼寝をしていたかのように自分が横たわっている

リオンは必死に思い出す

「そういえば、あの時…」

確かに声が聞こえた。

幼い頃から側に居た“剣”の音が…

『…あつ、坊ちゃん。 やつと眼が醒めましたか？』

「……………!？」

その剣の音が直ぐ側で聞こえる

リオンは左腰に挿している剣を手を取った。

その感触、造形、全てがリオンの脳内にあるイメージと合う

リオンは信じられないといった表情で剣に問い掛けた。

「……………お前…シャルか…？」

『はい！坊ちゃん！ 漸く会えましたね！』

それは間違い無く、ソーディアン“シャルティエ”であった。

「シャル、これは一体どういう事なんだ？」

リオンはシャルに向かって問い掛ける

「僕達は天国に行ける筈が無い。 ならば地獄か？ まさかな、こんな平和な地獄があるはずが無い」

『ちよつ、坊ちゃん！ 落ち着いて下さいよ！』

リオンを宥めるシャル

尚、シャルの声は一般人には聞こえない

傍から見れば剣に向かって話し掛けている危ない人だ。

『取り敢えず、坊ちゃんと僕が此処に来た経緯と此処が何処なのか説明しますね』

そう言い、話を始めるシャル

その内容によると、どうやら自分達は“蘇生”という世界の理から外れた事をしてしまったが為に、元の世界から“存在そのもの”を弾き出されてしまったらしい

「……どういう事だ？」

『要するに、ボクと坊ちゃんは宗教的概念で言う処の輪廻転生の輪から外されたみたいなんです』

「そうか…」

別にその程度構わない

それ以上に大きい物を得たりオンにとっては寧ろ之で良かった。

二度と自分があの世界に蘇らされる事は無くなったのだから…

既に歴史から退場した自分が居て良い世界では無い

だから寧ろ輪廻から外れた事は良かった。

『それでボクと坊ちゃんは世界と世界の境目に居たんですが、何かしらの力によってこの世界に来たんです』

「何かしらの力？ まさか神の眼か？」

『うん。 そんな感じでは無かったですね。 まあ、その辺りは追いついて考えると坊ちゃんが眠っている間に手に入れたこの世界の情報についてお話ししますね』

その後、シャルから話された内容はリオンにとっては衝撃的だった。

晶術とは違う魔法なる物の存在

“ 時空管理局 ” と呼ばれる組織

非殺傷設定の搭載されたデバイス

その話によれば、シャルの言葉は元の世界と違い皆に聞こえるらしい
シャルのように喋るデバイスは“ インテリジェントデバイス ” と呼ばれているんだとか

又、この世界の秩序ジュールに乗っかり、シャルは自身をデバイス化すると同時に非殺傷設定を付け加えたいらしい

「(ソーディアンにそこまでの性能はあったか?)」

ふと、疑問に思っ Orion だった。

ソーディアンはあくまでも晶術の発動のみだと思っていたのだが…

「(まあ、あのハロルドが作った剣だしな…)」

仲間であったマッドサイエンティストを思い出し、リオンは溜息を吐いた。

『どうかしましたか、坊ちゃん?』

「いや、何でも無い…。それよりも、シャル。お前、そこまで高性能だったのか?」

『いえ、何だか分からないんですけどボクのコアに情報が流れ込んで来るんです。心配しなくても、坊ちゃんは普段通りにして頂ければボクがサポートしますよ』

声の覇気からして今のシャルはとても機嫌が良いだろう

ふっ、とはにかんで笑ったりリオンはシャルを顔の高さに掲げながら口を開いた。

「済まないな、シャル。こんな所までお前に付き合わせてしまつて…」

『気にしないで下さい。それに、前にも言ったでしょ？ ボクのマスターは坊ちゃんだけです。何処までもお供しますよ』

「……ふっ。助かる、シャル」

今のリオンの表情は自分でも驚く位の笑顔だった。

昔の自分では考えられない

「（これも、あいつ等の御蔭という訳か…）」

リオンは親子二代に渡って自分を仲間だと言ってきた2人を思い出し、決して口には出さず心の中で感謝した。

『……………！ 坊ちゃん！』

「どうした？」

急に警戒を高めるシャルティエ

リオンは立ち上がるとシャルを片手に周囲を警戒しつつ自分の状態を確認した。

身体損傷は問題無い

先程まで元の世界で戦っていたエルレインとのダメージも無くなっている

服装はジューダスの頃と同じ黒い服

仮面は無いが、違う世界なら問題無い

武器は シャルティエのみ

『坊ちゃん、短剣はボクが晶術を魔力として応用させる事で戦闘中のみ実体化させます！ それを使って下さい！』
シャルのコア部分が光ると、リオンの左手に短剣が現れる

その形は、元の世界で愛用していた“最強”の部類の短剣
リスダガー』

リオンは両剣を構えた。

「シャル、勢いで構えたが一体どうした？」

『それがですね…。ボク達、囲まれちゃってるみたいなんです』

「囲まれた…？ 誰に？」

『先程、坊ちゃんに説明した“ガジェット”と呼ばれる自立兵器で
す』

シャルがそう言うや否やリオンを囲むように10機のカプセルのよ
うな形をした奇妙なメカが近付いて来る

「何で此処まで接近されるまで気付かなかった！」

『だって坊ちゃんに色々と説明していましたし…』

「泣き言は後だ！ 蹴散らすぞ！」

「了解です！坊ちゃん！ゴーレムを倒せる坊ちゃんなら、あんな奴等は楽勝です！」

リオンはシャルと短剣を構え、目の前のガジェットに向かって走り出した。

この日、同時刻。

機動六課の隊長、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンはミッドチルダ郊外の空を飛んでいた。

部隊長である八神はやてからの通信で次元震があったという知らせを受け、その調査へと向かっている処だ。

フォアード陣は先日の初任務時の傷が癒え切っていない為、六課で待機させている

「なのは！ あれ！」

なのはの横でフェイトがある一点を指差す

その方向を見た時、2人の眼には驚く程の光景が広がっていた。

「魔神剣！」

剣から放たれた衝撃波が1体のガジェットを吹き飛ばす

破壊にまでは行かなかったがそれで十分

リオンは短剣を突き出し加速する

「空襲剣！」

貫くと同時にシャルティエを振り上げて斬り上げる

“突き”と“斬り上げ”によって3分割されたガジェットは大破した。

そのまま斬り上げによって空中に跳び上がったリオン

そのまま勢いを殺さずに近くにいたガジェットに狙いを定める

「臥竜閃！」

ズバツ、とガジェットの体が真つ二つに裂けた。

だが、リオンの攻撃はまだ終わらない

この態勢から発動出来る技を放てるだけ放つ

リオンは追撃を掛けるように空中から下へ

生き残っているガジェットに向けて両手を振り抜いた。

“臥竜閃”からの昇華剣技

「臥竜滅破！」

更に1体のガジェットは大破した。

が、残りはまだ半分以上

「シャル。面倒だ、一気にケリを付けるぞ！」

『了解です、坊ちゃん！』

リオンは両腕をクロスさせて構え詠晶を行う

そして、クロスした腕を前に突き出した。

「エアプレッシャー！」

発動したのは広範囲攻撃の“風”の晶術

ガジェット達を強大な圧力が襲う

圧力に逆らおうとするガジェット達だったが、その全ては無駄な行為

ボンツ、と音を立てガジェット達は圧力に押し潰され爆発した。

「ふんっ、雑魚が」

『流石ですね、坊ちゃん』

戦闘が終わり短剣は幻のように消え去り、リオンはシャルを鞘に戻す

鞘に戻しながらもリオンはシャルに関する疑問があった。

今のシャルティエは考えられない程、高性能過ぎる

だが、この事はシャルが言っていたように追い追いかけるとしよう
リオンは行く当ても無く、歩を進める

「その貴方、武器を降ろして下さい」

背後から掛けられる声

その声には少し威圧が籠っている

「（やはり、この格好では不審過ぎるか…）」

自分の来ていた服を気にしながらもリオンは声を掛けてきた人物の
方へ振り返った。

「……………なっ…！？」

その時のリオンの第一声は驚き

振り向いたりオンの先には真っ白な服を来た少女と、真っ黒な服の少女が空から下りてきたのだった。

『降り立つ客員剣士』（後書き）

戦闘描写は好きなんだけどなあ。

話だけの場面とか苦手です。

なのはキャラの性格が崩壊しないように気をつけなくては…。

特に、数の子達の性格が分かりません…。

『機動六課』（前書き）

キャラ崩壊が無いか心配だなあ。

早く戦闘シーンを描きたい！

戦闘シーンには気合いを入れる七夜です。

『機動六課』

その時、高町なのは信じられなかった。

目の前では1人の真っ黒な服を着た少年がガジェットを何の問題も無く切り裂いている

その少年は剣から衝撃波を出したり、一瞬だけ急加速して突き上げたり、空中から地面に向かって斬撃の跡が残る程の攻撃を繰り返す

その戦闘法はベルカ式と思われる

だが、それよりもなのはは少年の動きに無駄が無い事に着目していた。

そして、なのは自身も無意識の内に相棒であるレイジングハートで少年の戦闘を記録していた。

「エアプレッシャー！」

そう少年が叫ぶと同時に少年の前方で大気圧が一気に圧縮される

それに巻き込まれたガジェット達は見るも無惨に圧力に押し潰され爆散した。

「（あの子、遠距離魔法も使えるの？）」

近接主体かと思っていた少年の戦闘法だったが、ミッド式のような遠距離魔法をも使った事実になのはは固まる

隣ではフェイトも同じように固まっていた。

「……………フェイトちゃん……………」

「うん。なのは……。最後に彼が使った魔法、見たことが無い」

魔法陣も展開せずに放たれた魔法

そしてその威力

今回の調査と関係あると感じた2人はデバイスを構え少年に近付いた。

「（シャルから話は聞いていたが……やはり人が空を飛ぶなど驚くしか無いだろうが）」

リオンは目の前に下りて来た2人を見て警戒する

自分も大概な不審な格好だが、相手2人も負けず劣らずだ。

しかも御丁寧に、白い奴は機械じみた杖を、黒い奴は斧の形をしている武器を向けている

「（シャルの言っていた“デバイス”というやつか……）」

冷静に判断するリオンであったが、絶え間無く殺気を振り撒いているそれもそうだ。

急に襲われて自衛の為に戦っただけで変な2人組に武器を突き付けられているのだ。

「……気に喰わないな」

リオンは2人に向かって口を開く

「武器を降ろせと言われたが、そちらが武器を構えている以上、僕に対する敵対行動と見做す」

シャルを引き抜くリオン

その剣先は少女達に向けている

「死にたくなければ僕に構うな」

「そういう訳にはいきません」

リオンに反論したのは黒い奴

続けて白い奴も口を開く

「貴方は見たことの無い魔法を使用していた為、一度私達と一緒に機動六課に来て貰います」

機動六課。

その単語には覚えが無い

シャルティエの説明にも無かった。

が、リオンには関係無い

「……断る……！」

そう。何故なら自分が従う道理は無い

女2人なら直ぐに倒せる

リオンはそう思っていた。

『坊ちゃん…！ 坊ちゃん…！』

今にも飛び掛からんという姿勢のリオンにシャルは小声で話し掛ける

「何だ、シャル？」

『坊ちゃん、此処は大人しく従った方が今後の為には良いんじゃないですか？』

「馬鹿を言うな。何故僕が素性の分からない奴に従わなければならぬ」

『まあまあ坊ちゃん。此処はボク達の世界とは違うんですよ。少しでも情報を集める事が先決です』

「……ちつ。仕方ない」

『流石坊ちゃん。物分かりが良いですね。大丈夫です。例え捕まっただとしてもボクが坊ちゃんの手にある以上、坊ちゃんの実力なら簡単に抜け出せますから。後は僕に任せて下さい』

『そちらのお嬢さん方！聞こえますか？』

『そちらのお嬢さん方！聞こえますか？』

突然放たれた言葉に、なのは達は一瞬驚く

『あ、此処です。坊ちゃんの手に収まっている剣です』

その声に言われた通りに少年の手に眼を向ける

『やっと気付いてくれましたか？』

剣が喋っていた。

剣の持ち手部分にあるコアのような物が、剣が喋るにつれて光が点滅している為に間違いは無いだろう

「インテリジェントデバイス？」

『はい。ボクはこの世界で言う処のインテリジェントデバイスに分類されます』

なのはの問いに剣は言葉を返す

『実はボク達、貴女方の言う“次元漂流者”みたいなんです』

シャルティエは相手の反応を待つ

この世界に流れ着いた際にコアに入って来た情報の1つにあった“次元漂流者”

死んだ身とはいえ、一応これの分類に自分達は入ると考えたシャルは先手とばかりに言葉を撃いだ。

“次元漂流者”という肩書きを手に入れてしまえば手を出される事は無い

その読みが当たったのか、目の前の少女達は何かしら話し合っている

「分かりました。しかしどの道、機動六課で貴方の事を聴取する事になります」

『（やはり言い逃れは無理でしたか…）』

黒い奴の言葉にシャルは黙り込む

『坊ちゃん…。如何致します？』

「好きにしる…」

『分かりました。そちらのお二方！そちらに従いますので武器を納めて下さい！』

その後、リオンとシャルティエは一切口を開くこと無く、迎えに来たへりに乗り込み機動六課へと連れて行かれた……。のだが

「…どういう事だ！」

リオンは現状に怒りを見せる

元の世界には無い乗り物に乗せられ、見た事も無い建物の中の一室に入った途端、シャルティエが取り上げられてしまったのだ。

『ちよつと！ 坊ちゃんの所に返して下さいよ！』

「黙れ。 大人しくしていれば私達は何もしない」

部屋の片隅ではシャルティエがピンク色の髪の子と言いつつ争っている

ただまあ、シャルティエに関しては問題無い

仮にもソーディアンだ。

いざとなれば、シャルのみでこの建物を破壊する事は出来るだろう

問題はリオン

剣や晶術の腕は立つが、それもシャルティエあってこそ

流石に丸腰で戦える力は無い

「いきなりこないな事をして申し訳ありません」

リオンに向かい合い、変わった口調で話し掛けて来る女

時空管理局遺失物管理部機動六課課長

名前は『八神 はやて』

「全くだ。お前達、礼儀を知らないのか！」

「本間に申し訳あらへん。けどな、君の力はこの世界には無いもんなんや。せやから、詳しく聞かせて欲しいんや」

『それなら、ボクから御説明致します』

はやてに答えるのはシャルティエ

その申し入れを許可したはやてにシャルティエは自分達がこの世界に来た経緯を話した。

だが、その内容は所々に嘘を混ぜている

ソーディアンは戦争の為では無く新技術の試作品として作られたと説明

勿論、リオンの最期など語る訳も無く

シャルティエの実験中に機械の誤爆に巻き込まれてこの世界に来てしまったと説明

そして最後にシャルティエは付け足す

『はやてさん…でしたっけ？ ボク達を元の世界に帰してくれようとして下さるのは有り難いんですが…。残念ながらボク達は帰りません』

「何でなん？」

「そもそも帰る必要が無いからだ」

そう答えるリオンからは、何も聞くな、という威圧が漂う

はやて達もどうにかしてあげたい処だが本人達が言っている以上、

これ以上踏み込む事は出来ない

『時が来れば何れは話しますよ。　ね？坊ちゃん』

「…………ふんっ」

そつぽを向くりオン

シャルティエは苦笑い

「……………ん？」

そつぽを向いた拍子にリオンは1人の少女と目が合った。

先程、白い服を着てリオンの杖を向けていた少女

名前は『高町　なのは』

一方的に行われた自己紹介で名前を覚えていたリオンは自分を見続けていたのは向かって口を開いた。

「何か用か？ 高町なのは」

「……ふええ！？」

声を掛けられると、思っていなかったのか、なのはは奇妙な声を上げると必死に両手を振り、何でも無い、と弁解した。

《なのは、どうかしたの？》

フェイトは念話でなのはに聞く

先程から傍目から見ても、なのはは異常と言っても良い程にリオンを見詰めていたのだ。

《……うん。あの子の事なんだけど……》

《彼がどうかした？》

《声がお兄ちゃんにそっくりなの……》

《確かに恭也さんに似てるね。二刀流だし》

「そついえば君達の名前をまだ聞いて無かったな？教えてくれへんか？」

リオンと恭也を重ねていたのはとフェイトを余所にはやては目の前の少年に名前を問う

「僕の名前はジユ……。 リオン。 『リオン・マグナス』だ」

リオンは一瞬、仲間が付けてくれた名を言いそつになつたが言い直す

この世界では素性を隠す必要は無いと判断した上での自己紹介

勿論、リオンという名も偽名だが

『ボクは坊ちゃんソーディアン。この世界で言うインテリジェントデバイスのシャルティエです。気軽にシャルとお呼び下さい』

今だにシグナムに没収されたままシャルティエは自己紹介をした。

「リオン君にシャルやね。…いきなりなんやけど2人…？ シャルは人として数えてええんかな？ とにかく、2人をお願いしたい事があるんや」

『話の流れ的に坊ちゃんのを貸して欲しいとかですか？』

「うん、そうや」

手を目の前で合わせて“お願い”のポーズを取るはやては満面の笑顔でリオンにせがむ

「リオン君。機動六課に手を貸してくれへんか？ 管理局は万年人手不足やねん」

「僕の知った事か…！ 何で僕が手伝わなくてはならない」

『でも坊ちゃん。生活はどうするんですか？ 衣食住が安定した所を探すのは並大抵なことじゃありませんよ？』

シャルに言われりオンは言葉に詰まる

流石に衣食住の確保に背に腹は替えせない

「しかし…僕はお前達のような魔導師では無い」

「その辺は民間協力者とか、ボランティアとか、上手い具合に私以上に通すさかいに」

『坊ちゃん。お金が無くちゃ、アイスキャンディーもプリンも食べられませんよ』

「……馬鹿っ、シャル！ 余計な事を！」

「ほほう。リオン君は甘い物が好きなんか？」

はやてが面白そうな顔でリオンを見ている

「どや？協力してくれたらリオン君の食事にプリン付けるで？」

「……なっ！ 卑怯な！」

「卑怯で結構。それよりどないする？協力の話は？」

「……………くっ。シャル、お前の所為だぞ」

『でも坊ちゃん。こうでもしないと本当に野垂れ死んでしまいますよっ。』

流石にそれはマズイ

別世界に来てまで野垂れ死になど…

「……………ちっ。分かった。手伝い程度で良いなら協力してやる」

「本間か？　ありがとなりオン君！」

「お待ち下さい、主」

2人の会話に割って来たのはシャルティエを手に持ったままのポニールテールの女性

最近では“おっぱい担当”と言われてしまっている『シグナム』

「どうしたんや、シグナム？」

「主、本当にこのような男に協力して貰うつもりですか？」

『ちょ！貴女！ 坊ちゃんに向かって“このような”とは…！』

「お前は黙っている。主、私にはこの男にそれ程戦う力があるとは思えません」

「でもなあシグナム。シグナムかて、さっきなのはちゃんから見せて貰ったやろ？」

はやてが言うのは、リオンを六課に連れて来た際に隊長陣で見たりオンの戦闘記録

あの時、なのはがレイジングハートで記録していた物だ。

その時のシグナムは、リオンの事を“認めない”というよりも寧ろ“戦ってみたい”と言って

「シグナム…まさか……」

「はい。本当にこの男が我々に協力するに値するかを私が直接リオンと戦って見極めたいと思います！」

「…戦闘マニアが…」

シグナムの本音に、部屋の片隅に居たヴィータが溜息をついていた。

『機動六課』（後書き）

うん。シグナム姐さんってこんなバトルマニアだっけ？

今回はシグナムとの模擬戦です。

クロスSSでは、大体の作者様がシグナムとの模擬戦を書いていますよね。

僕も「またシグナムか」と思いつつ読んでいたんですが…

うん。書いてたら姐さんを起用する理由が凄く分かります。

扱い易いですもん。姐さんは

後、はやて…

関西弁で書いたらはやてに見えるんじゃないかと、ふと思ったり

リオンと恭也さんは中の人繋がりですからね…。

いつかネタとして使いたいです。

ネタといえば、なのはにはティルズキャラと同じ声優さんも沢山居ますね。

いつか番外編として書いてみたいです。

『闇の炎と烈火の将』（前書き）

姐さんとの模擬戦です。

先に言っておきます。

シグナムファンの皆さん申し訳ありません！

『闇の炎と烈火の将』

成り行き上、シグナムと模擬戦をする事になってしまったリオン

リオンには拒否する暇も無くシグナムは意気揚々と部屋を出て行き、後に残ったシグナムを知る者達は苦笑いするしかなかった。

「リオン、お前も厄介なのに目を付けられちゃったな」

同情の眼をリオンに向けるヴィータ

リオンは仕方無く訓練所へと案内されながら向かった。

「……………本当に何でもありません」

訓練所の……いや、この世界の技術力の高さにリオンはまたも驚かさ
れる

何せ、何も無い所に“ビル”と呼ばれている建物が現れたりするの

だから

セインガルドの技術では有り得無い程だ。

故にリオンは魔法世界への驚きを隠せなかった。

「どうした？ マグナス」

「いや、改めて魔法という物の異常さを感じただけだ。それよりもそっちこそどうした？ さっきまで僕の事をリオンと呼んでいたのに、今になってマグナスと呼ぶのか？」

「私にはこっちの方が言い慣れているだけだ」

それよりも、とシグナムはデバイス『レヴァンティン』を鞘から抜き構える

「準備は良いか、マグナス？」

シャルから聞いた“騎士甲冑”に身を包むシグナムはやる気に満ち溢れている

顔を横に向けると、遠くの高台から隊長陣達がこちらを注目していた。

それは別に構わない

“見られている”という事は気に喰わないがシグナムと戦闘に入ったら気にならないだろう

それに、此処に入る前になのは達から“計測する”と言われていた。

この世界の方法でリオンの戦闘力を計るつもりなのだろう

が、それよりも気になるモノがそこに居た。

「……………おい、シャル」

『どうかしましたか？坊ちゃん』

「あの宙に浮いている小さな生き物は何だ？」

リオンの視線の先には、はやての横で浮いている小さな人型生物

『さあ？ボクにも分かりません』

「本当に何でもありだな……」

『ですね。それよりも坊ちゃん。今は目の前の戦いに集中しましよ
う！』

「言われなくても分かっている」

リオンは視線をシグナムに戻すとシャルティエと、シャルから生成された短剣を構える

戦闘準備は完璧

「……シャル……」

『分かっていますよ、坊ちゃん』

誰にも聞こえない声でのやりとり

シャルはシグナムに気付かれないように晶術の準備に入った。

「2人共、準備は良い？」

なのはの声が響く

「それじゃあ、始め！」

なのはが手を振り上げ試合の開始を宣言する
リオンが動いたのはその直後だった。

「シャドウエッジ！」

突き出されたシャルティエ

だが何も起こらな

「……………っ！」

シグナムは大きく横へ跳んだ。

理由は無い

ただ本能で危険を感じた。

シグナムが横に跳んだ次の瞬間、先程までシグナムが居た場所の地面から闇の槍が飛び出す

「（魔法陣の展開も詠唱も無しだど！？）」

自分達の知る魔法とは全く違う発動方法に驚くシグナム

遠くからモニター越しに見ていたはやて達も驚いている

なのはやフェイトは見るのは2度目となるが、やはり驚きがある

魔法陣展開無しの一撃

それだけでも驚いている彼女達ではこの先を予測する事は出来ないだろう

だからこそ、シグナムは身を持って知る

晶術は単発発動では無いという事に

この時、シグナムは晶術使用後のリオンを隙だらけとばかりに思っていた。

だが、リオンはシャルティエを掲げたまま更に晶術を発動する

追加晶術

「ブラッディクロス！」

「な…っ！ ぐあっ！」

シグナムは闇の十字架の直撃を受けて吹き飛んだ。

晶術を知らない彼女達だから仕方ないのだが、晶術は発動後に昇華させる事で連続使用できる

下級晶術『シャドウエッジ』

から、

中級晶術『ブラッディクロス』

へと。

そして最大の利点は、昇華させた追加晶術は詠唱破棄で発動させる事
詠唱をしていないと思われていたシャドウエッジだが、実際には詠
唱はしていた。

ただ、あまりにも短すぎる為に分からなかっただけ

そしてそこからの追加晶術

“詠唱”というロスタイムを限りなく零に近付けた連続晶術による
遠距離攻撃

唯一の欠点は、このシャドウエッジからの追加晶術では大したダメ
ージは与えられない事

「…………ふっ。いきなりだったが面白い魔法を撃つじゃないか、マ
グナス」

立ち上がるシグナムには手応えが全く無かったと言っても良かった。

「……ちっ。どれだけ防御が硬いんだ、あの女は……！」

『違いますよ、坊ちゃん。シグナムさん自体もタフですが、あの騎士甲冑が原因なんですよ』

「……何？」

『あの服、装着者を守るように出来ています。シャドウエッジとブラッディクロスは、あれに殆ど威力を吸収されたと見て間違い無いです』

「晶術は効かないのか？」

『中級以上の晶術なら多分ダメージは通るでしょうが、そうになると詠唱時間が発生してしまいます』

「そうになると奴に攻撃を与える手段は……」

『近接戦による無力化……ですね』

「……つくづく魔法とは何でもありだと感じるな……。仕方ない、行くぞ！シャル！」

『了解です、坊ちゃん！』

リオンはシグナムに向かって駆け出した。

真つ向勝負が好きなシグナムは正面から迎え撃つ

「はあああ！」

「たあああ！」

ガキインツ、とシャルティエとレヴァンティンが交わる

だが、均衡は一瞬

体格的にも力的にも負けているリオンは簡単に弾き飛ばされた。

『坊ちゃん！真正面からじゃ負けちゃいます！』

「分かっている！」

リオンは体勢を低くし、シグナムの間合いの僅かに外から一気に足を踏み込む

次の瞬間、リオンの姿は掻き消えた。

「幻影刃！」

「……………！」

聞こえてきたリオンの声はシグナムの背後

同時にシグナムの騎士甲冑のジャケットの胸元部分が綺麗に裂ける

「……………っ！」

体を突き抜ける痛み

そこでシグナムは理解する

リオンは一瞬で自分を斬り抜けたのだと…

胸部の痛みを耐えて直ぐさま振り向く

しかしその時には既にリオンがシャルティエを下から上へと振り上

げていた。

「魔神剣！」

「……くっ！」

近距離からの魔神剣は、切り上げの一撃と衝撃波の一撃

計二撃の攻撃となりシグナムを襲う

一撃目の振り上げは防いだシグナムだったが、二撃目の衝撃波に命中し蹠踉けた。

その瞬間をリオンは逃さない

振り上げたシャルティエはそのままに更に踏み込み、短剣を振るう

昇華剣技

「双牙！」

綺麗に命中した横薙ぎの一撃『魔神剣・双牙』の直撃を受けたシグナムは、双牙の特性である吹き飛ばしによって近くのビルの壁へと叩き付けられた。

この様子を見ていたなのは達はモニターに釘付けになっている
シグナムはリミッターを掛けられた状態であるが十分に強い
そのシグナムを圧倒する実力

戦力には即採用の範囲だ。

「そうか、それがお前の力か」

ビルに叩き付けられた衝撃で騎士甲冑が汚れているが、シグナム自身にはまだ大したダメージは通っていないのだろう

いや、少し息切れしている様子から見るに“それなり”にダメージを与える事は出来たようだ。

「ならば私も応えさせて貰おう！ レヴァンティン！」

『 Schlang e f o r m 』

ガギャンツ、と金属が外れる音が響く

レヴァンティンはその刀身を鞭の様に伸ばし予測不能な動きを始めた。

「何だ、あの武器は!?!」

『坊ちゃん!マズイです!あんなの直撃したら紙防御力の坊ちゃんは即死ですよ!』

まるで生きているかのように動き回る連結刃

シグナムに近付く事すら出来ない

「行くぞ、マグナス!」

「……くそっ!」

「飛竜一閃!」

後退するリオンを逃すまいと連結刃は神速の速さで襲い掛かる

ズゴオオンツ、とシグナムの放った連結刃はリオンの背後にある数個のビルを薙ぎ払うかの如く打ち崩した。

あまりにもその威力に土煙が舞う

「……………くそっ！」

『坊ちゃん！来ます！』

何とか奇跡的に回避したりオンだったが、シャルティエの警告を受けて直ぐに前方を確認する

そこには、連結刃を元の剣に戻したシグナムが迫って来ていた。

「今のを避けたか、マグナス！ ならば次はどうだ！ レヴァンテインー！」

『Explosion』

ガシャンッ、とレヴァンティンから葉莢が排出され刀身に炎を纏う

『坊ちゃん、あれは流石に…!』

「泣き声を言う暇があるなら受け止める! シャル、折れるなよ!」

「マグナス! 止められるなら受け止めてみせる!」

そもそも、飛竜一閃を受けた時点で動けそうに無いダメージをリオンは負っていた。

その状態のリオンにシグナムは容赦無く、自身の奥義を叩き込む

「紫電…」

一撃目は横薙ぎ

強力な一撃にリオンの防御など簡単に崩された。

「…一閃!」

二撃目は振り下ろし

リオンは崩されていた防御を整えて受け止めるが…

「…馬鹿なっ！この僕がつ！」

受け止める事も虚しくリオンの身体は吹き飛ばされ、ビルを突き抜けた。

シグナムの容赦無い猛攻はモニターを見ていたなのは達に嫌な汗をかかせる

「リオン君……大丈夫かな？」

「シヤマル呼んだ方がええかもしれんな」

『坊ちゃん！大丈夫ですか！坊ちゃん！』

「……嫌いぞ…シャル。 傷に響く…。 ヒール！」

瓦礫の中から起き上がったリオンは自身に回復晶術を掛ける

リオンの怪我は酷いものであった。

頭を始め体中から血が流れ、着ていた服のマントは既に引き千切れて無いに等しい

服もかなりの箇所が裂けている

怪我に関しては回復晶術によって塞いだだが、ヒールは中級晶術

完璧に傷を塞ぐには心許ない

そもそも回復はリオンでは無く“姉”の役割だ。

リオンは補助的に使えるだけ

「しかし…紫電とはよく言ったものだ。完全に炎じゃないか」

『爆炎一閃って感じですね』

「全く、つくづく僕は“炎”に縁があるみたいだ」

『ディムロスとスタンの事ですか？』

「それ以外に何がある」

シグナムの紫電一閃を受けた時に思い出す

かつて海底洞窟での死闘の果てに、スタンと炎を纏ったディムロスによる『殺撃舞荒剣』の一撃を…

「……だが、スタンに比べればマシだな」

リオンは立ち上がりながらシャルティエを構え直す

「シグナムの一撃は威力も何も申し分無い……が、スタンに比べれば甘いな」

確かにシグナムの一撃は大ダメージを受ける程の威力

威力だけをみればスタンよりもシグナムの方が上

だが、スタンに喰らった一撃の方がもつと重かった。

理由は分からない

スタンとの腐れ縁に近い付き合いと、出会ったばかりのシグナムとの差なのか

どうでも良い。

「シグナムの炎より、あいつの炎の方が熱かったな」

『ですね』

それが唯一の結論

「シグナムの今の一撃は奴の持つ奥義だろうな」

『威力から見てもそうでしょうね』

「あまり手の内は見せられないが折角だ。僕の力を認めさせる為に
応えてやるつもりじゃないか」

『どつするつもりですか？』

「炎には炎だ……」

貫いたビルを見ながらシグナムはレヴァンティンを構えた。

姿は見えないがリオンの気配は消えていない

リオンからの襲撃に対処出来るように周囲に気を配る

「エアプレッシャー！」

「……………っ！」

リオンの声と同時にシグナムの周囲の空気が歪む

シグナムが避けた後には強烈な圧力が地面を抉った。

「……ほう。まだ戦えるか、マグナス！」

口端を上げ楽しそうな表情をするシグナム

『生憎、坊ちゃんは限界です』

「余計な事を言つな、シャル！それよりも僕に合わせるよ！」

『分かってますよ！坊ちゃん！』

ビルから飛び出しシグナムに向かって駆けるリオン

その足が地を踏み込んだ。

「幻影刃！」

リオンの姿が消える

だが、同じ手が二度も通用する相手では無い

「甘い！」

シグナムはリオンが消えた瞬間に背後に飛び退く

その予測通り、リオンの姿は目前に現れ

「空襲剣！」

「……つぐ！」

リオンは更に踏み込みシグナムを貫く

そして跳び上がりながらの斬り上げ

突きならまだしも、二撃目の斬り上げは背後からの一撃という事もあつてかシグナムは対応出来ていない

ならば、今の内にダメージを与える

跳び上がったリオンは直ぐさま体勢を整え技を放った。

「臥竜閃！」

「……ぐうっ！」

昇華剣技

「臥竜滅破！」

「ぐあぁっ！」

臥竜閃で一撃、臥竜滅破で二撃を喰らったシグナムは完全に体勢を崩した。

着地したりオンは腕をクロスしてシャルティエと短剣を振りかぶる

片足を踏み込み、地の砂塵を大気中へと舞い上がらせた。

そして、両手の剣を擦り合わせて火花を起こす

「粉塵裂破衝！」

ボンツ、と大気中に舞った砂塵が爆発する

小さくも“爆発”という威力によってシグナムはダメージを負った。

これでシグナムの体勢は絶対に戻らない

そして、“爆発”によってシグナムへのダメージも蓄積出来た。

リオンはシグナムとの戦いで溜まっていた“見えない力”を解放する

『プラスチックキャリア
B C』

リオンの中で何かが外れる感覚

そして両腕に集まる闇の力

「いい気になるな!」

リオンは再度交差させた腕に闇の炎を纏わせ振り抜く

「塵も残さん!」

振り抜かれた闇の炎剣にシグナムの騎士甲冑など意味を成さない
闇の炎に斬られ、炎に抱かれるように闇に捕まるシグナム
リオンは両手の剣を合わせ、頭の上へと振り上げた。

「奥義！」

振り下ろされるシャルティエ

そのシャルティエと短剣には禍禍しい闇の炎が燃え盛る

シグナムは振り下ろされる闇を見詰める事しか出来なかった。

「浄破滅焼闇！」

振り下ろされたのは悪魔の技

闇の炎はその場に居た者全員を釘付けにする

ゴオオオツ、と燃え盛る闇の炎は鞭の様にしなりシグナムを飲み込んだ。

闇の炎の熱風は訓練所を覆い、なのは達が観戦していた高台まで吹き荒れる

リオンとシグナムが戦っていた場所の半径数メートルは闇の炎に飲み込まれ、リオンの言葉通り塵一つ残さない

「……………私は…生きているのか…」

その闇の炎を向けられた本人であるシグナムは、普段の彼女からでは考えられないであろう程に呆然とし震えていた。

レヴァンティンは中破したものの健在

シグナム自身もダメージは何故か無い

先天スキルの炎熱変換の御蔭か、それともリオンが外したからなのか

どちらにしる戦闘には問題無い

普段の彼女ならば戦闘を続行していただろう

だが、今の彼女は出来なかった。

自分の炎とは“モノが違う”リオンの炎

彼女が震えている理由は武者震いが7割、恐怖が3割

このような強者とまた戦いたいと思う一方、次に戦えば殺されるかもしれないという思い

モニター越しのなのは達もリオンの繰り出した秘奥義の一撃に固まる

シグナムが敗れたというだけでなく、力が抜けたように腰を地に付けている事…

そして、リオンの秘奥義の威力に…

シグナムもなのは達も視線は一人の少年を捉えて動かない

この模擬戦の勝者はただ一人

少年はシグナムに背を向けて流し目をするように敗者を見る

この戦闘を見ていた全ての人の視線を受け、リオンは僅かに残る闇の炎を纏ったシャルティエを背に

そして炎を振り払うようにシャルティエを振り下ろしながら静かに、それでいて聞き取れる大ききの威圧の籠った声で呟いた。

「闇の炎に抱かれて消えろ！」

『闇の炎と烈火の将』（後書き）

姐さんが震える事ってあるのかな？

この後ですが、結局シグナム姐さんは恐怖をも模擬戦のスパイスとして何の問題もなく、寧ろ前よりも戦いに楽しみを見出だしちゃってます。

作中には時々、リオンが原作で言った台詞などが入っています。

分かる人は居るかな？

六課メンバーって、テイルズキャラにすると

- ・ はやて パスカル
- ・ フェイト コレット
- ・ エリオ コハク
- ・ ティアナ エステル
- ・ スバル パティ

十分ネタに使えますね（笑）

尚、この小説ではカップリングは今の処は考えていません。

坊ちゃんはマリアン一筋ですからね。

ただ六課メンバーではフェイトの優しさは恐らくマリアンに近いものがあるでしょうから心は許すと思います。

今回は、坊ちゃんとフォワード陣との出会いです。

『顔合わせ』（前書き）

済みません、今回はグダグダです。

『顔合わせ』

リオンとシグナムの模擬戦は誰も予想しない結末を迎えた。

リオンがリミッター付きのシグナムと互角。……予想範囲内

リオンがシグナムに勝ってしまった。……まだまだ予測内、問題無い

リオンが訓練施設を覆う程の炎を剣から放った。……“予想外”

あまりにもその衝撃に誰ひとりとして動けなかった。

そんな場を元に戻したのは妖精の様に小さな少女『リインフォー
ス？』の声

「はやてちゃん！リオンさんの結果が出ました！」

リインフォースは情報端末を触りながらはやてに話し掛ける

リインは今回の模擬戦を通して、リオンの戦闘能力を録画、及び解
析していた。

その結果が出たようだ。

はやてだけで無く、なのは、フェイト、ヴィータもリインの解析結果を待つ

「…………ええつと…その…ですね」

だが、唯一結果を知っているリインは何処か歯切れが悪い

何度も解析結果を見直し、自分の間違いでは無いかを確認している

「リイン。どないしたんな？」

「その…ですね…。はやてちゃん、リオんさんの解析結果が何度やってもおかしいんですよ」

そう言い、リインは解析結果の出たデータを皆に見せた。

【名前】

リオン・マグナス

【基礎能力】

リンカーコア 無

魔力資質 無

身体能力 A+

空間把握 A-

状況判断 A A-

魔力生成力 無

【戦闘・魔法特性技能】

陸戦技能 A A+

空戦技能 無

補助技能 E

戦闘技能 S-

近接戦闘技能 A A+

中距離戦闘技能 A-

遠距離戦闘技能 B

単体戦闘技能 A A A-

広域戦闘技能 D

総合攻撃技能 A A+

総合防御技能 E

総合評価 A-

「何やこれ…?」

結果を見たはやては思わず間抜けな声を出した。

「いやいや、突っ込み処が多過ぎて何も言われへんわ!」

「そんなですよ! 特に“無”なんて滅多に見ませんよ!」

半ばパニック状態の2人

勿論、この結果を見た他の3人も“有り得ない”という言葉が頭の中で廻っていた。

何せ、ガジェットを1人で殲滅する実力

それでいて殆ど本気だったりリミッター付きシグナムをも倒したという事実

間違いなく『S-』はあると思っていた。

だが、蓋を開けてみればどういふ事か…

『A』とは決して低い訳では無い

世間一般から見れば十分過ぎる程のランク

しかし機動六課内で見ればどうか…

新人フォワード達と大して変わりはない

リオンが予想以上にランクが低い事にも驚きだが、それよりももっと気になる事がある

「この『リンカーコア 無』ってどういう事だ？ あいつ魔法を使ってたじゃねえか」

ヴィータの指摘した通り、気になるのはそこだ。

リオンは魔法を発動したにも関わらず“リンカーコアは無い”という結果

「でもですね。リオンが驚いたのにはもう一つ理由があるんです」

その言葉に全員がリインの方を振り向いた。

リインが驚いたもう一つの理由

リインはリオンが『浄破滅焼闇』を放ったシーンをリプレイで再生する

「これがどないしたんな？リイン」

「実はですね…。リオンさんがこの技を放つ瞬間だけ、シャルティエさんに集まった力が『オーバーS』ランクなんです」

「何やて!？」

その事実はその場に居た者を再度驚かせるには十分過ぎた。

リインは続ける

「この技だけのランクを計れば『SS-』の威力なんです」

「って事は、あいつは『A-』『ランクでありながら『SS-』の威力の魔法を放てるって訳か？」

「そうなんですよ、ヴィータちゃん。しかもこの技、なのはさんの

スターライトブレイカー

“SLB”みたいに大気中の魔力を使用しているのでは無く、リオン自身が出してるみたいなんですよ！」

リオンの説明に、はやて達は頭がこんがらがって来た。

強いのに『A-』

それでいて『SS-』の技を使う

なのにリンカーコアは無い

疑問ばかりが残る

丁度その時、海上訓練施設からリオンとシグナムが戻って来た。

「なあリオン君！聞きたい事があるんやけど！」

「……嫌い……大声を出すな。そういう女は嫌いだ」

リオンの一言に撃沈するはやて

そんなはやてをリインは必死に励まし、なのはがりオンに疑問をぶつける

『そういえば説明していませんでしたね。坊ちゃん、此処は僕から説明します』

そう言い、シャルティエは自分の力“晶術”について簡単に説明した。

晶術が使えるのはソーディアンだけということ

晶術は魔法とは全く異なるということ

シャルティエの晶術を発動出来るのは“ソーディアンマスター”であるリオンだけということ

だが、敢えて深くは喋らない

あくまで表面上の説明だけ

自分達の手の内を知られたく無いと思ったシャルティエの判断

「（シャルの奴…頭まで良くなったな…）」

高性能になっただけで無く、頭の良くなった相棒を相変わらず不思議な目で見るとリオンだった。

「それじゃあ、最後に放ったあの技は？」

『BCの事ですね』

“BC”という単語に、なのは達は首を傾げる

『ああ、説明不足でしたね。BCと言うのは簡単に言えば戦闘中に溜まり溜まった高揚感などを解放する事で、一瞬だけ坊ちゃんのリミッターを外す手段です』

「そのリミッターを外した結果が、お前達が見ていた『浄破滅焼燬』だ。あれなら魔導師とも戦えるだろ」

「あんなの使われちゃ、魔導師でも危ないかもね」

「そうだね、なのは。…でもリオン、リミッターを外すなんて体に負担を掛ける事はあまりしない方が良くないかな？」

フェイトの諭すような言葉にリオンは呆気に取られたかのような表情をする

「お前、何を言っているんだ？BCはあくまでも一瞬だけのリミッター解除だ。僕の体に負担が掛かる訳無いだろ…」

「…それでも体には気をつけなくちゃ。ね？リオン…」

「………………。お前と話していると調子が狂う…」

リオンとフェイトの間に微妙な空気が流れる

その空気が我慢出来なかったのか、はやてが口を開いた。

「そういえばリオン君。かなり服が破れてもってるけど、代えの服はあるんか？」

「…………いや、無い」

『ですよ。この世界に来た際には着替えなんて持ってませんでし
たし』

それを聞いたはやては少し考え…

「よし。それならリオン君に六課の制服を貸してあげよか」

「……別に必要無い…」

「まあまあ、そないな事言わんと。なのはちゃん、リオン君を隊舎
に連れて行ったって」

リオンの意見など聞く耳持たないはやての提案

リオンは余計なお節介は受けたく無い為、この場から立ち去ろうと
するが、いつの間にか手足が桃色の輪っかで拘束されていた。

「ごめんね、リオン君」

「おい！なのは！どういっつもりだ！」

「部隊長の命令は絶対なの」

「……と言う訳でお着替えタイムや！」

「お前達……！」

『坊ちゃん、諦めましょう』

リオンはバインドで拘束されたまま、なのはとはやてに隊舎内へと連行されて行った。

翌日

模擬戦に満足したシグナムに認められたリオンは六課への“民間協力者”として入ることとなった。

あその後、自分のサイズに合う制服を無理矢理押し付けられたリオンは六課にある“来客用”の部屋で一晩を過ごした。

「……しかしこの服は動き辛いな……」

着る服が無い為、仕方なく制服に袖を通すリオン

だが、自分の居た世界では着た事が無い服だけに体が締め付けられるように苦しい

「こんな姿……スタンやルーティに見られたらいい笑い物だ」

『じゃあ仮面でも被りますか？』

「余計笑い物だ」

『でも仕方ないですよ坊ちゃん。着る服が一着だけだと辛いですし……』

「その一着は、昨日の模擬戦で使い物にならなくなってしまったがな」

『坊ちゃん、その事なんです……』

「……何だ？」

『昨日のシグナムさんとの模擬戦を基に今、坊ちゃんの騎士甲冑“モドキ”をボクの中で構築しています』

シャルティエは説明する

今、自分の中でリオンに合った騎士甲冑もどきを構築している事を…

シャルティエの話によれば、シグナムが戦闘時に騎士甲冑を纏ったように、戦闘中だけリオンの動きやすい服を纏えるようにデータを構築しているらしい

だが、晶術と魔法は違う為にリオンの服には騎士甲冑程の防御力は無い

ただ、データで構築している為、服が破れる事は無いらしい

『一応、晶術を魔力に変換して擬似的に魔法障壁を張れるようなプログラムは同時進行で構築していますが、完成には時間が掛かります。そもそも魔法はボクの本分では無い為、合って無いような物です。がね』

「構わない。相手の攻撃に当たらなければ良いだけだ」

リオンはそう言うと、何もする事が無くシャルティエのデバイス機能の再確認を始める

それからどれくらい経っただろうか

ドアが叩かれて外に出てみると、そこには昨日の模擬戦時に見た“謎の人型浮遊生物”もとい、ラインが元気良く挨拶して来た。

「何だお前は！新手の妖精型モンスターか！」

「違いますう！リインは妖精でもモンスターでも無いです！リインはリインですう！」

そんなやり取りを5分程続けていると、いつの間に来たのかはやてが割って入る

どうやらリオンを食堂に案内する為にリインを迎えに送ったのだが帰って来ない為、はやてが様子を見に来たらしい

はやてに食堂へ案内されたリオンは、予めはやてが食堂に話を通していた“リオン専用朝食”を受け取る

どこら辺が“専用”なのかと言うと、全体的にご飯の量は少なく、デザートにプリンが付いている

尚、デザートは日替わりだ。

朝食を運んでいると、はやてに紹介したい人が居ると言われ付いていく

「4人共、ちよつとええか？」

「や、八神部隊長!？」

はやてが朝食を食べていた4人組に声を掛けると、その中のオレンジ頭が慌てて立ち上がり敬礼した。

それに気付いた青髪、赤髪、小さいピンクも慌てて立ち上がり敬礼する

「私の事は“はやて”でええし、今くらいは敬礼もせんでええのに」

そう言いながらもはやては敬礼を返し、はやての頭近くに浮いていたリインも敬礼を返す

その様子を見ていたリオンは、オレンジ頭と目が合った。

「あの、八神部隊長。そちらの人は…?」

「ん?ああ。リオン君の事か?昨日、保護した次元漂流者なんやけ

ど今日から民間協力者として六課を手伝ってもらっんや。因みに決
め台詞は『闇の炎に抱かれて消える』やで」

「……おい……っ！余計な事を……！」

リオンが止めるには既に遅く

はやての言葉を聞いた4人の反応は

オレンジ頭がややドン引き、

青髪と赤髪は目を輝かせ、

小さいピンクは純粹に聞いている

「ねえ〜ティア！あたしも決め台詞作るっかな〜？」

「止めてよね。恥ずかしい」

「闇の炎に抱かれて消える……か」

「ねえエリオ君。どっという意味なのかな？」

青髪はオレンジ頭に決め台詞について問い掛け、オレンジ頭はそれを却下する

赤髪は何度も復唱していた。

『坊ちゃん、あっという間に人気者ですね』

「……黙れ、シャル」

リオンは4人の近くの席に座り食事を始める

食事が一段落した処でリオンは4人達の自己紹介を受けた。

青髪が『スバル・ナカジマ』

オレンジ頭が『ティアナ・ランスター』

赤髪が『エリオ・モンディアル』

小さいピンクが『キャロ・ル・ルシエ』

そしてキャロの隣に居る小さい龍が『フリード・リヒ』

フリードは巨大化すると聞いた時、リオンは信じられなかった。

朝食を終えたFW陣は仕事へと戻る

が、はやてやなのは提案で昨日のシグナムとの模擬戦を見る事になった。

殆どの局員が仕事に戻った中、リオンははやてに言われ食堂で待機している

『坊ちゃん、ボク達どんな事をするんでしょうね？』

「そんな事、僕が知る筈無いだろ……。……。全く……。何でこんな事になったんだろっな……」

リオンはお代わりしたプリンを口に運びながら溜息をついた。

『顔合わせ』（後書き）

リインって、『リイン』なのか『リイン』なのか分からなくなる時がありますよね。

はい。今回の懺悔ですが…。

リオンの能力値は勝手に七夜の判断で付けさせて頂きました。

リオンって、ソーディアンマスターだけど結局は人間ですので限界があると思うんです。

ですので、魔導師には根本的な部分で負けてしまいます。

そこで『BC』や上級晶術の定番

全てのBCは『オーバース』

鬼畜性能の悪魔の槍や、愛する人の名の技、及び仮面装着時に使っていた仮面割れ秘奥義は『SS』を軽く上回ります。

ただ使ってしまうとバランスが大崩壊してしまうんですよね。

坊ちゃんはバランスブレイカーなんです。

作中でFW陣の自己紹介がダイジェスト風になっていたのは、七夜がFW陣の階級を忘れたからです。

又、七夜の文才と気力の無さから本文中には書けていませんが、リオンがフェイトに「調子が狂う」と言ったのはフェイトの言葉にマリ안의優しさを重ねてしまったからです。

P.S .

早く『管理局の冥王』と戦いたいですよ〜！(by・リオン)

『リオンとエリオ』（前書き）

ええ〜っと…。

取り敢えず、FWファンの皆さんごめんなさい。

今回は坊ちゃん無双です。

『リオンとエリオ』

はやてに食堂で待つように言われて早30分

苛立ちを隠しきれないリオンは6個目のプリンを口に運んでいる

「……………あれ？リオン、どうかしたの…？」

声を掛けられ振り向いてみると、そこに居たのはフェイト

偶然、食堂前を通り掛かったフェイトはリオンが独りでプリンを食べているのが目に入り声を掛けたのだ。

「……………はやてに食堂で待っているとされたんだが…。肝心のあいつが来ない」

「はやて忙しいからね…。手が離せない用事があって遅れてるのかも…」

「……………そうか」

会話はそこで途切れる

リオンは再びプリンに手を伸ばすのだが…

「……………おい…！」

「…ん？…何かな？」

「…何故お前はそこに突っ立っている！」

テーブルの向かい側

食堂の入口に立ち尽くしているフェイトに向かってリオンは文句を言った。

「…邪魔…かな？」

「ああ。目障りだ！」

「……………そう…だよね」

きっぱりと“邪魔”とリオンに言い切られたフェイトは歩き出し

「……じゃあ、隣良いかな？」

リオンの隣の席に座った。

「……お前…っ！今、僕が言った事が聞こえなかったのか！目障り
だと言ったんだ！」

『坊ちゃん、落ち着いて下さいよ。相手は女性ですよ』

「知った事か！」

リオンは悪態をつくと座っている席を一つ移動し、フェイトから離れる

暫くの沈黙の後、口を開いたのはフェイト

「……リオンって、元の世界で何か剣術でも学んでた？」

「……唐突だな……。何故そう思う…？」

「……昨日のシグナムとの模擬戦を見せて貰ったけど、リオンの動き

って無駄な動きを極限まで減らしてるように見えたから……」

そこで丁度6個目のプリンを食べ終えたりリオンはスプーンを置き答えた。

「……確かに、僕は剣術を学んでいた」

「……やっぱり。……だから体格差でシグナムに負けていても勝てたのかもね……」

「体格の事は言っつな……！」

「……大丈夫だよ。……リオンも男の子なんだからこれから伸びるよ……」

「…………っ！」

リオンは顔をフェイトから逸らす

リオンの1番気にしている身長的事に触れられたのに怒る気にならない

理由は簡単

フェイトの言葉と笑顔が、マリアンと重なったから…

「……本当にお前と話していると調子が狂っ…」

「……えっ…私、何かリオンの気に障る事した…かな？」

「……いや、お前の所為じゃない…。ただ…似ていただけだ」

「……似ていた？」

「……何でも無い。今聞いた事は忘れる」

そう言い、話を終了させたリオンははやてがまだ来ない事を確認し
本日7個目のプリンを取りに…

「……待って、リオン」

行こうとしたがフェイトに止められた。

「……リオン、今食べたプリンは何個目？」

「……6個目だが……」

その個数を聞いたフェイトは、むっ、と可愛らしく頬を膨らませる

「……甘い物の食べ過ぎは駄目だよ。好きでも甘い物は1日1個まで……」

「……ふんっ、下らない。僕が何を何個食べようと僕の勝手だろう」

「……そう言う訳にはいかないんだよ、リオン。私達に協力してくれるならリオンの体はリオン1人のものじゃ無いんだよ。ね？」

113

その注意の仕方、諭し方がリオンの中ではマリアンと被る

「……っ。……分かった。今日はこれくらいにしておく……」

「……次からは気をつけてね」

そう笑顔で言うと、フェイトは食堂から出て行った。

結局いつまで経ってもはやてが来ない為、部隊長室へ行ってみれば
フェイトの言っていた通り手が離せない仕事をしていたらしく入室
したリオンにも気が付かず

リオンがはやての近くまで近付いて漸く気が付くほどだった。

はやてに謝られながら海上訓練施設に行くように言われ行ってみる
と新人達がハードな訓練をしているのが目に入る

「……あれ？リオン……どうかしたの？」

「……フェイトか……。いや、はやてに此処に行けと言われたんだが
……話は聞いてないのか？」

「……私は聞いて無いよ……」

フェイトは執務官の仕事が早く済んだらしく、リオンと別れた後直
ぐに此処に来たらしい

が、リオンが来るという説明は受けておらず

「その話なら、わたしがはやてちゃんから聞いてるよ」

FW陣の訓練を見ていたなのはが、そう言いながら近付いて来た。

「……なのはが……。一体僕は何の用で此処に来させられたんだ？」

「それは直ぐに説明するね」

そう言うと、なのははFW陣を自分の前へと整列させる

午後の訓練が終わるにしては早過ぎる為、FW陣も少し戸惑っているようだ。なのははFW陣の様子を見てから口を開く

「みんな、まだ動けそう？」

「」「」「はい！」「」「」

「じゃあ、フォワード4人とリオン君で模擬戦してみようか？」

「……えっ!?!」「」

「……何だと……?」

なのはの発言にリオンは、何も話を聞いていない、という表情

勿論、FW陣も模擬戦の話は聞いていないのだが、こちらは午後の訓練が始まる前にリオンとシグナムの模擬戦の映像でリオンの強さを目に見している

『坊ちゃん、此処の処戦闘ばかりですね』

シャルティエは他人事のようにリオンを哀れむ

リオンも流石に文句を言いたかったが“部隊長様”と“教導官様”の命令には逆らえない

恥ずかしい話だが、リオンがこの世界で食い繋いで行く為には彼女達にある程度は従うしかない

リオンは、この世界に来て多少のプライドは捨てなければならない時があるという事を学んだ。

しかもFW達はやる気満々

寧ろ、リオンに自分達の力が何処まで通用するかに燃えている

今更辞める事も出来ない

「……あの狸が……！」

『まあまあ、落ち着いて下さいよ坊ちゃん』

リオンのはやてへの怒りを宥めるシャルだった。

模擬戦前の作戦タイム

リオンの戦いを映像で見たFW達とは違い、リオンはFW達の戦闘スタイルは知らない

流石にリオンに情報が無いのは厳しいと考えたのはは簡単な4人の戦闘スタイルをリオンに教えた。

『……で、どうします？坊ちゃん』

「……何がだ？」

『応戦の仕方ですよ。なのはさんに渡されたデータを見る限り、坊ちゃんには圧倒的に不利ですよ』

シャルは自身の中に入れたFW達のデータを閲覧しながらリオンに自分達が不利である理由を説明する

特にスバルは天敵であり、スバルの零距离からの一撃は紙防御力のリオンに耐えられる筈も無く、下手をすればシグナムより硬いかもしれない魔法障壁の防衛

『……というか、ティアナさんの幻術も厄介ですね』

「……問題無い。あいつ等はまだ素人だ……。自分の戦い方を理解しているとは思えない」

『勝算はあると？』

「当たり前だ。…その為にはまずキャロを潰す」

リオンはシャルに今回の模擬戦の立ち回り方を説明した。

まず狙うのは、補助魔法持ちのキャラ

本来、戦闘になれば相手の指揮系統を崩す為にリーダーであるティアナを狙うのが最も良い

だが、これはあくまでも少数人数での模擬戦

例えばリーダーを倒しても力押しで負ける事も有り得る

ならば、力押しされない為にも能力を底上げする補助持ちを最初に倒しておくべき

そしてキャラを倒した後に狙うのはリーダーであるティアナ

先程も言った通り指揮系統を見出す目的

もう一つ理由としては、スバルやエリオと近距離戦中に中距離からの攻撃されると面倒臭いから

『それじゃあ、3番目に狙うのはエリオですね』

「……違う。3番目に狙うのはスバルだ」

『何ですか？スバルは坊ちゃんの手敵タイプですから先にエリオを倒した方が』

「…確かに、あいつのスタイルは僕の苦手なタイプだが後衛が居なくなればどうとでもなる。後衛を倒した後に一気にケリをつける」

そして、最後に狙うのがエリオ

エリオは一撃離脱タイプの高速戦闘型

何気にスバルよりも相性が悪い

スバルは確かに天敵だが、魔法障壁を崩す威力の晶術や技を放てば問題は無い

だが、エリオの高速型は正直捉えられるか自信が無かった。

「…どれ程速いのかは分からないが、“高速戦闘型”と言う程だ。晶術は回避されるだろう」

『じゃあ、どうするんですか？』

「……それだけ高速戦闘に特化しているのなら防御は低いと考えられる……。難しいが、カウンターを狙って行くしか無いだろう」

そこまで作戦を立て終えたりオンは立ち上がりシャルティエを鞘から抜く

まだ騎士甲冑モドキが完成していないらしく、この模擬戦は制服のまま戦わなくてはならない

「動き辛いが仕方無い……。シャル、晶術の準備と敵の位置把握をしておけよ」

『分かりました、坊ちゃん』

リオンは模擬戦のステージとして出されたビルの陰に隠れた。

そして、なのはの合図と共に模擬戦が開始される

『坊ちゃん。キャロとティアナさんの位置を特定出来ました。…ですが、ティアナさんの方は既に幻術の体勢に入っているのか時々魔力反応から消えます』

「…構わない…！キャロを仕留める…！晶術の制御は任せただ、シヤル！」

『任せて下さい！』

リオンはビル陰越しに詠唱を始める

そして交差した腕を突き出した。

「プリズムフラッシュ！」

リオンの声が響いた次の瞬間

「きゃあああっ！」

ズガガガッ、と無数の光の剣がキャロの頭上から降り注いだ。

「……キャロっ！」

何が起きたかも分からずにいるティアナ

チームの指揮官としてキャロの状況を把握しようとして動き出す

だが、それが悪かった。

『捉えました！』

「エアプレッシャー！」

「……えっ！きゃあっ！？」

ティアナを中心に広がる風の圧力

幻術で逃げられないように繰り出した広範囲晶術

地面に引きずり込まれるかの如くティアナは高圧力の前に倒れた。

開始直後で後衛2人の撃墜

此処まではリオンの計画通り

だが、問題は残り前衛2名だ。

片方は生半可な晶術は効かないであろう防御力

もう片方は如何なる晶術をも避けるであろう機動力

『坊ちゃん!』

シャルが慌てた様子でリオンに警告を出す

急いで周囲を警戒していると、リオンの前方上空から蒼い道のような物が向かって来る

「たああああつ!」

その道を進んで来るのは気合いを入れているのか声を上げているスバル

「真正面から…！馬鹿か！あいつは！」

リオンは急いで後退する

ウイングロードから降りたスバルは勢いを殺さずそのままリオンに向かって真正面から突っ込んで来た。

「…真正面からなど…！いいのだ！」

リオンはスバルに肉薄されるよりも前に地を蹴る

「幻影刃！」

放たれた神速の斬り抜け

「……………つくう！」

だが予測通り、スバルはプロテクションによって防いだ。

ならば次の手へ移る

『幻影刃』発動後のリオンが居るのはスバルの真後ろ

スバルは前方からの攻撃に気を集中しているのか背後はから空き

背後にもプロテクションが張られている可能性はある

だが、リオンは一瞬で読み取る

スバルは背後にはプロテクションを張っていないと…

リオンは『幻影刃』終了後の体を無理矢理捻る

昇華剣技

「幻影回歸！」

「…………ぐあっ！」

背後からの一撃はスバルの体勢を崩した。

プロテクションを張られない内にリオンは追撃を掛ける

「虎牙破斬！」

「…………ああっ！」

斬り上げと斬り下ろしの2連撃

更にリオンは踏み込み、自らスバルに肉薄した。

「爪竜連牙斬！」

繰り返されるは流れるかのような四連続斬り

攻撃が全て終わる頃にはスバルは地に腰を付けていた。

これで残るは1人

『Speerangriff』

「……………っ!?!?」

鳴り響くエリオのデバイス『ストラダー』の声

振り向くとストラダーの矛先を向けたエリオが一直線に突っ込んで来ていた。

「(中々の速さだが…甘い!)」

思った以上に速いエリオの突撃にリオンが驚いたのは一瞬

エリオの突撃は速いが、スバルと同じく一直線過ぎる

「月閃光！」

リオンは冷静に対応する

振り上げたシャルティエは三日月の軌跡を描き、ストラーダを弾き上げた。

「……うわっ!？」

急に進行方向が変わった事により体勢がのけ反るかのように崩れる
エリオ

リオンは直ぐさま振り上げた軌跡をなぞり返すようにシャルティエを振り下ろした。

昇華剣技

「月閃虚崩！」

非殺傷設定のシャルティエの刃が、スパアアンツと、のけ反ったエリオの腹部に綺麗に命中する

「うあああっ！」

体格の小さいエリオは『月閃虚崩』の一撃に簡単に吹き飛び、撃沈した。

結果は言うまでも無く、FW達の全滅

リオンの圧勝

「流石に新人達と比べると強いね、リオン君」

「…うん、そうだね…」

今の模擬戦のデータを見直しながら冷静に見るなのはと、エリオとキャロが怪我をしていないか心配で今にも飛び出して行きそうなフ
エイト

「はい、皆お疲れ様！今日の訓練はこれで終わりだからすっかり休むんだよ」

なのははマイクを使い訓練の終了を告げる

終了を告げたのと同時に隣に居た筈のフェイトが消え、訓練施設に向かつて雷が走ったような気がするが気にしない

「……………全く、こんな事はもう懲り懲りだ」

『ですね。4対1はキツイですよ。前だって海底洞窟で4対1で負けましたし』

「…シャル、それ以上は言うな。後悔はしていないが嫌な記憶には違いないからな…」

シャルの言葉にリオンは18年前の出来事を思い出す

仲間を裏切った時の事を…

あの行いに後悔はしていないが死んだ記憶というのは嫌な物でしか

ない

「あの……リオンさん」

「……………」

シャルを鞘に戻して居ると、痛みの残る腹部を摩りながらエリオが
リオンを呼び止める

エリオは緊張したような面持ちで、それでいて何かを決意した表情
で口を開いた。

「…僕にっ、僕に戦い方を教えて下さい！」

『リオンとエリオ』（後書き）

FW達の言葉遣いが今だに掴めていないから台詞が書けません…。

はい。今回の懺悔の時間です。

まずフェイト。

こんな性格と口調だっけ？

原作よりも二次創作の方を読みすぎたから、七夜の中では『フェイト』天然の親バカ』という位置付けになっちゃってます。

うん、アレだ。

読む際には脳内で奈々さんボイスを再生して下さい。

きつとそうすれば多少のキャラ崩壊は補正出来ます。

他のキャラにもボイスを脳内再生して下さい。

次はFW達との模擬戦

あれ？この時ってFW達は既に連携取れてたっけ？

スバルが馬鹿みたいに真っ直ぐ突っ込むのは初任務までだっけ？

まあ、後衛2人が居なくなっただから焦って冷静な判断が出来ずに真正面から突っ込んで来たと解釈して下さい。

……で、次に坊ちゃん。

ちょっとやり過ぎたかな……？

でも無双出来るのは今だけぐらいだから構わないよね？

……というか、BC解放すれば問答無用で勝っちゃうし。

後、エリオ君。

『リリなの』シリーズって“魔法少女”だから原作では中々見せ場の無かった我等が男子。

だからね……。

男の子でも『リリなの』世界で頑張れるんだ！って事を彼で証明したいと思います。

……えっ？何をするのかって？

それは勿論【エリオ魔改造計画】です。

だって原作ではエリオ君って、シグナムに剣技を鍛えて貰い、フェイトに高速戦闘の仕方を教えて貰い、ヴィータに近接戦闘法を学び、なのはがそれらを底上げ・統合してるんですよ？

隊長陣全員に鍛えて貰っているのに弱い筈が無いと思うんですよ。

上記+リオンに戦闘法を教えて貰うので最終的には強くなります。

数の子を2人くらい倒せるくらいに。

ただ原作改変は面倒臭そうなので実際には戦わせませんが…

ですので、「エリオきゅんは、キャロちゃんと支え合って困難を乗り越えるんだ！」という原作エリオが好きな方はお気をつけ下さい

尚、七夜は『エリヴィタ派』です。

『エリオの新技』（前書き）

今回はハメを外し過ぎました。

【エリオ魔改造計画】が始動します。

『エリオの新技』

FW陣達との模擬戦から数日

FW陣達はこれといった任務も無く、リオンも基本的にはやてやなのは達の書類整理の手伝いに駆り出されるくらいの事しか無かった。

はやてからFW達との訓練も提案されたがリオンは拒否

基本的に暇なりオンは放送ではやてに呼び出されたりする時以外は隊舎裏の広場などで剣技の確認など自己トレーニングをしていた。

そこで1日を過ごす事も少なく無いリオンだったが、ある時、何処で知ったのかエリオが頻繁に訪れるようになる

始めの頃は休憩時間中に「戦い方を教えて欲しい！」と来る程度だった。

勿論、リオンはその度に拒否するがエリオは諦めずに何回も訪れる

そしていつの間にか、貴重な休憩時間なのにストラーダの素振りをリオンの傍で行うようになっていった。

今では休憩時間だけでなく、休日などにもリオンの元を訪れ、リオンが相手にしないにも関わらずストラーダでの型を確認したり素振

りを繰り返すようになっていた。

『……………坊ちゃん……………』

「……………」

『……………坊ちゃん……………』

「……………煩いな……………分かっているさ」

それは、とある休日の出来事

「……………おい……………」

「……………ふっ！は……………っ！」

「……………おい！」

「あ、はい。何でしょうか？リオンさん」

リオンに呼ばれたエリオはストラダーダの素振りを止めると流れ出る汗をタオルで拭く

「……お前…今日は休みじゃないのか…？」

「はい、そうですけど」

「…なら、こんな所に居ないで部屋で休んでいたらどうだ」

「いえ、大丈夫です。リオンさんから色々と学ばせて頂いてますから」

疲れを知らない笑顔で答えるエリオ

そんなエリオの言葉にリオンは首を傾げた。

エリオは、色々学んでいると言った。

だが、エリオが此処に始めてからリオンはエリオと口を利いた事が無い

「……どういう事だ…？」

「実はリオンさんの剣技の練習を見ながら自分が戦っているかのよ
うに仮想して素振りをしていたんです」

「……そんな事をしていたのか…!？」

『凄いですね。 エリオって本当に10歳なんですか？』

「あはは…っ。 でも毎回リオンさんには負けてますけどね」

苦笑いしながら頬を掻くエリオ

そんなエリオに、リオンは何気なく聞く

「……エリオ…お前は何故強くなるうとする…?」

根本的な疑問

まだ10歳という年齢ながら“強さ”を求めている

まるで過去の自分のように

「僕は騎士を目指しているんです。皆を護れる強い騎士に。だから皆を護る為に強くなりたいんです!」

迷う事無く少年は真つ直ぐな瞳で答えた。

“ 皆を護る ”

そこはリオンとは違った。

リオンの場合は愛する人であったマリアンと対等になる為に強さを求めた。

エリオは皆を護る為に強さを求めている

リオンは自分の行って来た事は間違っていたとは思っていない

マリアンと対等になる為に努力した日々は決して偽りでは無い

それが『リオン・マグナス』という存在

だが、何故だろう…

目の前の少年の強さを求める理由には何か輝く物がある

「……………一度だけ手合わせをしてやる……。本気で来い」

そう思った次の瞬間には勝手に言葉が続いていた。

「は、はい！お願いします！」

エリオはストラードを構えると腰を落としリオンに突撃した。

そしてそれから数日が経ち…

「（結局…僕もあいつ達のお節介が移ったのかもしれないな…）」

リオンは、かつての仲間達が自分にしてきた“お節介”と同じような事をしている自分に自嘲するかのように鼻で笑う

「ま…っ！まだだ！」

それを自分が笑われたと思ったエリオはストラードを握る手に力を

込めてリオンに接近する

「……甘いぞエリオ！お前はただでさえ軽い上に高速戦闘による一撃離脱が主体だ…。接近戦に持ち込まれたら腰を使え！」

「…は、はいっ！」

シャルティエとストラーダが交わる

エリオは一度距離を取ろうとバックステップで後退するが…

「魔神剣！」

「……うわっ！？」

昇華剣技

「双牙！」

「うわぁあっ！」

着地の瞬間を狙われ、よろめいた処を追い撃ちで放たれた『魔神剣・

双牙』

エリオはリオンに1本取られ、地に座り込んだ。

「はあ…はあ…。リオンさんには敵いませんね…」

「…当然だ。そもそも場数が違う…」

『でも、エリオもどんどん鋭い一撃を出せるようになって来ましたよね！坊ちゃん！』

「……そうだな…」

リオンとシャルティエはエリオの成長を実感する

最初の頃こそ、槍使いなのに突きは遅いし威力が無い

槍の間合いの内側に入ってしまったえば何も出来ない

打ち合いが始まると開始5分も持たせる事が出来なかったエリオだが、連日の打ち合いとリオンの然り気無い指導によってその槍捌きが上達して来ていた。

今のエリオなら全ての力を一点に込めた『Speerangriff

f』でスバルのプロテクションを貫けるであろう

又、槍を棒術の要領で操る事も出来てきた為、槍の死角である零距离へ潜り込まれても対処出来るようになった。

だが技術と実力が付くと同時に改善点は山程出来る

その中で特に問題なのが“力”だ。

体力などのように成長すれば付くだろうが、今の現状では体力よりも力が必要なのである

そもそも、エリオはフロントアタッカーであるスバルが敵陣に着くよりも先に敵陣に突撃を掛け、一撃離脱の戦法によって敵陣を混乱させる役割

つまり、一撃の威力も必要なのである

エリオに求められるのは“突破力”

どうすれば付け焼き刃程度にでも補えるか…

『そういえば、エリオは電気の魔力変換資質を持っていましたよね？』

15分近く悩み口を開いたのはシャルティエ

「うん。僕は先天スキルとして魔力変換資質『電気』を持つてるけど……それがどうかした？」

「うん……うん……。坊ちゃん、もしかしたらエリオの一撃の威力を上げる事が出来るかもしれないよ！」

「……本当か、シャル？」

「はい！でもその前に、エリオの魔力変換資質を再度理解した方が良いですね」

シャルティエはストラードからの情報と、模擬戦時になのはから送られていた情報を組み合わせて説明する

魔力変換資質『電気』

その名の通り自身の魔力を電気へと変換する能力で、六課内ではフエイトとエリオが所有しているスキル

ただ、2人は同じスキルであるが“モノ”が全く違う

フエイトの魔力変換資質『電気』は、魔法攻撃に雷属性を付加する事が出来る

対してエリオの魔力変換資質『電気』は、雷を体外に放出するものつまり、エリオは魔法に雷を込めるよりも直接放電の方が合っているという事

『その特性を十分踏まえて考えたエリオの攻撃力上昇手段が“電磁加速砲”の原理を応用する事です』

シャルティエのその言葉にリオンもエリオも固まった。

シャルの言っている事が理解出来ない

「…シャル。…何だ？その、電磁^{レールガン}加速砲という物は…？」

『なのはさんやはやてさん達の生まれ故郷である地球という場所に存在する電磁投射兵器の事です。まだ実験段階のようですがね』

本当にシャルティエは賢くなってしまった。

その事実にはリオンは何回も驚かされる

『まあ原理は難しいので、原理は魔法でパスしてしまつてエリオに合つた方法で実際に試してみましょう!』

「……………大丈夫なのか…シャル…?」

シャルの言葉に頭を抱えるリオンだった。

シャルティエに促されたエリオは近くにあつた木の枝を拾い上げる

『ではエリオ。まず、その木の枝に軽く電気を流して下さい』

「……………えっ、うん」

エリオは木の枝を握つた右手に意識を集中させ電気を軽く流す

『僅かにでも帯電していればオツケーです。…では次に、エリオ自身の腕全体に電気を帯電して下さい。少し多めにお願いします』

「…はい」

バチバチッ、とエリオの右腕から放電が起きる

それに影響されてか、僅かにしか帯電させていなかった木の枝も微弱な放電を起こす

シャルは仕上げに入った。

『いいですかエリオ。最後の仕上げです。木の枝を高く放り上げて落ちて来た所を帯電させている右手で殴って下さい』

「ただ殴るだけで良いの？」

『いえ、殴る位置は枝の端っこ。殴る瞬間には帯電させた電気を全て前に押し出すようにして下さい』

「……分かった…やってみるね」

エリオは目を綴じ深く息を吐く

隣では、大丈夫なのか？、と物凄く不安が残るリオン

そのリオンの腰の鞘にはシャルティエが無言で収まっている

「行きます…！」

目を開き、前を見据えたエリオは木の枝を放り投げる

一定の距離まで上昇すると重量に引かれて落下して来る木の枝：

エリオは膝を曲げて力を込め跳び上がった。

落ちて来る木の枝がエリオの目線の高さに来る

エリオは引き絞っていた右腕を木の枝に向かって全力で突き出した。

「いつけええっ！」

気合いを込めてエリオは叫ぶ

木の枝に当たると同時に右腕に帯電した電気を前方に向かって爆発

させた。

エリオの拳が木の枝に当たったその直後：

ズドンッ、と何かが抉れ込む鈍い音

「……………」

『……………』

「……………えっ？」

地面に降り立ちながら間抜けな声を出すエリオ

リオンに至っては有り得ない物を見たような表情をしており、言い出しっぺであるシャルティエに至ってはソーディアンであるから確認は出来ないが恐らく口が開いたまま固まっているのだろう

それ程までに目の前の光景が酷過ぎたのだ。

エリオの拳が木の枝に当たった瞬間、木の枝は消失

次の瞬間にはエリオの射線上にあった物は全て貫き、最後は駐車場に止めていた車のボディに木の枝が半分以上突き刺さっていた。

『電気』の影響で地面も僅かに焦げている

射出したのが木の枝だから良かったものの、もしストラードを射出していれば間違い無く射線上の地面は草花が生えない程に焼け焦げ、貫かれた車は爆発していただろう

「……………シャル…」

『改善の余地がありますね…。エリオ、この技はいざという時以外に使わないようにして下さい』

「……………うん…分かったよ…シャルティエ」

3人は何も見なかった事にすると隊舎裏を後にする

「ああ〜っ！私の車があ〜！」

駐車場から聞こえて来たフェイトと思わしき声は気のせいだろうと
思いたい3人だった。

『エリオの新技』（後書き）

やり過ぎた…。

でも後悔はしていない！

はい。懺悔の時間です。

まず、電磁加速砲。

電磁加速砲は、電位差のある二本の伝導体製のレール間に、電流を通す伝導体を弾体としてはさみ、この弾体上の電流とレールの電流に発生する磁場の相互作用によって、弾体を加速して発射する物である。（Wiki引用）

ですので、普通なら有り得ない事をしたんですね…エリオ。

まあ…魔法だから許される…かな？

エリオの魔力変換資質なら出来そうだし…。

前話の坊ちゃん無双ですが、あれもティアナの暴走に拍車を掛けて

ます

他の作者様のクロスSSですとカリムの予言に主人公の事が書かれていたりしますが…

一応、この作品でも予言として坊ちゃんの事が出ています。

ただ、どのタイミングでやるべきか捉えてないだけです。

次回はホテル・アグスタです。…たぶん。

『ホテル・アグスタ』（前書き）

ティアナ暴走の回です。

実はこの二次創作、元々は『渚 カヲル』が介入する予定でした。

『ホテル・アグスタ』

「フェイトちゃん……。ちょっと顔色悪いけどどうかしたの？」

「……なのは……聞いてよ……。昨日、私の車に悪戯されてたの……」

「悪戯？何か落書きでもされてたの？」

「……ううん。木の枝が突き刺さってたの……」

「……！！」

『……！！』

「……！！」

フェイトの車に木の枝が突き刺さっているという謎の怪奇現象より
数日後……

はやてに召集された隊長陣とFW陣、そしてリオンはへりに乗って
今回の目的地へと向かっていた。

「……！！」

『……坊ちゃん…大丈夫ですか？』

「……大丈夫な訳…ないだろう…」

へりに酔ったリオンはへり内に取り付けられている椅子の端っことで、壁にもたれ掛かるように座っていた。

その姿は普段の彼からは想像出来ない程に弱々しい

「……何故だ…。カイル達と船に乗った時には何とも無かった筈なのに…」

『仮面の御蔭ですかね？』

「……馬鹿な事を…言うな…。あの仮面に…そんな力は無い…だろ…
……うっ！」

「……リオン…大丈夫？」

完全に衰弱しきっているリオンに優しく声を掛けるのはフェイト

フェイトは明らかに“酔った”状態であるリオンの背中を摩る

「…もしかして…リオンは乗り物に弱いのか？」

「…別に…弱くはない…」

「…でも酔っちゃってるよね？」

「…違う…！僕は酔ってなどいない！…ただ…気分が悪いだけだ…」

「…それを酔ってるって言うんだよ？」

「…だから違うと…！…うっ！」

『坊ちゃん…痩せ我慢は辞めましょうよ…』

「…嫌いぞ…シャル…」

完全に乗り物酔いにダウンしたりリオンは、酔っていないと言いながらもフェイトに促されるまま横になった。

リオンはそのまま仮眠を取り、目が覚めた頃には今回の目的地である【ホテル・アグスタ】に到着しており、へりに乗っていた全員が降りる準備をしている

「……あ、目が覚めた？リオン」

目覚めたリオンに気が付いたフェイトはリオンに近寄ると今回の任務内容を手短かに説明する

今回の任務はホテルで開催されるオークションの警備

特にロストロギアの護衛と、オークションの参加者の安全の確保が今回の任務の主な目的

ロストロギアについては、度々はやての書類整理や身の回りの雑務を手伝っていた際に聞いた。

機動六課の方針が【ロストギア】と呼ばれる古代遺物の回収

特に【レリック】と呼ばれるものの回収を専任している事を…

だが、リオンは納得がいかない

今回の任務が“ロストロギアの回収”では無く、“護衛”という処が気に掛かる

すると、フェイトは他のFW陣達にも配られた物と同じような資料をリオンに渡した。

- 『ジェイル・スカリエッティ』 -

その資料に記されていた男の名前

資料を読むと犯罪者で無ければ正に天才と呼ぶにふさわしい研究者

だがフェイトの話を聞くと、リオンがこの世界に来る以前から恐らくスカリエッティの仕業であろうと思われる事件が何回かあったらしい

リオンがこの世界に来た直後に襲い掛かって来たガジェット達もスカリエッティに造られた機械達

その事から、恐らくこの男と【レリック】には何か関連性があるとして見て六課はスカリエッティの行方を追っている

そして、それが今回の任務の理由

「……成る程……。このスカリエツティという奴が、このオークションを狙う可能性がある……という事か」

「……うん。だからリオンにも手伝って貰いたいんだ……」

「それは構わない……が、今は無理だ。……休ませて貰う」

そう言つとリオンは、外の空気を吸う為にヘリから降りた。

今回の警備の配置としては、

ホテル内の警備をなのは、フェイト、はやての3人

ホテル周辺にはシグナム、ヴィーダ、フォワード陣が警備にあたる

そしてリオンはと言つと……

『坊ちゃん、大分落ち着きましたか？』

「……ああ……大分マシになった。……しかし……この“ヘリ”という乗り物には慣れないな……」

ホテル周囲に生えている木の根元に座り、休んでいた。

リオン達がアグスタに到着してから時間は経っている

太陽は沈み、辺りは暗くなり始めていた。

『そろそろオークションが始まる時間ですね』

「……………そうだな……………」

面倒な事が起こらなければ良いのだが…

『坊ちゃん。ガジェット反応です』

オークションが開始してからどれくらいか経った後、シャルティエが警告を出す

立ち上がれば黙視出来るだけでも数十体は居るであろうガジェット

『坊ちゃん大丈夫ですか？』

「……問題ない」

へりの酔いは覚めた。

ガジェットの相手くらい何も問題は無い

…と言いたい処だが1つ問題がある

木々が生い茂っている為、晶術による広範囲殲滅が出来ない

いや、正確に言えば広範囲殲滅は出来る

だが、それを行えば木々を破壊するのは当然の事…

後々文句を言われるのは避けたい

「……シャル、近接戦と単体向けの下級晶術で戦う」

『了解です、坊ちゃん』

リオンは迫り来るガジェットに向けて駆け出した。

戦うリオンの姿は、丁度リオンと同じ区域で戦闘を行っていたスバルとティアナの目に映る

「リオンさん凄いや！よおし！あたしも負けないよ！」

リオンの戦闘に影響されたのかスバルはマツハキャリバーを走らせ、ガジェット達に攻撃を始めた。

リオンとスバル

2人の戦闘を見てティアナは焦っていた。

相棒のスバルは魔法の才能に恵まれた存在

そして、今自分達と共にガジェットと戦っている次元漂流者の少年、
リオン

リンカーコアを持たず魔導師でも何でも無い存在でありながらも、

『晶術』と呼ばれる魔法に似た力を使い、剣術はシグナムを倒す程
『A-』という高くもあるが、自分達と大して変わらないランクな
のに自分達とは圧倒的な力の差

それだけでは無い

なのはも、フェイトも、はやても、シグナムも、ヴィータも、エリ
オも、キャロも…

更に言えば直接戦闘には関係無いが、後衛部隊の面々も将来を期待
された者達ばかり…

六課のメンバーは“皆が才能を持つ”

故に、自分を“凡人”と思い込んでいるティアナには苦痛でしかな
かった。

「あたしにだって…！出来るんだからあ！」

ティアナはクロスミラージユのカートリッジをロードする

「クロスファイヤアア…ッ！」

それは完全な焦り

ティアナは“焦り”の感情の為に進むべき行動を間違えた。

チャージされる魔力の銃弾

「シューート！」

ティアナの渾身の一撃はガジェットを次々と破壊する

…が、彼女は気付いていなかった。

ティアナの射線上に相棒が居た事を…

「スバル！危ねえっ！」

それに気付いたのは近くに居たヴィータ

「え…っ？うああ！」

ティアナの放った弾丸の1つが上空をウイングロードで駆けるスバルに向かって飛翔していた。

それは、ティアナの誤射

自分に命中しそうになり思わず目を綴じるスバルだったが痛みは一向に来ない

目を開けてみると、間一髪の所でヴィータがクラーファイゼンで魔力弾を弾いていた。

「…ヴィータ……副隊長……」

スバルからはヴィータの表情は見えないが怒っているのが空気で分かる

そして、ヴィータがティアナに口を開こうとした瞬間…

「馬鹿か貴様は！」

違う声がヴィータよりも先にティアナに届いた。

3人が振り向くと、そこに居たのはリオン

既にこの付近のガジェットは倒したようだ。

リオンはティアナに向かって声を荒げる

「ティアナ！貴様は仲間を殺すつもりか！」

「……ち、違…！あたしは…！」

リオンの怒気にティアナは少しずつ後退りしながら震えた声を出す
だが、リオンが聞く筈が無い

「言い訳は聞きたくない！貴様のような奴に背中を預けられるものか！貴様は下がっている！」

「…で、でも…あたしはまだ…」

「目障りなんだよ…！」

そう言い放つとリオンは残りのガジェット殲滅へと向かった。

リオンの去った後、力が入らなくなったように膝から崩れ落ちるティアナ

「……あたしは…あたしは…」

完全に戦意を喪失してしまったティアナはスバルに支えられながら戦線を離脱した。

『……坊ちゃん……少し言い過ぎでは……？』

「……………」

木々の間を駆け抜けるリオンにシャルティエは問うが、その問い掛けにリオンは答えない

その時、シャルティエを介して通信が入る

どうやらガジエットの大半は撃破したとの事

残ったガジエット達は撤退して行く

しかし1体だけ、撤退せずにリオンに向かって来るガジエットがあった。

大きな巨体にアームのような腕

ガジェット？型

その強固な防御力と、AMFによる魔法無効化能力

そして攻撃力…

その強さは六課でもお墨付きだ。

それが此処に居るのは他のガジェットの撤退時間を稼ぐ為か、それとも撤退機能が壊れただけか…

リオンに向かってアームを伸ばしながら襲い掛かって来る大型ガジェット

「…本当に…目障りだ…！」

リオンはシャルティエと短剣に力を込める

今、リオンの頭には苛立ちしか無かった。

それはティアナの行った行為へか、それとも“かつての仲間達”の
ように慰めたりする事が出来なかった自分への感情か…

「幻影刃！」

リオンは踏み込み、一気に大型ガジェットに肉薄する

先制、及び強襲に最適な『幻影刃』は既にリオンの愛用技となっ
ていた。

ガジェットに肉薄したりオンは苛立ちと怒りに任せて力を解放する

『BC解放』

「斬り刻む……」

リオンは短剣を突き出し急加速した。

「遅い！」

繰り返されるのは『空襲剣』、『虎牙破斬』、『爪竜連牙斬』の隙の無い流れるような連携

しかも、その全ての一撃一撃が普段の技の発動時よりも重く鋭い

これがリオンの持つ『S・』の秘奥義の一つ

「魔人千裂衝！」

その斬撃は大型ガジェットを切り刻む

その技を前にしては、新人FW達を苦しめる程の大型ガジェットで

も相手にならない

……訂正。

ガジェットごとくでは相手になる筈もない

切り刻まれたガジェットは地に散らばる

既にリオンの中からは、怒りや苛立ちが消えていた。

BCとして一気に解放したからか…

リオンにはどうでも良かった。

ただシャルティエに付いたガジェットの欠片を振り払う

「二度と会うこともないだろう…！」

砕け散ったガジェットを見下ろしながら、リオンは静かに呟いた。

『ホテル・アグスタ』（後書き）

なのは達ってスカートだけど、空戦時には見えちゃったりしないのかな？

はい。今回の懺悔の時間です。

特に今回は坊ちゃん。

あれ？坊ちゃんってこんなブチ切れキャラだったっけ？

確か最初の頃はスタン達にこんな態度だったような気が…

《設定》にも書いていますが、リオンの性格が時々によってかなりブレます。

『オリD』 口の悪いガキンちよ

『リメD』 ツンデレ

『D2』 何だかんだで優しい奴

『啄木鳥しんき版漫画』 スタンを仲間として信頼している

『カスカベアキラ版漫画』 意外とノリが良い

各作品でこんなにも性格が違ってます。

そりゃブレますよ。

『カスカベアキラ先生』の漫画、【儂き刻のリオン】ではリオンが

「僕達は一騎当千のソーディアンマスターだ！」

って叫ぶんですよ!?

昔の坊ちゃんじゃ考えられません。

この二次創作の最後らへんではそれら全てを凝縮した坊ちゃんになると思います。

又、この時はまだ坊ちゃんは六課制服のまま戦ってます。

騎士甲冑モドキが出るのは次話からですね。

さて、次回ですが…。

さあ皆さんお待ちかね。

冥王戦です。

他の作者様のクロスSSでは、主人公がなのはを諭したり、わざと自分が撃墜されたりして間違いに気付かせますが…

うちの坊ちゃんはどうでしょうか？

気合を入れて書かせて頂きます！

P . S .

冥王さんは力で全てを解決しちゃうんですよぉ〜！（by・ライン）

『管理局の白い悪魔』（前書き）

この小説のタイトル

『リリカル坊ちゃん』とか、もっと分かりやすい名前にした方が良
いのかな…。

では、冥王との勝負です。

『管理局の白い悪魔』

【ホテル・アグスタ】の事件から数日後

食堂へと向かっていたリオンをフェイトが呼び止めた。

「……………何か用か？」

「…実は、ティアナの事なんだけど…」

『ティアナさんがどうかしたんですか？』

フェイトはリオンとシャルティエに話す

ここ最近、ティアナの様子がおかしい事

何かに取り憑かれたかのように自分を痛めつけるかのような自己練習を繰り返しているという事

「……………それを何故僕に話す…………？」

リオンの言う通りだ。

ティアナの事ならば相棒であるスバルに相談すれば良い

他にも同じFWのエリオやキャロ、教導官であるなのはが居る

この間の一件でリオンとティアナの仲はかなり離れてしまっている筈

なのに何故リオンに相談をして来るのか…

「…それが、なのははこの事を知っているんだけどティアナに注意しようとしらないの…。スバルと一緒に訓練をしちゃってるし…」

つまりは八方塞がりと言った処か…

肝心な相棒のスバルはティアナと一緒に自己練を行い

注意すべき筈のなのはは無視している

リオンはそれが気になった。

「……フェイト。何故ティアナは力を追い求める…？罵声を飛ばした僕が言える立場では無いが、ティアナの指揮能力と中距離からの射撃、幻術による囷は十分な力だと思うぞ…？」

「…うん……その事なんだけどね…。まだリオンは知らなかったよね…」

そう言うとフェイトは誰も居ない事を確認してからリオンに話す

ティアナの過去

強くなるうとする理由

全ては亡き兄と、ランスターの実力を周囲に認めて貰う為…

“認めて貰う為”

それはリオンの強くなるうとした理由と何処と無く似ている

勿論、“全ての人”に認めて貰おうとするのと、“ただ一人”に認めて貰おうとした違いはある

だが根本は同じ“認めて貰いたい”という気持ち

「（……何故此処の奴らは昔の僕と一々ダブるんだ……）」

ティアナ、そして前に聞いたエリオの強さを求める理由を聞いたり
オンは何処と無く被る自分の過去に溜息をついた。

リオンは話を戻す

「……で、なのはがティアナに注意をしない理由は何だ……？」

「……多分、なのはは毎日の教導でティアナが『無茶をしてはいけな
い』という事を理解してくれるのを待ってるんだと思う……」

「……そう思う理由は……？」

リオンにそう返されたフェイトは、そういえば説明してなかったね、
と再度周囲を確認してから口を開く

フェイトの口から語られたのは8年前の事故

今のティアナのように魔法の訓練に明け暮れたなのは、その訓練と連日からの疲労で任務中に重体の怪我を負った。

一時期は二度と空を飛べないと言われながらも、過酷なりハビリを乗り越え再度飛べるようにまで回復し、現在まで教導を続けているという事

つまり、なのはは自分と同じようになって欲しく無いという気持ちでティアナ達を教導している

だが、それなら何故なのははティアナと話し合わない？

なのはは無言で教導していれば理解すると思っっているのだろうか…

無理だ。

それはリオンが1番理解している

かつて、必死に話し合おうとして来た仲間と話し合わなかった自分だからこそ…

「…それじゃあね、リオン。良かったらティアナの様子を見てあげて」

フェイトは、か細く微笑むと廊下を歩いて行った。

『……教導の意味を教えない人と、理解しない人……。……坊ちゃん、色々almazく無いですか？』

「……嫌な事にならなければ良いがな……」

リオンとシャルは、今のティアナとなのはの状況に嫌な予感しかしなかった。

それから更に数日後…

リオンが食堂で朝か昼か分からない食事を摂っていると隣にフェイトが食事を持って来て座る

彼女も朝か昼か分からない時間帯の食事だ。

「…ねえリオン。この後時間あるかな？」

「……ある事はあるが…どうかしたのか…？」

「…この後、スターズの模擬戦があるんだけど一緒に見に行かないかな？」

リオンは頭の中で整理する

【スターズ】とは、なのはを隊長とし、ヴィータが副隊長、そしてスバルとティアナの4人編成チーム

今回の模擬戦は、ティアナとスバルのチームがなのはと戦うらしい

「…本当はスターズの相手は私がしようと思ったんだけど……なのはに断られたんだ…」

「……坊ちゃん…」

「……分かっている…」

リオンは模擬戦を見る為に食事を終わると立ち上がり食器を返しに

「駄目だよ、リオン」

いつの日かの如くフェイトに止められた。

フェイトの視線はリオンの食器に向かっている

「リオン、好き嫌いしちや駄目だよ……」

フェイトは子供に諭すように注意した。

リオンの皿の中にはピーマンが残されている

ピーマンはリオンの嫌いな食べ物の一つ

「……こんな物……人が食べるような物じゃない」

「…駄目だよリオン。食べ物粗末にしたら。…ほら、私もリオ
ンと同じご飯だから一緒に食べよ?」

フェイトはリオンを座らせると自分の食器をリオンに見せる

『…坊ちゃん、諦めましょう』

「……………はあ」

リオンは億劫そうにフェイトと一緒にピーマンを口に運んだ。

リオンがピーマンを食べ終わるのにはかなり時間を要し、食べ終え
て海上訓練施設に向かってみれば既に模擬戦は始まっていた。

「……………あ、もう始まっちゃてるんだ……」

「おう。フェイトとリオンか」

模擬戦を見ていたヴィータは頭だけを2人に向ける

「…模擬戦の調子はどう？」

「駄目だ。スバルはともかくとしてティアナの動きにキレがねえ」

ヴィータの酷評を受け、フェイトとリオンは模擬戦に目を遣る

そこではスバルがウイングロードでなのはを攪乱しながら動き回っていた。

スバルは普段と変わりは無い

だが問題はやはりティアナ

リオンはティアナの持つ“銃”という武器での戦い方は詳しくは知らないが、戦闘経験者として理解していた。

ティアナの戦い方は凄く歪であると…

そんな模擬戦の最中、幻術を駆使したティアナが接近戦を仕掛ける

之には流石に全員が驚いた。

悪い意味で…

中距離戦主体のティアナが接近戦

無謀にも程がある

「……レイジングハート…モードリリース」

なのはが呟いた瞬間、ティアナとスバルの攻撃によって土煙が舞った。

煙が晴れると、そこには素手で2人の攻撃を受け止めるなのはの姿

「……二人共、どうしちゃったのかな……？」

普段の彼女からでは考えられない程の低くどすの利いた声

「……頑張っているのは分かるよ……でもね……」

2人を見るその眼からは光が消え去っている

「……模擬戦は喧嘩じゃないんだよ……？」

圧倒的な威圧が訓練施設を包んだ。

『……坊ちゃん……！これはマズイですよ！』

「……分かっている……！シャル！前に言っていた騎士甲冑モドキは使えるのか？」

『大丈夫です。行きましょう！坊ちゃん！』

なのはの醸し出す空気にティアナは恐怖が込み上げて来る

ティアナは距離を取り、スバルのウイングロードに着地した。

そして、ティアナはスバルが居るのにも関わらずファントムブレザーを撃とうとするが、なのはのクロスファイヤーによって相殺された。

なのははスバルをバインドで捕縛すると、スバルに見せしめるかのようにティアナを捕縛する

「……少し……頭冷やそうか……」

なのははそう言い砲撃魔法を放った。

結果は言わずもがな…

バインドで捕縛され逃げる事の出来ないティアナは直撃を受け、ウイングロードから落下する

既にティアナは“撃墜”

だが、なのはは構う事無く更に1撃放った。

砲撃魔法の威力で土煙が舞う

しかし、なのはは更にもう1撃

立ち上る土煙に向かって発射した。

あまりにも“やり過ぎ”な光景に模擬戦を見ていたフェイトとヴェイ

「タは、なのはにそれ以上は止めるように言おうと念話で呼び掛けるがなのは側が受信を拒否している

フェイト達の念話を強制的に遮断しているなのは更にもう1撃…

「……………」

撃とつとするが止めた。

「……………何のつもりかな…リオン君…?」

なのははレイジングハートを発射状態から戻すと、自分の背後に居るリオンに向けて口を開いた。

なのはの首筋にはシャルティエの刃が押し付けられている

そのような事をしているのは勿論リオン

リオンは普段の制服では無く、この世界に来た時に着ていた黒を基

本とするジューダスの服に身を包む

「……………それはこちらの台詞だ、なのは」

リオンは殺気を剥き出しにしたまま答える

「…なのは、これは模擬戦では無いのか…？少しやり過ぎなんじゃないのか？」

「……………やり過ぎじゃないよ…リオン君…。ティアナが教えた通りにしないから教導しただけなんだよ…」

「……………教導…だと？……………参ったな…僕は遂に耳が悪くなったらしい…。あれが教導だと…？笑わせるな。あんなのは只の虐殺行為だ」

「……………そう…。リオン君、私の邪魔をするんだね…。ならリオン君も……………少し、頭冷やそうか…？」

次の瞬間、なのははレイジングハートを使いシャルティエを弾きりオンから距離を取ろうと飛び上がる

「逃がさん…！幻影刃！」

飛び立つ直前を狙い、リオンは攻撃を繰り返す

だが、なのはの強固なプロテクションにより刃が触れる事は無かった。

「……無理だよりオン君。空を飛べないリオン君じゃ私には勝てないよ……。それに、例え私に当たってもリオン君の攻撃じゃ私の防御は抜けられないよ」

飛び上がったなのはは、上空からリオンを見下ろし勝ち目の無い事を告げる

「……ふんっ。やってみなくては分からないだろ……！」

「……そう……。じゃあ分かせて上げる」

なのは自身の周囲に複数のデイバインシューターを展開し、全てをリオンに向けて撃ち放った。

放たれた数は8つ

数は多いが弾速は大した事無い

リオンは冷静にそれらを躲した。

「……甘いよ、リオン君」

『坊ちゃん！後ろです！』

シャルの緊急傾向にリオンは体を横に飛ばす

それと同時にリオンの横を掠めて飛ぶデイバインシューター

そう。

デイバインシューターは誘導式の射撃魔法

なのはの得意であるアクセルシューターとは違い威力は低い
だが1つ利点がある

「……リオン君、頭がから空きだよ……」

『 S h o r t B u s t e r 』

「……………くっ！」

咄嗟に回避を行うリオン

ドゴオッ、と砲撃魔法が地を穿つ

デイベインシューターの利点は、操作しながら術者自身が動き回れる事

なのははデイベインシューターでリオンを攪乱し、空を飛べる利を生かしてリオンの頭上からショートバスターを放った。

威力と射程を減らした分、高速で発射出来るようになったディバインバスターのバリエーション

その威力は、いくら減らしているとはいえ“砲撃”という名に相応しい物であった。

「……………居ないの……」

土煙が晴れると、そこにリオンの姿は無い

煙に紛れて逃げ隠れたとみて間違い無いだろう

なのははレイジングハートの先をいつでも地上に向けて撃てるように構えたまま上空からリオンを探し始めた。

「……………くそっ……！何て威力の魔法だ……っ！」

『仕方ありませんよ。なのはさんは砲撃魔導師なんですから』

間一髪ショートバスターの直撃を回避したりオンは体勢を立て直す
ビルに隠れる

外を覗いて見れば、なのはが上空から戦場全体を見下ろしている

なのはを覗き見ながらリオンは、厄介な奴を相手にしてしまったな
と舌打ちした。

まだ1回しか攻撃していないが、その強固なプロテクション

複数の誘導弾を放ちながらの移動

確実な威力を持った砲撃魔法

そして何より空を飛ぶ

流星は管理局の【エース・オブ・エース】の称号を持つだけある

その力は、防御が紙、空を飛べないリオンにとっては完全なる天敵

スバルなどとは桁が違う

「……………ちっ……………白い悪魔が…！」

なのはのチート級のスペックに文句を愚痴るリオン

その時、シャルが叫んだ。

『坊ちゃん！強力な魔力反応を確認！狙われてます！』

「……………なにっ！？」

リオンは急いでビルから抜け出した。

リオンを探していたのはは、ふと一つのビルに視線を合わせる

「（……今、悪魔とか言われたような気がするの……）」

なのはは濁った瞳でビルを見遣ると、レイジングハートを構える

「……そんな悪口を言つりオン君は……オハナシが必要な……」

レイジングハートに集まる魔力

なのはは何の迷いも無く砲撃を放った。

「デイバイイン……!!」

『 Divine Buster 』

「バスタアアアッ！」

放たれたのはなのはの十八番

収束された魔力は強力な砲撃となって一直線に進み、ビルの土台部分を破壊する

土台を破壊されたビルは傾き、崩壊した。

「プリズムフラッシュ！」

「……………！」

なのはの頭上から突然現れ、降り注ぐ光の剣

突然の出来事に驚くなのはだが、その強固なプロテクションがなのはを守る

1本、2本と防いだ処でなのはは冷静とは言えない冷静さを取り戻し地上を見下ろした。

「……………エリオみたいに意外とすばしっこいんだね……リオン君」

そこにはシャルティエを掲げたリオンの姿

リオンはシャルを引き戻すと、なのはに向かって口を開いた。

「……なのは…お前とティアナの過去をフェイトから聞いた…。お前が教導に熱くなる理由を分からなくもない…」

「……それじゃあ、どうして私の邪魔をしたの…?」

「……お前の行動が気に入らないからだ」

リオンはキツパリとなのはの目を見て言う

「……お前は、焦っているティアナを知っていた筈だ…。なのに何故話し合わなかった…!」

「……私はしっかり教えたよ? だけど、ティアナが聞かなかっただけだよ」

「教えた…? ふざけるのも大概にしろ…! 話し合いもせず、いつかは分かるだろうと何も行動しなかった奴の言う言葉じゃ無い!」

「……黙って…リオン君…。リオン君に何が分かるの…?」

“敵”を見る眼でリオンを睨むのは

リオンは怯む事無く言葉を紡ぐ

「……………なのは、貴様は8年前の事件に自分が縛られているだけだ…。
貴様は僕と同じ過去を断ち切れない人間だ…」

リオンはシャルと短剣をクロスし晶術の詠唱に入り、なのははプロ
テクションを全面に張った。

「……………だから…僕は貴様を潰す！」

リオンは腕を突き出し晶術を発動した。

「ブラックホール！」

「……無駄だよ……リオン君。リオン君の攻撃は　　っ!？」

リオンの放った晶術は、なのはの言葉を途中で途切れさせ彼女の顔をしかめさせる

無理も無い

なのはの体が下に向かって吸い寄せられているのだから……

なのはが全力で上空へ逃れようとしても、その場で踏み止まるつもりでも無意味

なのはのプロテクションはミシミシと悲鳴を上げる

なのははプロテクションの強度を上げる

次第に収まるプロテクションの悲鳴

リオンの発動した晶術が終わったのだろうか

だが、リオンの目的は達成された。

ブラックホールによって、なのはは既に地に下りているのと同じ

高さにまで降下している

リオンはブラックホール発動中に唱えていた晶術を発動した。

シャルを一度鞘に戻し、リオンは高く跳び上がると右手を上空へと掲げる

すると、リオンの頭上背後の空間が歪み『悪魔の槍』が現れリオンの手に収まった。

急に空間が裂けて現れた莫大な力を込めた闇の槍に、なのはだけで無くフェイト達も固まる

リオンは身の丈を越える槍を強く握ると、真っ直ぐになのはに向かつて投擲した。

「デモンズランス！」

リオンが放つのは『S+』の威力を持つ晶術

「……………くっ……………」

最大にまで強度を上げたプロテクションで真っ向から受け止めるのはだったが、その威力に体が押され始める

しかもそれだけでは無い

“最大の強度”まで上げていたプロテクションに鞆が入る

ピシッピシッ、と鞆は着実に広がっていく

「……そんな…っ。レイジングハート…！」

なのはが叫んだ瞬間、均衡は破られた。

デモンズランスはなのはのプロテクションを貫き着弾

爆発を巻き起こす

「きゃあああっ…！」

爆風によって弾き飛ばされ、地面に転がり落ちるなのは

プロテクションが強固だった事とB Jハリアジャケットの御蔭で怪我は負っていない

純白のB Jが所々焦げ付いた程度

なのははレイジングハートを文字通り“杖代わり”として体を支えて立ち上がる

怪我は無いが、デモンズランスの直撃に体力を全て持っていかれた。

「…………お前は…過去を断ち切るべきだ…様々な思いと共に…」

なのはが顔を上げると少し離れた位置に、なのはに背を向けて立つリオンが居た。

今だ戦意を喪失していないなのはは攻撃を行おうとするが、失った体力では魔力を収束する事も出来ない

リオンは鞘から抜いたシャルティエを持つ手に力を込めた。

シャルティエに込められる強大な闇

今から放つ技はリオンの持つ技の中でBCを除くと『最強の技』

その威力は『SS』

技の始動状態の中でリオンは思い出す

かつて仮面を付けて仲間達と過ごしていた頃の事を…

自分の正体がバレた時でも仲間達は変わらずに接してくれた

そして仲間達の支えによって“過去を断ち切る”事が出来た。

リオンは思う

なのはの過去、ティアナの過去…

「今、万感の思いをこの技に込めて…！」

その全ての思いをシャルティエに乗せる

過去は断ち切らなければならない

なのはとティアナは過去に捕われた状態

リオンは2人への思いを込めて愛する人の名を放った。

「魔人闇！」

シャルティエから伸びる闇の槍

それは、なのはが張り直したプロテクションを尽く突き破り、なのはの腹部に直撃する

「きゃあああっ！」

闇の槍の直撃を受けたなのはは、まるでドリルで削られているかのように連続でダメージに襲われた。

なのはに直撃した闇の槍はなのはをビルの壁に叩き付ける

いや、正確には張り付けたと言った方が合っている

幸いにもシャルティエが非殺傷設定をしていた為に“なのはを貫く”事は無かった。

ビルの壁に張り付け状態で埋もれたなのはは技の終了と共に崩れ落ちる

『魔人闇』の威力に、なのはのBJは直撃を受けた部分は破れていた。

リオンは力無く倒れる少女を見下ろしながら、断ち切れない彼女の過去とそれが出来ない彼女に向かって小さく呟く

「消え去れ…この想いと共に！」

なのはの意識はそこで途絶えた。

『管理局の白い悪魔』（後書き）

ヴィータとシグナムって確実にマニアのツボを突いてるよね。

はい。今回の懺悔の時間です。

まず、なのは。

うん。冥王化しちゃいました。

何だかやり過ぎなような気もしますが、自分で書いてて違和感が無い事にビックリ

やっぱり、なのはさんはリリカルマジカルやってるよりも「言う事を聞かない人はオハナシなの！」っていう性格が合ってると思います。

…というか、なのはとフェイトとはやて

その歳で仕事が恋人っていうのは悲しくなるよね。

ユーノ！早くなのはさんを嫁に貰ってあげて下さい！

でもユーノって、典型的な草食系っぽいから無理かな…？

なのはって、原作のトラハではクロノ君が恋人なんですよね。

因みにこの後六課内で冥王様は口コミで広がり、男性局員はなのを見たと逃げるようになってしまいました。

哀れ！なのは！

次に坊ちゃん。

うちの坊ちゃんはとことんやりましたよ。

説得？

馬鹿な事をおっしゃらないで下さい。

坊ちゃんは脅迫しか出来ません。

『マリアン魔人闇』は秘奥義では無いんですが、【ナムカプ】で登場した際に秘奥義として使っていたので専用台詞があります

オリDでは驚異の鬼畜性能を誇った技

リメDでは性能は低下していますが、それでもかなりの強技

故に並の秘奥義よりも格上のランクを付けさせて頂きました。

尚、この小説内の『魔人闇』はモーションは【リメD】、威力・性能は【オリD】、台詞は【ナムカプ】と良いところ取りの鬼畜技です。

しかしこの技…

『四露死九』みたいなノリですね。

その内『無乃破』とか『斧影翔』とか『刃矢手』とか出そう（笑）

又、坊ちゃんの騎士甲冑モドキですが防御力は皆無です。

強いて言うなら坊ちゃんが動きやすいだけです

一応、騎士甲冑扱いなので戦闘が終われば六課制服に戻ります

さてさて、ヴィヴィオを登場させるまでに何か番外編でもやろうかな…？

と思っている七夜です。

ただ、番外編やオリジナルな話はキャラ崩壊を防ぐ為にも短めの話にはなってしまうです。

P・S・

そつえばギンガさんの存在を完全に忘れてましたですよ〜！
by・ライン)

『ウィータの新技(?)』(前書き)

今回は短い上にネタです。

番外編では無く、一応本編です。

『ヴィータの新技(?)』

ティアナが暴走し、リオンがなのはを撃墜した模擬戦での出来事から数日

なのはとティアナは自分の気持ちを話し合い、互いの中核にあってた蟻りを解消した。

それが影響してかティアナの動きは以前よりもキレを増し、FWの中核として実力を伸ばし始めている

他の3人のFW達もなのはの教導の下、確実に力を付けて来ておりもうすぐ訓練は第二段階へ移るであろう

「……………しかし…何故僕がこんな事を……………」

そう愚痴るのはリオン

今、彼が居るのは六課隊舎では無い

ミッドチルダ郊外の更に端

人があまり手を付けていない場所にリオンが居るのは隣に居る紅い少女が原因だった。

話は30分近く前に遡る

この日、六課の局員達は忙しく動き回っていた。

恐らくのんびりとケーキを食べているのはリオンくらいだ。

六課内が忙しいのは最近現れた新型ガジェットが原因

先程、食堂の前を通ったフェイトがリオンに新型ガジェットの情報が掛かれた資料を渡しに来ていた。

リオンは資料に目を通す

新型のガジェットは3日前くらいから現れ、他のガジェット達の統制をしている姿から『^{ボス}Bガジェット』と命名

大きさは？型よりも一回り大きく、アームも6本に増えており、頭にはアンテナ代わりの角が付いているんだとか…

防御力も折り紙付きで、その強固なAMFと防御力はシグナムの紫

雷一閃を2撃喰らっても堪え凌ぐ程

ただ、今はスカリエッティが機動実験をしている段階なのか被害は出ていない

ガジェット達を引き連れていたのは初めて目撃された1回のみで、それ以外は一定の区域をうろつくだけ

放っていても大丈夫なのだが相手が相手だ。

スカリエッティの行動は阻止しなくてはならない

故にBガジェットについて解析し、対策の戦闘法をFW達に教える為にも六課の局員達はこの数日間走り回っていた。

そんな中、リオンに話し掛けて来た人物

それがヴィータだった。

何でも新しくBガジェットが発見されたらしいのだが、今はなのもフェイトもシグナムも他のBガジェット殲滅に向かっている

流石に新人達を連れて行く訳にもいかない為、リオンを誘いに来たのだ。

「……何故、僕が行かなければならない。お前だけででも十分だろ……？」

「そう言うなよ。あたしの新しく考えた必殺技を使う機会なんだ。第三者の視点であたしの技が実戦に向いているか確認して欲しいんだ。……嫌とは言わせねえぞ」

そう言うとヴィータは騎士甲冑を纏い、グラーファイゼンをリオンの服に引っ掛けるとそのまま目的地まで飛翔した。

勿論、飛行許可ははやてから貰っている

そんなこんなで30分後、目的地に到着してみるとそこには報告通りBガジェットが1体

何をする訳でも無く右往左往さ迷っていた。

「リオン、此処はあたしだけでやるからな」

「……当たり前だ。お前に任せたぞ……ちびヴィータ」

「なっ、誰がチビだって!? お前だってチビじゃねえか!」

「煩い! 僕はお前よりは背が高い!」

そんな口喧嘩をしていると、リオン達に気付いたBガジェットは胴体の真ん中にある球体からビームを発射する

咄嗟に回避するリオンとヴィータ

「……ほらみた事か…! さっさと倒せ、ちびィータ」

「だからチビって言うな! あたしはこのサイズが気に入ってるだけだ!」

ヴィータは声を荒げながらBガジェットに向かってグラーファイゼンを振り下ろす

ドゴンツ、とハンマーで殴る独特な打撃音

普通のガジェットであれば潰れているだろう

だが目の前のガジェットは違った。

「……………何っ！」

アームを重ね合わせヴィータの一撃を防いでいたのだ。

ヴィータは反撃されない内にBガジェットから距離を取る

「……………口だけか……」

「……………何だとっ！？」

リオンに鼻で笑われたヴィータはグラーフアイゼンを振り回しながらリオンに文句を言う

「煩いぞ、見てろよりオン！これがあたしの新技だ！アイゼン！」

ガシャンッ、とロードされるカートリッジ

『 R a k e t e n h a m m e r 』

「でえやあああっ！」

アイゼンからロケット噴射させたヴィータはクルクル回りながらBガジェットに突撃する

遠心力と加速が組み合わさり、アイゼンの先端がBガジェットのアームに食い込んだ。

アイゼンを振り抜く事で無理矢理アームを押し上げ、Bガジェットの懐に飛び込む

それと同時にヴィータは足を踏み込み、アイゼンを高く振り上げた。

「続けて喰らえ！」

ヴィータが叫ぶ

その瞬間、リオンはまさかと思った。

この構えと掛け声…

見間違っ善が無い

これは“過保護な兄貴分”が使用していたネタ以外何でも無い技

ヴィータはアイゼンを振り下ろした。

「震天裂空斬光旋風滅碎神罰割殺撃！」

ヴィータが繰り出すのは神をもビビらせる怒涛の連撃

一撃一撃が命中する度に、ドゴンッ、ドゴンッ、とBガジェット
ボデイが凹んで行く

そして最後のトドメ

最後の一撃は地面を叩き付け、大爆発を起こした。

その光景にリオンは啞然とする

「どうだリオン！これがあたしの新しい必殺技だぜ！」

燃え盛るBガジェットを背にヴィータは高笑いしていた。

「……………っ!？」

ビクッ、と体が揺れたリオンは目を覚ます

周囲を見回してみるとそこは六課内の廊下

どうやら自販機の隣に備え付けられている休憩用の椅子で眠ってしまっていたらしい

「……………夢か…」

「…あ、リオン。目が覚めたんだね。駄目だよ、こんな所で寝たら…」

近くを通り掛かったらしいフェイトが注意を促して来る

するとフェイトは、何かを思い出したらしく一枚の資料をリオンに渡した。

そこに書かれているのは新型ガジェットの報告

「…リオンも新型と戦う事があったら気をつけてね」

そう言うとフェイトは去って行く

リオンは資料に目を落とした。

「……………同じだ…」

書かれている内容が全て夢と同じ

正に正夢と言った所か…

「おう、リオン。お前今暇か？」

資料に目を通してしているリオンの傍から声が掛かる

この後の出来事は……語るに及ばずだった。

『ヴィータの新技(?)』(後書き)

なのはとはやてって、ぶつちゃけチートキャラだよな。

はい。今回の懺悔の時間です。

今回は言つにも及びませんね。

ロニのロニによるロニの為の秘奥義をヴィータが使いました。

因みに坊ちゃんとは違いBCではありません。

あくまでカートリッジの使用によって使える近距離用魔法です。

正にベル力向けの技

この話は外伝では無く本編の一部なので、ヴィータは『震天裂空斬
光旋風滅碎神罰割殺撃』を会得しました。

威力的には『ギガントシユラーク』の次くらいの威力ですね

いつかはまた使つつもりです。

次に新型ガジェットですが…

ぶっちゃけ今話の為だけに出て来て貰ったような物

今後出て来るかは分かりません。

出て来なければ、スカリエッティの新型開発計画が失敗したという事で…

又、今後もこのような本編とは微妙にズレたような内容は少ページで時たまやっていききたいと思います。

最近困っている事なんですけど、おっぱ…もといギンガの性格とか口調を完全に忘れてしまっただけで分かりません

というか七夜の中には【ギンガ＝シグナムに『おっぱい担当』を取られた可哀相な娘】という認識しかありませんでした…。

P・S・

エリオとリオンの師弟コンビを“エリオン”って呼ぶと良いかもね

え〜って、ラインはラインは提案してみちゃったりするんです〜！
(by.ライン)

『リオンの休日』（前書き）

今回は久々の戦闘無しです。

物語も折り返しに差し掛かりました。

『リオンの休日』

薄暗い室内

そこに1人の男が幾つも映し出されているモニターの1つをマジマジと見ていた。

「……………ふむ……………」

「ドクター。また悪い癖が出てますよ」

男の隣に立つ女性は、男と同じようにモニターを見ながら注意する

そのモニターに映し出されているのは【ホテル・アグスタ】の事件時の映像

映像内で動き回っているのは奇妙な形をした剣と短剣を持ち、ガジェット達をいとも簡単に破壊していく少年

椅子に座る男『ジェイル・スカリエッティ』はモニターに釘付けになっていた。

その興味の対象は少年の持つデバイス

魔法陣を展開させる事無く、それでいてミッドでもベルカでも無い魔法を放つ

しかも威力は“ガジェットを破壊する”という確かなもの

「……ふふつ。済まないね、ウーノ。しかし之ばかりは仕方ないのだよ。あのようなデバイス…私は見た事が無い…。これは私に対する挑戦なのだよ…！私はアレに匹敵する程のデバイスを作ってみせる！」

己の研究対象を見付けたスカリエツティの瞳は純粹な少年そのもの
言い出したら止まらない

それを知っているウーノは溜息を吐きながら頭を押さえた。

「ドクター。研究は構いませんが、せめて食事と入浴ぐらいはして下さい」

「分かっているさ…ウーノ。この研究が終わればね」

スカリエツティは言葉だけ返すと早速取り掛からんとばかりにパネルを操作し始める

食事と入浴は一体いつになる事やら…

スカリエツティの人としての危険を感じたウーノはスカリエツティの襟元を掴み強制的に浴場へと連れて行った。機動六課海上訓練施設

そこでは今日も今日とて厳しい訓練が行われている

今行われているのはFWと隊長陣の模擬戦

実力が上がって来たFW達は既に新人というレベルを脱しており、今では六課の中核を担う存在となり始めていた。

リオンは訓練施設の隅っここで模擬戦を見物している

元々見に来るつもりは無かったが、はやてからの手伝いも特に無く1日中暇を持て余しているリオンは気まぐれで此処に来ていた。

ただ1つだけ見物に来た理由として挙げるならば、エリオがどれ程までに強くなっただかを確認したかったという事もある

リオンが訓練施設に着いた時には既に模擬戦は始まっており…

「あたしの道を突き進む…！スパイラルドライバー！」

ヴィータがアイゼンの噴射を利用して体を回転させながらFW達に突撃を掛けていた。

それはもう、兄貴の如く勢いで…

「ヴィータちゃん。あんまりふざけた事しているとオハナシするよ？」

「ふざけてなんかねえよ。あたしの新しい必殺技なんだ」

真剣に注意するのに向かって真剣に反論するヴィータ

何故だろう…

性格も姿も似ていないのに、リオンにはヴィータとロニが被って見えた。

恐らく彼女の進化は止まらない

グイータの使った技に何故か疲れを感じたりオンは踵を返し隊舎へと戻った。

その後、特に何もする事が無かったりオンはいつも通り剣技の確認を行い、適当に時間を費やしてから食堂へと向かった。

時間は丁度お昼時

食堂は人で溢れ返っており、空いている席が見当たらない

「……………あ、リオン……。此处、空いてるよ?」

食事の乗ったトレイを持ち、席を探していたリオンを呼ぶのはフェイト

彼女に呼ばれて近付いてみると4人掛けテーブルに、なのはとフェイトしか座っておらず席が2つも空いている状態

リオンは2人の間に座った。

「リオン君は今日はどうするの？」

なのはに聞かれたリオンは問いの理由を聞き返す

どうやらFW達は訓練が第二段階に進むにあたって今日一日は休暇となつたらしい

「……いや…普段通り過ごすつもりだが…」

リオンは答える

毎日が訓練と書類整理のFW達なら折角の休暇に何かやりたい事はあるだろうがリオンには無い

そもそも、リオンは民間協力者……というよりもボランティアという形で認識されている為、大した仕事はしていない

精々するのは、はやてやなのはの書類整理の手伝いや、その他雑務程度

しかも毎日という訳では無いので比較的自由に過ごしている

故に“休暇日”という物はあって無いようなもの

之と違って1日の過ごし方を考える必要も無かった。

「……………それじゃあ…また私の作ったお菓子を食べてくれないかな？」

そつりオンに提案するのはフェイト

フェイトはリオンが“甘い物が好き”という嗜好を聞いてから時たまりオンにお菓子を作っている

勿論まだまだ初心者である為、喫茶店の娘でもあるのはに手伝って貰いながらではあるが…

作り始めた当初はリオンに、不味い、と一口目を食べた直後に言われてしまいショックを受けたりもしたが、それを糧に美味しい物を作ってみせようとする意欲が生まれた。

尚、その際に一部始終を見ていたフェイトのファンクラブに所属する者達はリオンに殺気を集中していたらしい

「……今回はちゃんと食えるのか…？」

「…大丈夫だよ。今日こそは美味しいのを作ってみせるから」

「……精々期待しておく…」

素っ気なく答えるリオンだが、何だかんだと言って結局はフェイトの作るお菓子を平らげている

マリアンには遠く及ばないが、フェイトの腕前が上達しているのは認めていた。

その後、FWの面々は各自の休日を楽しむ為に行動を開始する

スバルとティアナはヴァイス陸曹から借りたバイクで街へ

エリオとキャロも周りの人間が作ったデートプランに乗せられて街へと出掛ける

「グイータさん。新しく出来たアイスクリーム店のアイス、出来たらテイクアウトして来ますね」

「おっ。楽しみにしてるぜ、エリオ」

エリオはヴィータにお土産を買って来ると言い残しキャロと出掛けに行く

仕事の都合上、アイス店に行きたくても行けなかったヴィータは傍目から見ても幸せそうに六課隊舎を歩いて行った。

それから暫くして、フェイトとなのはの部屋に招待されたリオンは彼女達の部屋に備え付けられているテーブルの前に座る
部屋に設置されている簡易型のキッチンからは甘い匂いと騒がしい声が流れて来ていた。

「……………えっ…あっ…ああっ!？」

「フェイトちゃん落ち着いて」

「……………大丈夫なのか…？」

リオンはキッチンを見ながら事の成り行きに心配していた。

「……………お待たせ、リオン……………」

それから30分くらいしてか、フェイトがリオンの元へと向かって来る

何故か彼女の顔には典型的なドジっ娘のようにクリームが付いているのだが……

フェイトならやりかねないと納得してしまっものだ。

リオンの目の前に置かれた皿に乗っているのはシュークリーム

形は酷く歪

「……………」

『坊ちゃん、感想を聞かせて下さい』

見栄えからして食が進まないリオンだったがシャルに促され、シュークリームを1つ口へ運ぶ

「……意外と美味しいな……」

「……良かった。けど、殆どなのはに手伝って貰ったんだけどね……」

「私は作り方を教えただけで手伝ったりしてないよ」

笑顔でキッチンから出て来るのはの手にもシュークリームの乗った皿が持たれている

こちらはフェイトの作った物とは違い見栄えも良く、見ているだけでは気が済まない

「ユーノ君に作ってたんだけど少し余っちゃったんだ。リオン君、食べる？」

「……食べられる物なのか？」

フェイトの時のように冷たく言うが、リオンの目にはなのはのシュークリームしか映っていない

リオンはなのはの作ったシュークリームを口へ運ぶ

「……………」

言葉が出なかった。

完璧過ぎる甘さ

正直、マリアンの作るお菓子と肩を並べる程に美味しい

話を聞くと、どうやらなのはの実家は喫茶店をしているらしく、このシュークリームは店の看板メニューなんだとか…

喫茶【翠屋】

一度行ってみたいものだな、とリオンは思った。

フェイトはなのはの作ったシュークリームを美味しく平らげたりオンを見て、なのはの母『桃子』からお菓子作りを習おうかと真剣に考えたりしていた。

そんな中、街に遊びに行っていたエリオから全回線での念話がフェイトとなのはの頭に響く

レリックらしき物が入ったケースと、それを持つ少女を保護したとの事

フェイトとなのはは目を合わせると頷く

念話が使えないリオンは2人が急に真剣な表情になった為、シュークリームを食べる手を止めていた。

『坊ちゃん、ストラーダから緊急通信が来ました。どうやら事件みたいですね』

「……食べている最中くらいは静かにしておいて欲しいものだ……」

リオンは残っているシュークリームを名残惜しそうに見ながら、な

のは達と共に街へと向かった。

『リオンの休日』（後書き）

バインドからのSLBは『魔人闇』に負けず劣らずの鬼畜技だと思います。

はい。今回の懺悔の時間です。

まず、全体的な流れ

ぐだぐだにも程があるな…。

この話を書いてて、つくづく自分は“日常系”が苦手だと言っ事を理解しましたよ

尚、坊ちゃんと冥王様の関係ですが模擬戦があつたものの悪くはなつていません。

なのはも自分の間違いに気付きましたから

次に、ヴィータ

彼女の進化は止まらない

どんどん兄貴化していく幼女

ヴィータファン
君は付いて来れるか！

急にですけど【エリヴィタ】って良いですよな。

前にも言った通り、七夜は【エリキャラ】よりも【エリヴィタ】派です。

【エリフェイ】や【エリシグ】も好きですよ

エリオって歯の浮く様な台詞を真顔で言いそうですからね（笑）

フェイトやシグナム、ヴィータはきつと顔を真っ赤にするでしょう。

この二次創作、フェイトの出番がやけに多い気がするのだが…

……何、気にする事は無い。

七夜がフェイト好きなだけさ。

一応、カップリングという形を記載するならば【リオン×フェイト】
なんです

厳密には

リオン フェイト 「マリアンに似ている」

フェイト リオン 「手の掛かる弟」

という風にしか互いを見ていません

それ以上の進展は今の所ありません

又、高町家末っ子であるなのはもフェイトと同じく「手の掛かる弟」
として見えています。

さてさて、次回はイオン様…もといヴィヴィオを保護する回です

ヴィヴィオ自体の登場はもう少し先かな。

P・S・

ヴィヴィオはリンの“六課マスコット”の座を狙う計算高い女狐
なんですっ！(by・リン)

『造られた存在』（前書き）

今回は詰め込んでます。

無理矢理感がありますがどうぞ。

『造られた存在』

エリオからの全回線での緊急通信を聞いた六課メンバーは、首都クラナガンに集まった。

リオンはFW達が居る下水道内の通路を走っている

FW達は地下に反応を捉えたレリックの回収に向かっており、なのはとフェイトはガジェット殲滅の為に海上へと飛んで行った。

故にリオンは独り走る

「何処だ此処は！」

『坊ちゃん、完全に道に迷いましたね』

広大な下水道の道をリオンが知っている筈も無く、既に数分は走り回っていた。

レリックを狙うガジェット達と時たま遭遇しては破壊、遭遇しては破壊を繰り返す

そして何十体目かのガジェットを破壊した頃辺りにシャルが口を開

いた。

『……………ねえ坊ちゃん…?』

「……………何だ…?」

『ふと思ったんですけど……………ガジェットを追い掛けた方がレリックのある場所に向かえるんじゃないですか?』

シャルのその言葉にリオンは、ピタツと足を止める

そしてシャルのコア部分をまじまじと見ること数十秒…

「……………何故早く言わない…?」

『あれ…っ?もしかして…坊ちゃん気付いてませんでした?』

1人と1本の間には微妙な空気が流れた。

気を取り直しガジェットを破壊しつつ後を追いつけたリオンは、F
W達と副隊長陣と合流した。

その中に一人見覚えの無い顔

怪しい奴を見るような視線を投げ掛けていたリオンに、その女性は
自己紹介する

女性の名は『ギンガ・ナカジマ』

“ナカジマ”の姓から分かる通りスバルの姉

少しだけ会話をしたりオンが感じたのはスバルとは真逆の知的で品
のありそうな性格だという事

しかし、後日リオンは知る

ギンガもスバルと姉妹というだけあり、大食い天然だという事に…

下水道を走る8人はレリック反応が見られた大きく開けた場所に出る

「……………ん？あれは…」

散開してレリックを探す中、ヴィータは箱を持った少女を発見した。

少女が持つ箱は間違いなくレリックの入った物だろうと確信したヴィータは少女に近づく

「なあ、何でこんな所に居るのは知らねえが、お前の持つてる箱……………危険だからあたしに」

「ヴィータ副隊長！」

少女に話し掛けていた最中にエリオから掛かる声

その口調は危険を知らしている

ヴィータがアイゼンを握り直そうとするよりも先に頭上から殺気が襲い掛かった。

ガキイイツ、と硬い物が交わる音に遅れて上を見るヴィータ

そこには数十メートルの距離を一瞬で詰めたエリオのストラダと、漆黒の人型昆虫の爪が交わっていた。

エリオは人型昆虫を押し退ける

体格的には勝っている人型昆虫だったが、空中という足場の無い状態だった為に簡単に押された。

その長身の人型昆虫は少女を守るように立つ

「グイータ副隊長。大丈夫ですか？」

「ああ。済まねえなエリオ」

2人は視線を昆虫と少女から離さずにデバイスを構える

すると少女の足元に魔法陣が現れ、辺りに数体の巨大な昆虫が現れた。

「……………ガリユー、倒して……」

召喚士の少女は漆黒の昆虫『ガリユー』にお願いすると、ガリユーは爪を伸ばし飛び掛かって来る

「僕が行きます！」

そう叫びながらヴィータよりも先に前へ出たのはエリオ

ガリユーの身の丈や体格からは想像の出来ない高速な動きにエリオは反応して攻撃を受け流す

「ヴィータ副隊長！早く終わればアイスを食べに行きましょう！」

エリオはヴィータにそう言うと、答えを聞かずにガリユーと高速戦を開始した。

体格的に不利なエリオはガリユーの攻撃を受け止めずに受け流す

そして、リオンから学んだ踏み込みと関節の使い方を利用し、無駄な動きを最小限まで少なくした突きを放つ

一度の踏み込みで放たれる突きは三発

だが、その全ては槍の先端を僅かに逸らされる事で紙一重に回避される

エリオはガリユールと高速での攻防を繰り返しながら戦場を駆け回った。

その攻防を見ていたヴィータは踵を返すと近くに召喚されていた巨大な甲虫のような生物にアイゼンを構えて突撃する

「……へっ！言うようになったじゃねえか」

口元がにやけるヴィータの答えは既に決まっている

“アイスを食べに誘われた”のなら行くのが当然

ならばエリオとアイスを食べに行く為に仕事を早く終わらせる

「あたしは早く終わらせてエリオとアイスを食べに行くんだ…！その邪魔をするってんなら！」

ヴィータは襲い掛かって来ようとする甲虫へと突き進むと、アイゼ

ンを持つ手に力を込めた。

そして相手よりも先にアイゼンを振り下ろす

「お前を屠る！」

ドゴンツ、とアイゼンを頭に叩き付けられた甲虫はその威力に頭を床で跳ね返らせ大きくのけ反らせた。

「これがあたしの…！」

アイゼンを上空に放り投げたヴィータは跳び上がりアイゼンを頭の上で掴み直す

そして重力に身を任せて甲虫へと襲い掛かった。

「クリティカルブレード！」

ズドンッ、と甲虫の体に直撃するアイゼン

のけ反っていた甲虫は上手い具合に吹き飛び、その体を壁に沈めた。

カートリッジを使っていないにも関わらず、ラケーテンハンマーと同威力のクリティカルブレードに満足したヴィータはFW達の援護へと向かった。

「…………ちっ、こいつら…！」

召喚された昆虫達にリオンは思いの外苦戦を強いられていた。

理由は簡単

場所が場所だけに晶術が使えない事

接近戦で倒せない事は無いが敵は硬い

それを1体ずつとなると自ずと面倒臭くなって来る

「爪竜連牙斬！」

踏み込みから4連撃が命中し1体の甲虫を倒す

他の甲虫達はFW達の連携と副隊長陣の攻撃により次々と倒されていた。

エリオはガリユーとの高速戦を続けている

「…あぁっ!？」

そんな中、FW達の中で1番不利な状況に居たキャラロが足を取られて大きく転ぶ

キャラロは補助魔法によってティアナやスバルを強化しているのだが、場所が場所だけに自らの防衛にフリードを使えない事が体力を大きく削っていた。

「キャラロ！」

キャラの危険に気が付いたのはスバル

キャラの近くには甲虫が近付いている

『坊ちゃん!』

「……………ちっ!面倒を増やすな!」

キャラの1番近くに居たりオンは周辺への被害の少ない晶術を放った。

「シャドウエッジ!」

小さな闇の槍がキャラに襲い掛かろうとする甲虫を僅かに怯ませる

威力的には之が限界

だが、リオンにはそれで良かった。

キャラと甲虫との間に割って入ったりオンは体勢を低くすると甲虫を斬り上げながら跳び上がる

「崩龍斬光劍！」

そこから放たれるのは目には捉えられない速度での連続斬り

ジグザグに走る剣撃は甲虫に大きなダメージを与える

「消える！雑魚が！」

最後の横薙ぎに甲虫の体は大きく怯んだ。

リオンの体勢は甲虫に背を向けた状態

『BC解放』

「見切れるか！」

直ぐさま振り向いたリオンは追撃とばかりに2回斬り付ける

「喰らえ！」

振り上げた一撃は甲虫のその巨体を宙に浮かす

リオンは腕を引き絞ると解き放った。

「翔破裂光閃！」

繰り出されたのは神速の連続突き

ズドドドドッ、と豪雨のように隙も無く振り抜かれるシャルティエ

『翔破裂光閃』の最後の1撃は甲虫を吹き飛ばした。

リオンの秘奥義を初めて目の当たりにしたFW達は戦闘の最中だと

いうのに固まる

シグナムも又、戦闘の最中だというのに“再び戦いたい”と口元がにやけている

リオンは動かなくなつた甲虫を見ながら、その甲虫に向かって静かに言い放つた。

「貴様に見切れる筋もない……」

その後は色々大変だった。

レリックは何とか取り返したものの保護した少女を乗せたヘリが狙い撃ちされ、それをなのはとフェイトが間一髪で防御

犯人を追い詰めるが、後一步の処で逃げられてしまった。

保護した少女は一度検査の為に入院する事になる

数日後：

リオンは六課の敷地内にある叢に腰を降ろしていた。

得に意味は無い

ただの気まぐれ

叢に座ってから何もする事は無く、時間だけが過ぎて行く

既に辺りは暗くなり始めていた。

「…………リオン…此処に居たんだけ？」

背後から声が掛けられる

リオンは振り向かなくても声の主が誰なのか分かった。

そもそも、此処まで話し掛けて来るのは彼女しかない

「……………何の用だ…フェイト…？」

「…今日はFW達と集まって保護した女の子について説明するって言ったのに来ないんだもん…」

「僕は民間協力者だ…。お前達の言う事に一から百まで従う必要は無い」

素っ気なく答えるリオン

フェイトはリオンの隣に腰を降ろすとFW達に説明した事と同じ事をリオンに話し出した。

保護した少女の名前は『ヴィヴィオ』

自分の名前以外の記憶が無く、なのはとフェイトが保護観察者になったという事…

そして、ヴィヴィオが“造られた存在”であろうと言う事…

その内容にリオンは驚かされる

自分達の世界でもソーディアンと呼ばれる人格を搭載した剣などがあつたが、こちらの世界では人を造り出せる

勿論違法なのだが、その技術力は凄いという他無い

「……………それと…リオンには教えておくね…」

フェイトは一旦言葉を区切ると、呼吸を整え、口を開いた。

フェイトから話されるのは己の出自

【プロジェクトF】の一つとして造り出された事を…

「……………そうか……………」

話を聞き終えたりオンはそう言うしか無かった。

同情などするつもりは無い

だが、フェイトに掛ける言葉が見当たらない

こんな時、自分の事を仲間と言いつけたスタンやカイルならば言葉を繋げられたらう

今のこの瞬間だけ、リオンはあの親子の思考が羨ましく思った。

「……でも、私は皆が居てくれるから…大丈夫…」

先に言葉を放つのはフェイト

リオンに心配させまいとしているのだろう

無理に笑顔を作っている

「……僕がお前の心配などする筈が無い」

リオンは顔を逸らしながら答えた。

暫く流れる沈黙

空には星が輝き始めていた。

「……リオン…一つだけ教えて貰っても良いかな？」

フェイトは夜空を見上げながらリオンに問う

「……自分の話を聞かせたから僕にも答えると…？卑怯だな……」

冷たくあしらうリオンだがフェイトはリオンの眼を真剣に見ていた。

「……うん…私は卑怯者かもしれない…。でも、知りたいの……」

「……何をだ…？」

「…前にリオンが私に言っていた“似ている”って言う言葉……。あれは誰の事なの…？」

フェイトはリオンの心へと足を踏み込む

『…………坊ちゃん…………』

顔を俯かせるリオンを心配するシャル

「…………シャル…………」

シャルティエのコアを見ながら相棒の名を呟くりオン

そこから流れる長い静寂

リオンは迷う

“彼女”の話をするだけならまだ良い

だが、この話を始めると自分の過去を語らなければならない

自分の過去を聞いた時、果たして隣にいる執務官は自分をどう思うのか…

そんな考えを繰り返すリオンは、そんな自分に溜息をつく
昔はこんなに他人を気にする性格では無かったのに…と。

それに過去は断ち切った。

これから自分の過去を話し、それをどう捉えるかは彼女次第

元々、自分は他人とは相容れぬ存在

嫌われるのは構わない

だが、リオンはフェイトに“彼女”と同じ感覚を持っていた。

フェイトなら話を聞いてくれるだろう…と。

「……子供の頃見上げると……いつも彼女が微笑んでいた」

リオンは夜空を見上げながら口を開いた。

『造られた存在』（後書き）

キャラって今だに一言くらいしか喋ってません。

はい。今回の懺悔の時間です。

まず、坊ちゃん。

最後のフェイトとの会話部分、自分で書いててかなり違和感ありました。

あれ？これ坊ちゃん？

でも、こうでもしないとリオンの過去話に持って行けないので少し無理矢理にしました。

次に地下での戦闘。

正直、この辺りの原作の流れを忘れてしまったので所々端折りました。

次からは原作を見直しながら書いて行くようにします

次回はリオンの過去話です。

P・S・

そつえばリインの出番はまだなんですかあゝ？) b y ・リイン(

『エミリオ・カトレット』(前書き)

リオンの過去は【リメD】基準です。

【オリD】ファンの皆様ごめんなさい。

『エミリオ・カトレット』

「……子供の頃見上げると……いつも彼女が微笑んでいた……」

静寂が場を支配する中、リオンは静かに口を開く

「……彼女はいつでも僕に優しく包み込む様に接してくれた……。……それがお前と被るんだ……フェイト……」

視線をフェイトに移し、何か懐かしい者を見るような目でフェイトを見るリオンの

恐らく“彼女”とフェイトを重ねて見ているのだろう

「彼女の名は『マリアン』……。僕が生涯で唯一愛した人だ……」

「……生涯で……唯一……?」

続けるように出て来たリオンの言葉の気に掛かった部分をフェイトは復唱した。

“生涯で唯一”

それはどちらかと言えば死を間際にした者や、死を迎えた者の人生を振り返った際に使う言葉

生きている筈の、ましてや16年生きただけの少年が使うには不適切過ぎる

だからフェイトは聞き返した。

「……リオン……生涯で唯一って……どういう事なの……？」

フェイトに問われたリオンは顔を僅かにしかめる

やはり自分の過去を話すのは気が進まない

だが、マリアンの話を出した時点で“リオンの過去”に触れなければならぬ事は覚悟していた。

リオンはその覚悟をした上でフェイトにマリヤンの名を明かした。

だから全てを話す

「……僕の過去を話す必要があるな……。……おい、そこに隠れてる奴ら全員出て来い」

「……こゃはは」

「何や、バレてもうてたんか」

リオンが殺気の籠った声で呼び掛けると、近くにあった街灯や木、叢の陰や裏から六課前線メンバーが顔を出した。

「……えっ！？皆…どうして此処に…？」

まさか全員が話を盗み聞きしていたとは思わなかったフェイトはオオオする

そんなフェイトに加虐心が擽られたのか、はやてとなのはは互いに眼を合わせ…

「だってフェイトちゃん、仕事は終わった筈なのに急にいなくなるんだもん」

「そや。もしかしたら男との密会やと思つてな」

…と、嫌な笑みを浮かべながら言った。

「……ち、違うよ…密会だなんて…！」

必死に反論するフェイトだが全然迫力が無い

「取り敢えず、此処じゃ冷えるから会議室にでも行こっか」

なのはの提案によって場所は会議室へと移された。

会議室に入ったリオン、隊長陣、FW陣は椅子に座る

全員これから任務を受けるかの様に真剣な表情でリオンに視線を集中させた。

『……………』

シャルは何も言葉を話さない

マスターであるリオンが決めた事には従うのがソーディアン

重々しい雰囲気の中、リオンが口を開いた。

「……………先に言っておく……。お前達に話したこの世界に来た原因は嘘だ……」

その言葉を聞いた瞬間、「えっ？」と言う声何人か挙がったが小さい物だった為、リオンは無視して続ける

最初にリオンの口から語られたのは、自分が居た世界の歴史

地上に残った人間と、空で生活を始めた特権階級による戦争

状況が不利であった地上軍は天才科学者『ハロルド・ベルセリオス』

の手によって6本の人格を持つ剣を造り、状況を打破し戦争に勝った。

「……その人格を搭載した決戦兵器を『ソーディアン』と呼ぶ」

「それじゃあ……リオンの持つシャルティエって……」

フェイトの言葉にリオンは無言で頷く

「……ハロルドが造った6本のソーディアンの名は『ディムロス』、『アトワイト』、『クレメンテ』、『イクティノス』、『ベルセリオス』、そして『シャルティエ』だ」

此処まで話したりオンは全員を一度見直す

この時点で何人かは重い話に表情を暗くしているが、その調子でリオンの過去を最後までまともに聞けるのか……

「……歴史はそれくらいだな……。次は僕の過去になるが……聞く

勇気の無い奴は直ぐに退室しろ」

リオンは過去を話す前に全員に聞く覚悟を問い掛けた。

全員無言で座っているという事は最後まで聞くという意思表示

人の過去話という事で面白半分や興味半分で聞いている者も居るか
もしれないがそれは自己責任だ。

リオンは再び口を開く

「……僕には父と母、そして姉が居た。…だが母は僕が生まれた直
後に死に、姉とは生き別れになった…」

リオンは言葉を紡ぐ

自分がオベロン社総帥のヒューゴの息子であり幼少時から様々な教
育を詰め込まれた事…

そして自分専属に配置されたメイドがマリアンだったという事…

「……僕は彼女の優しさに母の面影を重ねていたのかもしれない……」

そう語るリオンの眼を見ていたフェイトやなのはは思う

なんて悲しい眼をしているのだろう、と……

「……僕は彼女に認めて貰いたくて……彼女と対等な存在になりたいくて王国客員剣士になった」

次にリオンの口から出て来るのは【運命の物語】の始まり

遺跡を盗掘しているという情報を受けて向かった村に居たのは、ソーディアンとルーディアンを持つ2人と女戦士

3人を取り押さえた後に調べた資料を見れば、ソーディアン『アトワイト』を持つ女『ルーティ・カトレット』が実の姉である事をリオンは知った。

そしてその後、天地戦争時の遺産【神の眼】を巡り世界を一周する程の旅に巻き込まれ仲間達と共に戦い抜き、神の眼を取り戻す

リオンの過去は之で3分の1を話した。

話を聞いている面々は“世界一周の旅”や“仲間達との協力”という言葉に目を輝かせている

「……半年後、僕は【神の眼】を奪った」

だが、次の言葉を聞いてその輝きは一瞬で消え失せた。

今、リオンは何と言った…？

話を聞いた限りでだが、あれ程までに苦勞して仲間達と取り戻した【神の眼】をリオンが盗んだ。

「……どうして…そんな事を…？」

「…父、ヒューゴからの命令だったからだ」

フェイトの問いにリオンは答える

「…お父さんの命令だからって…」

「……ヒューゴにマリ안의命を握られていた…。だから逆らう訳にはいかなかった」

その言葉にフェイト達は驚愕する

愛する人を人質に取られたりオンが犯罪に手を掛けさせられた事に…

それだけでも十分衝撃的であるフェイト達にリオンは追い撃ちと言わんばかりに言葉を続けた。

それは海底洞窟での死闘

「……そんな…っ！お父さんの命令で仲間や実のお姉さんまで殺そうとしたの…？」

「……僕は殺せる…大切なものを守るためならば例え親でも兄弟でも、だ」

言い切るリオンの眼には迷いや後悔は無い

話は戻り、繰り広げられた死闘の末にリオンは敗れた。

だが、リオンの役目はそれで十分

ヒューゴはスタン達を殺す為に海底洞窟へと水を放った。

そう。リオンはヒューゴに捨て駒として利用されていたのだ。

話を聞いていた面々は、ヒューゴのやり方に怒りを覚える

「……で、お前は仲間達と一緒に脱出してヒューゴの野郎をぶっ飛ばしたって訳か？」

「……違うな」

リオンはヴィータの言葉を否定する

「……海底洞窟の出口は塞がれていた。脱出する為にはリフトを使う必要がある……が、リフトは洞窟内に誰かが残りレバーを動かさなければならなかった」

「……じゃあ、どうやって……？」

「……話は最後まで聞け、フェイト……。レバーを動かすのなら誰かが残り操作するのみ……。だから僕はスタン達に後の事を任せてレバーを引いた」

顔を上げたリオンは真剣に、重々しい声で言った。

「……そして僕は海水に飲まれて……死んだ」

リオンの言葉に全員固まった。

リオンは海底洞窟で死んだ……。

なら今此処に居るリオンは……？

「マグナス、ふざけるのは程々にしろ」

「……そ、そうだよ。死んだんなら此処に居るお前は一体何なんだよ？」

誰よりも先に口を開いたのはシグナム

それに引き続くようにヴィータも文句を言う

「……話は最後まで聞けと言っただろう」

その文句に答える為にリオンは語り出す

18年後の【二度目の運命の物語】を…

それは神の奇跡によって蘇ったりオンの軌跡

ジューダスと名を変え、スタンとルーティの息子『カイル』とその仲間達と歩んだ“時を越えた旅”の話

そして物語は最期を迎える

「……神を倒した事により歴史の修正を受けた仲間達はそれぞれの世界へと帰った。……だが、僕は既に死んでいる状態……。この世から消えるしか無かった」

そうして次元の狭間で存在が消えるのを待っているところの世界にやって来た。

話を終えたりオンは室内を見回す

まだ若いFW達は元気が無くなっており、隊長陣の表情も暗い

話す事は全て話した。

後はどう思つかは彼女達次第

「……僕は仲間を裏切り死んだにも関わらず、こっぴどいのついでと生きている……」

リオンは席から立ち上がると今だに沈んだままの面々の後ろを通り
部屋の扉を開ける

「……さて、優しいお姉さん達。それでも僕を仲間と言えるかい？」

そう言い残しリオンは部屋を出て行った。

会議室の中に流れる数十分の沈黙

はやては夜も更けつて来た為に全員を解散させた。

「……ねえ……なのは、はやて」

部屋へと戻る最中でフェイトが2人に話し掛ける

「どづしたの？フェイトちゃん」

「……私……リオンを放っておけないよ……。好きな人の命を握られて戦わされて……悲し過ぎる」

「私かて何とかしたいと思うとるで。裏切った言っても元居た世界での話やし」

「わたしだつてそうだよ。リオン君に“過去を断ち切る”手伝いをして貰ったから」

3人の気持ちは同じだった。

元居た世界では世界を滅ぼしかねない犯罪に手を貸した重罪犯かもしれない

けれど、この世界ではFW達を守ってくれている

元の世界に二度と戻れないのなら、この世界では幸せになって欲しい

「……私、リオンと友達になる……！」

決心したかのように言うのはフェイト

なのはとはやては思わず固まる

「……私も、なのはやはやてと友達になって嬉しかった。だからリオンとも友達になろうと思う……」

「うん……。良い考えやとは思っけど相手はリオン君やで？中々、仲良くなれんと思うんやけど……」

「……そんな事無い。リオンは仲間以後を託せる程に仲間を信頼してたんだよ……？なのはやはやてと友達になれたようにきつとリオンともなれると思う……！」

そう言うとフェイトは踵を返し早足で歩を進めた。

向かうはリオンの部屋

「……リオン、フェイトだけど今良い？」

しかし返事は無い

部屋には戻っていないのか……

フェイトは他の場所を探し回る

食堂、自販機横の椅子、休憩室、玄関、訓練施設

「……………リオン……………」

訓練施設から戻って来たフェイトは夜空を見上げるリオンを見付けた。

場所はマリアンの名を教えて貰った叢

フェイトはリオンに近付く

「…僕を捕まえに来たのか？執務官様？」

わざと嫌みたらしく言うリオン

フェイトはそんな言葉に耳を貸さずに口を開いた。

「……リオン、私と友達になろう」

「……急に何を言い出す」

リオンの反応は最もだ。

急に何を言い出すかと思えば…

フェイトは構わずに続ける

「……お互いに心を込めて名前を呼ぼう。そしたらとても嬉しい気持ちになれるから」

かつて自分がなのはに“友達”になって貰った時に感じた気持ちをリオンに教える

先程のリオンの過去を聞いて“幸せになっても良い”と直に言っはならない事をフェイトは理解していた。

だから遠回しに言う

“リオンに幸せになって欲しい”と…

「私の名前……呼んでみて……？『フェイト・T・ハラオウン』って……」

優しく慈愛に満ちた微笑みでリオンに言う

その包み込むような物言いはマリアンを彷彿させ、自分を『友達』にしようとしてくる様はスタンを彷彿させる

「……いつもは付け所の無い奴なのに……こんな時だけお節介なんだな」

「……だって……リオンと“友達”になりたいから」

「僕は裏切り者だ……。お前達と馴れ合える筈が無いだろ」

「……確かにリオンは仲間を裏切ったのかもしれないけど、この世界では関係無いよ。それに“友達”になる事と馴れ合いは少し違うんだよ……」

普段のフェイトからは想像出来ない屁理屈にリオンは呆気に取られ

た。

今の彼女には聡明という言葉が似合わない

“ リオンと友達になる ” という事だけが頭にある状態

それは、あいつと同じ “ 能天気 ” という言葉が似合う

「 …… 普段のお前ならともかく… 僕は今のお前みたいに能天気で凶々しくて馴れ馴れしいヤツが… 大嫌いだ 」

「 …… リオン…? 」

「 …… 互いに名前を呼ぶ…? ならばお前とは “ 友達 ” にはなれない 」

その言葉にフェイトは表情を暗くする

自分ではリオンの心を晴らす事は出来ない

そう思いその場を去ろうと踵を返す

「 …… だが… お前達となら馴れ合うのも悪くは無いかもしれないな …… 」

不意にリオンは呟いた。

かつて“自分”という存在を確立する為に、“仲間”という言葉を受け取らなかつた過去

昔のリオンなら他人と馴れ合う気は生まれなかつただろう

だが、スタン達との出会いやカイル達と旅をした事で“仲間”を悪くないと思い始めていた。

リオンは機動六課に…

そして、マリアンと同じ感覚のフェイトを悪くないと感じていた。

だから…

“仲間”という存在を今度は自分から掴んでみようと思った。

スタンやカイルから与えられた時の様に待っているのでは無く、自分から掴みに行く

「……リオン……」

「……違う……」

リオンは言う

かつて、ただ独りにだけ言うことを許した言葉を……

「……リオン・マグナスは偽名だ……。僕の本当の名は『エミリオ・カトレット』……。フェイト・T・ハラオウン……。お前だけこの名前で僕を呼ぶ事を許してやる」

飽くまでも上から目線

それでもフェイトの表情は見る見ると綻びる

自分の名を目を見て真剣に呼んでくれた事と、本当の名を教えて貰った事……

「ありがとう、エミリオ……」

その全ての想いを込めてフェイトはリオンの名を呼んだ。

『エミリオ・カトレット』（後書き）

ヴィータとシグナムって書きやすい性格と口調のキャラですね。

はい。今回の懺悔の時間です。

最近、どんどん七夜の文章構成力が破綻して来ましたね…

本当にごめんなさい。

感想でも“急に話の内容が変わる”という御指摘を受けましたので表現描写には今後気をつけていきたいと思えます

ただ自分でも直るか心配…

ティアナ暴走の回とか、ヴィヴィオ保護の回とかが特に顕著なのでいつか書き直そうかと思っています

作品を終了してからになると思いますが…

次に本名を明かした坊ちゃんですが…

原作でもジルクルストの姓は名乗らずに『カトレット』を名乗って
いましたので『エミリオ・カトレット』を本名にしました。

又、今話を含み今まで書いた話には所々にリオンの原作での台詞を
アレンジした台詞があります

皆さんは分かりますかね？

まだまだ拙い文章、及び文章構成力ですがリオンへの愛で乗り切っ
て行ける様に努力していきます。

303

P . S .

なのはForceのリリイのリアクト時の服装がラインと被ってる
ですう！ヴィヴィオと同じくラインの座を奪おうとしてるですよ
お〜！（by・ライン）

『予言と幼子』（前書き）

七夜の持ち歌は【夢であるように】です。

坊ちゃんとフェイトの台詞に「…」が多くて困ります。

『予言と幼子』

「ふむふむ……ほづほづ……」

リオンがフェイトと“友達”になったのを物陰から見詰める一匹の狸……もとい、はやて

「はやてちゃん、そんな所で何してるの？」

その怪しい行動を見付けたのはがはやてに声を掛けた。

「いやな、フェイトちゃんがリオン君と友達になれるか心配やったから」

「……覗き見とは良い趣味をしているな」

ビクッ、とはやては肩を震わす

リオンの声が直ぐ背後で聞こえた。

はやては壊れかけの機械の様にゆっくりと振り向く

「……さて、明日の朝食は狸鍋か…」

「ちょ、ちょお待ちや!」

シャルティエを引き抜くリオンに必死に弁解を始めるはやて

その姿に、なのはもフェイトも苦笑い

「リオン君がフェイトちゃんと仲良くなるのが気になったから仕方無いやん。人間、好奇心には勝たれへんのやで」

「……その好奇心が自らの命を短くするという事は考えなかったんだな……?」

「ちょ……!シャルの刃先を首筋に当てんといてや、エミリ」!

ガスンッ、とはやての頭の直ぐ横にシャルティエが刺さった。

はやてにはその名前を呼ばせまいとする勢い

流石のはやても之には固まった。

「……1つだけ言っておく……。その名で呼んで良いのはフェイトだけだ。……お前達は今までと変わらずにリオンと呼べ……。良いな？」

威圧の籠った視線と言葉を投げ掛けるリオンに、はやてはコクコクと頭を縦に振る

リオンはシャルを引き抜くと隊舎へと戻って行った。

「フェイトちゃん、リオン君にかなり好かれたんだね」

「……違うよなのは。私はただリオンと友達になっただけだよ……」

そう言うフェイトは微笑む

心の底からの微笑

フェイトの嬉しそうな顔になるのはも笑顔になる

フェイトとなのははリオンの話をしながら隊舎へと戻った。

ただ独り放心状態のはやてを残して…

次の日、リオンはFW達から積極的に話し掛けられた。

昨晚、リオンの過去を聞いたFW達も最初は戸惑っていたが共に戦う“仲間”になろうと決心したのだ。

リオンを訓練に誘ったり、昼食に誘ったり、その全てがお節介と思える程に積極的

だが、そんなお節介が意外と悪く無いと思うリオンだった。

「ねえねえリオン、またあたし達と模擬戦してよ！」

スバルは山の様に盛られているスパゲツティを頬張りながら喋る

「……別に構わないが…お前達、今度は開始数分で全滅なんて無様な姿だけは見せるなよ…」

「大丈夫だよ！こつちにはティアが居るんだから！」

「ちよつ、バカスバル！何であたしの名前を出すのよ！」

「え〜？だってティアが作戦立ててくれないとあたし達は全力を出せないんだよ？それにティアならリオンに勝てる作戦も立てれるって信じてるし！」

スバルはそれが当たり前かの様に話した。

ティアナはスバルの相変わらずな性格に溜息をつき、エリオとキャロはいつもの風景に苦笑いしている

「……ふっ…精々期待しているさ…」

鼻で笑うかの様にリオンは言った。

騒がしいが悪くないと思える食事風景

昔の自分ならば絶対に怒鳴っていた筈なのに、“友達”を受け入れようとするだけでこんなにも変わって来る

だからリオンは思ってしまった

もっと早く…

もっと早く、“友達”という言葉を受け入れていれば…

スタン達と“仲間”になっていれば…

もしかしたら、18年前に命を落とす事無くマリアンを救出する事が出来たのかもしれない

不意に過ぎる“過去への後悔”

チガチヲコバム

「……………」

ドクンッ、と心臓が高鳴る

リオンはスパゲッティを口に運んでいた手を止めた。

「……………?どうかしたんですか?」

急に固まるかの如く動きが止まったりリオンを心配しエリオがリオンの声を掛ける

「……………いや……………何でも無い……………」

鼓動が収まったのを確認したりオンは平然を装い、再びスパゲッティを口に運び出した。

だが、口に運ぶスパゲッティの味がしない

「(……………何だったんだ……………今は…………?)」

突如頭に過ぎった謎の文章に対する疑問

それだけが食事中のリオンの頭の中を駆け巡り、味を感じる余裕が無かった。

「ピンポンパンポーン！」

突然、何の前触れも無く館内の全てのスピーカーからはやての音が響き渡る

深く考えていたりオンだったがスピーカーから煩く響くはやての声に我を取り戻した。

「あゝリオン君リオン君、食事が終われば直ぐに部隊長室に来る様に！以上！」

それだけを言うと、プツツとスピーカーの電源が落ちた。

その放送に食事中であった六課の面々は呆気にとられている

「リオンさん……呼ばれてますけど……」

「……知らん。煩い狸の戯れ事だ、気にする必要は無い」

エリオに言葉を返すとリオンは食事を再開する

はやての放送によって一度思考が中断した頭には先程の文字に対する疑問は無くスパゲッティの味を理解していた。

F W達と慣れないながらも会話をし食後のデザートを食べていると既に時間ははやての放送から30分弱は過ぎた。

食事を終えたF W達は書類仕事へ、リオンは部隊長室に向かう為にF W達と並んで廊下を歩く

「八神部隊長の放送から40分は経ってるけど……大丈夫なの？」

「……何、気にする事は無い」

心配するティアナに空気王の台詞を放つリオン

すると、館内スピーカーが音を立てて鳴り響いた。

「ピンポンパ……ああもうええわ！リオン君リオン君！食事終わったらでええ言っただけ遅過ぎへんか！？」

スピーカーの向こうに居るはやては御立腹の様だ。

はやての声はマイクを通しスピーカーからキンツと音割れを起こす

「……………煩い狸だ…シャル」

『任せて下さい坊ちゃん』

リオンはシャルを部隊長室の方向に掲げ詠唱を行う

「混濁に沈め、憤怒の撃鉄！」

『行きますよー！』

「ピコピコハンマー！」

リオンはシャルティエを突き出した。

「リオン君！今すぐに部隊長室へ　　ふべらっ！？」

スピーカーの向こうから、ピコンツという軽快な音が鳴り響きはやてが奇声を発する

「……………な…何でデツカイ…ピコハンが……………がくっ」

スピーカーの向こうが静かになった。

ピコピコハンマーによって気絶したのだらう

啞然としているFW達を後にしてリオンは部隊長室へと向かった。

部隊長室の前へと差し掛かると部屋の前でフェイトがオロオロしている

「……………何をしている…?」

「…あ、エミリオ」

リオンはフェイトの隣まで行くと開いている扉の中を覗いた。

そこには机に突っ伏して倒れているはやての姿

なのはがはやてを起こそうと揺さ振っている

「……………私となのはが扉を開けたら大きなピコハンが降って来てはやてを気絶させちゃったの」

「……………ああ…そのピコハンを落としたのは僕だ。狸が煩かったからな」

「……………そうだったの…?駄目だよエミリオ…ピコハンを落としたら

…」

ピコピコハンマーを落としたりオンに注意をするフェイト

部屋の中ではやてが気を取り戻した様だ。

「……でもエミリオ…どうしてピコハンなんかを…？」

「……ピコハンはダメージを与えずに相手を気絶させる晶術だからな…。狸を黙らせるのには最適だ。……それにフェイト、お前も使えるだろ…？」

「…えっ？使えないよ？」

「……なら、試しにやってみる」

半ば強引にリオンに勧められフェイトはバルディッシュを掲げる

何も考えずにはやてに向かって

「……え…ええ〜っ…ピ、ピコハン…」

恥ずかしかつたのか普段の彼女からは考えられない程の可愛らしく
か細い声で唱えた。

『 pikohan 』

「……………えっ？」

バルディッシュユから流れた電子音に呆気に取られたフェイト

その刹那…

「 ふべっ!?!? 」

ピコンッ、とはやての頭上からピコハンが落ち、はやてを再び気絶
させた。

「……………出来るじゃないか…」

「…ちがつ、私知らなかったもん…！」

はやてを気絶させてしまった事に余計オロオロするフェイト

フェイトの放ったピコハンは当たり所が良かったと言えば良いのか…

はやてが目覚めるまで30分は要した。

目を覚ましたはやてにフェイトは謝る

「…御免ね…はやて…」

「別にかまへんよ。気絶しただけでダメージは受けてないし」

「…そもそもお前の放送が原因だろうが…。自業自得だな」

「なっ…？それを言うなら放送しても来んかったりオン君にも責任あるで〜」

「……食事中に放送を掛ける奴が悪い。食事中は静かにしている」

理不尽なまでのリオンの文句の直撃を受けるはやて

リオンが言っているのは理不尽な文句

なのにリオンが言えば理不尽に聞こえない

はやては「うう……」と言葉を詰まらせた。

「……にはは……相変わらず辛口だね、リオン君」

なのはは頃合いを見計らって口を開く

「でもはやてちゃん。わたしもヴィヴィオを迎えに行かなくちゃ駄目なんだけど……」

「……………?」

なのはが困った様にはやてに話し掛けているとリオンが首を捻る

それに気付いたフェイトはヴィヴィオについて説明した。

「…ヴィヴィオって言うのはこの前保護した女の子の名前で、今日から六課で引き取る事になったの」

「……………そうか…」

説明を聞いたリオンは適当に相槌を打つ

子供が1人増えた処で自分には関係無い

「そやな、皆忙しい中来てくれた訳やから早う本題に入るか」

そう言うとはやては簡易のスクリーンに1つのデータを表示した。

この世界の文字を片言程度にしか理解出来ていないリオンには読み辛いが、なのはとフェイトは理解しているらしく真剣に読んでいる

「実はな、数年前に出たばっかりのカリムの予言に新しいのが追加されたらしいんや」

「……じゃあ、この文章って……」

「そや。カリムから私直通で今朝送られて来た物や。御丁寧に情報が外部に漏れへんようしっかりとプロテクトを張った上に一定時間過ぎたら自動消滅するようにしてな」

はやての説明が終わると文字を上手く読めないリオンの代わりにフエイトが訳しリオンの伝える

最初に読まれたのは二分割された内の一つ

古い結晶と

無限の欲望が集い交わる地、

死せる王の下、

聖地よりかの翼が蘇る。

死者達が踊り、

なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、

それを先駆けに数多の海を守る法の船もくだけ落ちる。

数年前から出ていた予言の内容

リオンには全く理解出来ない言葉ばかりだが、取り敢えず“大変”な事になるといふのは理解出来た。

次にフェイトが読み上げるのは最近出たばかりという新たな予言

王の翼は大地を穿つ剣を持ち、
大地を暗闇で包まんと
神の雷を放つ

それは避けられない運命

しかしその運命に逆らう者、
次元の狭間より現れる

運命に逆らうのは裏切りの剣士

その心に

大切な者を見付けた時

七色に輝く剣が運命を打ち砕くであろう

それを読み終わると同時に表示していたデータは消失した。

一定時間が過ぎたのだろうか

データが消え、静まり返った室内でなのはとフェイトが予言の内容に頭を悩ませる

「……………で、何で僕まで呼ばれたんだ？」

「この文章の内容にリオン君が心当たり無いかと思ったんや。この予言が出たのが丁度リオン君がこの世界に来た次の日くらいやし……その……ほら……」

「裏切りの剣士」か……」

言葉を濁すはやての代わりにリオンが自ら言う

予言に出ていた“裏切りの剣士”という言葉

予言の記されたタイミングからしてリオンの事を言っているのは間違いないだろう

「……悪いが僕に心当たりは無い」

「そうかあ……。じゃあ、この予言の内容は後々考えるとしよか。3
人共ありがとな」

リオン、フェイト、なのはは部隊長室から退室した。

部隊長室から退室したリオンは歩きながらシャルと予言の内容について話し合う

「……シャル、予言に出ていた“大地を穿つ剣”というのは…」

『まさかとは思いますが“ベルクラント”の事じゃないかと……』

無差別地殻破碎兵器ベルクラント

その形状は巨大な剣

地殻を粉碎して巻上げ、空に新たな地殻を形成するシステム

空に地殻を形成。

則ち、大地は地殻に覆われて光の届かない暗闇になる

予言の内容に当て嵌まり過ぎだ。

「……しかもそれが避けられない運命とはな……。……まさかこの世界に他のソーディアン達も流れついて破壊しろとも言うのか？」

『どうでしょう？でも予言の内容的には坊ちゃんが破壊する様な記され方でしたよね』

「……僕が1人で……。……馬鹿か。ベルクラントを1人で破壊出来る筈無いだろ」

『予言に出ていた“七色に輝く剣”が関係しているのでは？』

「“七色に輝く剣”と言えばプリズムフラッシュか？不可能だな。ベルクラントは晶術1つで落ちるような代物じゃ無い」

『……謎……ですね』

「……考えても仕方ない……。その時が来れば分かるだろう」

シャルにそう言い思考を中断したりオンは時たま頼まれる雑務と剣技の鍛練へと戻った。

普段と変わらない1日

しかし夕食時には1つ変化が起きた。

「リオン君、ちょっと御免ね。直ぐに戻って来るからヴィヴィオの面倒見ててね」

なのははリオンの返答を待たずにして1人の少女をリオンに預けて行ってしまっ

食堂へ向かう最中だったリオンは不服な表情を浮かべながら少女に話し掛けた。

「…………お前…ヴィヴィオと言うのか…？」

「うん。お兄ちゃんはお名前何て言うの？」

「…………リオンだ…。それよりお前、腹は減っていないか？僕は今から夕食を食べに行くつもりなんだが…」

「ヴィヴィオ、お腹空いた…。ヴィヴィオも御飯食べる！」

笑顔で答えるヴィヴィオはリオンの後ろを付いて歩く

終始笑顔で大きく手を振りながら歩くヴィヴィオにリオンは溜息をついた。

「……子供は苦手だというのに……」

『仕方無いですよ坊ちゃん。坊ちゃんは基本的に暇を持て余してますから』

「あっ！スゴ〜イ！剣さんが喋ってる！」

リオンとシャルの会話を聞いたヴィヴィオがリオンの傍まで駆け寄ると眼を輝かせながらシャルティエを見る

『初めましてヴィヴィオ。ボクはシャルティエと言います』

「ヴィヴィオはヴィヴィオって言うの」

何だか楽しそうに会話をするシャルとヴィヴィオを尻目にリオン達は食堂へと到着した。

食堂に入るとリオンが小さな女の子を連れている事に周囲の眼を一気に引き付けるが、その少女が報告に受けていたヴィヴィオだという事に気付いた局員達はそれぞれの食事へと戻った。

御丁寧にリオンの数歩後ろを食事の乗ったトレイを持ってヨタヨタと歩くヴィヴィオ

リオンは近くのテーブルに席を取るとヴィヴィオのトレイを受け取り隣に置いた。

「うんしょ…っ」と

ヴィヴィオは掛け声を挙げながら椅子に攀じ登るとフォークを手に取り食事を始める

それを見届けてからリオンも食事に手を付けた。

「……………」

食事も終了に差し掛かった頃、ヴィヴィオは唸りながら皿の中の敵と対峙していた。

その敵とはピーマン

口を尖んがらせながらヴィヴィオはフォークでピーマンを突く

そこでふと、ヴィヴィオは気付いた。

「リオンお兄ちゃんもピーマン嫌いなのか？」

隣に座るリオンもまたヴィヴィオと同じくピーマンを残していた。

問い掛けて来るヴィヴィオにリオンは平然と答える

「……………嫌いという訳じゃ無い。ただ苦手なだけだ……。それにピーマンは人の食べる様な物じゃない。……………ヴィヴィオ、お前のしている事は正しい」

ヴィヴィオがピーマンを残した事を正当化し賞賛するリオン

それを聞いたヴィヴィオは笑顔になる

「それじゃあヴィヴィオ、ピーマン食べ無くてもいいの?」

「……当たり前だ……。こんな物、捨ててしまっても構わない……行くぞヴィヴィオ」

「うん!」

ピーマンを残した皿を返却口に返そうとリオンは立ち上がる

リオンの行動に釣られてヴィヴィオもピーマンを残した皿を返す為に立ち上がった。

「二人共々?まだ食事中なのに何処に行くつもりなのかな?」

そんな2人を行かせまいと声の主が立ちはだかる

その声にリオンとヴィヴィオの動きが止まった。

そこに居るのはとても笑顔だが何処か怒っている雰囲気醸し出し
ているのは

隣にはフェイトも居る

「2人共、ピーマンを食べ終えるまで席を立つちゃ駄目」

ビシッと言いつけるのは

リオンとヴィヴィオは不満げな表情を浮かべながら席に戻った。

ピーマンを前にして早数分

ヴィヴィオはピーマンと睨めっこしており、リオンは“絶対に食べ
ない”という意思表示なのか顔を背けている

「なのは…子供にピーマンはまだ早いよ…だから残しても良いんじ
ゃないかな…？」

「駄目だよフェイトちゃん、甘やかしちゃ」

「でも…苦手な物を無理強いするのは…」

「……だそうだ。良かったなヴィヴィオ。食べなくても良いとフェイトが言っている」

「やったあ〜！」

フェイトがなのはに弱々しく反論しているのを良い事に、リオンはヴィヴィオとピーマンを残したまま立ち上がるうと椅子を引くが…

「駄目だよヴィヴィオ」

「……駄目だよエミリオ」

今度は別々に止められてしまった。

苦手な物は食べなくても良い、と言っていたフェイトが注意をして来た為、リオンは不満を口にする

「……何故だ。残しても良いと言ったのはお前だろうが…！」

「……その言葉はヴィヴィオに対してだよ……。エミリオは残しちゃ駄目」

「……何故だ…！」

「……この前食堂のスタッフから聞いたよ……。エミリオ、私が居ない時に食事に来てピーマンを全部捨てて行くって…！」

「……それが悪い…？マズイ物は捨てるだろ…！」

「……エミリオ……私、前にも言ったよね……。食べ物に粗末にしちゃいけないって…！」

「……フェ、フェイトちゃん？」

隣で会話を聞いていたなのは初めて聞くフェイトの口調に戸惑いを見せる

今のフェイトの眼は少し病んでいる

それはもう、なのはがオハナシしようとしている時の様な眼

「……エミリオ……。私、エミリオが食べ終わるまで見張ってるからね……」

「……ちょっと待て……！何故バインドで僕を縛る……！」

「……え？それはエミリオが逃げない様にする為だよ……。あつ、そうか……エミリオ、私に食べさせて欲しいんだね……」

フェイトはリオンの話に聞く耳も持たず、ピーマンをリオンへと近付けて行く

バインドで縛られ、逃げられないリオン

ピーマンを近付けて来るフェイトの眼は完全に逝っている

「……な、なのはママ……。ヴィ、ヴィヴィオ……。ピーマン食べるね……」

「え、偉いね……。ヴィヴィオ」

フェイトを見て目に涙を浮かべながらピーマンを頑張って食べるヴィヴィオと、苦笑いを浮かべるのはだった。

『予言と幼子』（後書き）

【夢であるように】のオーケストラVerって神曲だよな。

後、デステイニーのEDで流れるピアノアレンジVerも最高だと思えます

はい。今回の懺悔の時間です。

取り敢えずヴィヴィオ

性格や口調はともかくとして名前が打ち辛いです

ヴィータにしるヴィヴィオにしる打ち難いですよ！

そういえば、なのはキャラって車の名前が付いてますね

それで最近知った事がありました…

テスタロッサ 高級車

モンドリアル テスタロッサの量産型

……らしいんです。

エリオとフェイトが似たような境遇と魔力持ちだからなのか…

それとも【エリオ×フェイト】のフラグなのか…

七夜的には後者だと嬉しいです。

s t s 最終回ではフェイトのピンチに颯爽と現れてお姫様抱っここで救出しましたもんね…彼。

そっぴやエリオ君。

このままりオンとシャルで鍛えれば、某魔法先生の如く雷を纏って時速150kmとかで突撃するようになったらちやうかかもしれないという事に気付いた今日この頃…

まあ…2人共容姿が多少似てるし問題無い……のかな？

因みに七夜…

邪道かもしれませんが原作デスティニーでは【リオン×リリス】派なんです。

おかしいですよ。

出会わない2人なのになんか似合ってる気がするんですよ

まあ、七夜がリオンとリリースを好きだからかもしれないがね(笑)

いつかリリース出そうかな…。

P.S.

マイスター七夜は、ディレクターズカット版でリオンが生き残るIFストーリーが追加されていると本気で信じてましたですよ〜！
(by・リオン)

『六課最大の模擬戦』（前書き）

今回は無駄に力を込めてみました。

ページ数が多いのは初めてです。

『六課最大の模擬戦』

薄暗い部屋の中にパネルを叩く音だけが響き渡る

此処はスカリエッツィの隠し研究所

その一室でスカリエッツィは一心不乱にパネルを操作していた。

「ドクター、いい加減睡眠を取って下さいませんか？」

「もう少しだよーノ……。もう少しで完成しそうなんだ……」

呆れ口調で心配するウーノにスカリエッツィはモニターから眼を離さずに声だけを返す

既にスカリエッツィが自室に籠ってから丸二日

その間、睡眠も取っていないければ食事もまともに取っていない

朝食時にウーノがトーストを持って来た際には昨晚置いて行った夜食がそのままの形で残っていた。

人間としては活動限界が近付いているであろうスカリエッティだが、パネルを打つその姿はとても楽しそうである

そろそろ強制的に食事摂取と睡眠を取らせようと思っていたウーノだったが今のスカリエッティには手を出す気にはなれない

「……………出来た…。出来たよウーノ！」

唐突に叫び出したスカリエッティは子供の様に喜ぶとパネルを再度操作し巨大なモニターに映し出す

「……………ドクター…これは？」

モニターに映る“剣”を見てスカリエッティに問い掛けるウーノ

「まだデータ上の設計だけだね…恐らく、この剣は私の最高傑作になるだろう」

スカリエッツィは楽しそうに答える

その視線の先にはモニターに映る漆黒のフォルムを持つ大剣

その形状は以前映像で見た少年の持つ研究対象の剣を意識している

「早速、この剣を姉妹達全員に造ろうじゃないか…ウーノ」

自らの最高傑作に思わず酔いしれるスカリエッツィ

だから彼は、愛する者を呼ぶ様な声で“最高傑作”の名を呼んだ。

「造ろうではないか。私の全てを注いだ最高傑作『ベルセリオス』を…」

モニターの中で彼の設計した最高傑作となるデバイス『ベルセリオス』が禍禍しく煌めいていた。場所は変わって機動六課

ヴィヴィオが六課に来てから早くも数週間が経ち、六課内で走り回るヴィヴィオをFW達とギンガが立入禁止区域に入らないように追いつけ回す日々が日課となっていた。

リオンはヴィヴィオを追い掛けて疲れきったFW達と同じテーブルに座り昼食を摂る

離れてはいるが近くにヴィヴィオと一緒に昼食を食べるのはとフエイトが居る為、リオンは堂々とピーマンを残せなくなっていた。

「……何故こんなにもピーマンばかりの食事なんだ…」

リオンは溜息混じりに呟く

最近の食事にはピーマンが入っている料理が多過ぎるのだ。

まるでリオンにピーマンを食べさせざるを得なくしているかの様に…

今日の場合は野菜サラダにピーマンが入っている

ピーマンだけを端に寄せるリオン

残す気はあるのだが、何せフェイトがいつ見張っているか分からない

「……………エリオ…」

「……………はい、何でしょうか？」

「……………頼むぞ……………」

リオンはエリオと小声でやり取りすると、エリオの皿へとピーマンを移していく

フェイトに見付からない様に傾合いを見計らい腕の動きを最小限にして…

エリオを挟んでリオンの反対側からはキャラロが人参をエリオの皿に移している

これも食事中的日課になりつつあった。

「そういえばリオンさん、午後の予定を八神部隊長から聞いてますか？」

リオンのピーマンと、キャラロの人参を食べながらエリオはリオンに

問う

「……いや、何も聞いていないが…あの狸が何か言っていたのか？」

「今日はこの後、僕達と一緒に海上訓練施設に来るよつにと言っていました」

「……そうか…」

リオンは残っているサラダを口に運んだ。

雑務ならば部隊長室に来いと言われる筈

「（……一体何をさせられるんだ…？）」

リオンは昼食を終えるとFW達と共に海上訓練施設へと向かった。

海上訓練施設に着くと、そこには教導官であるのはだけで無く、ヴィータ、シグナム、フェイトの隊長陣が集結していた。

しかも全員バリアジャケット、及び騎士甲冑を展開済み

シグナムに至っては何かを待ち兼ねているかの如くソワソワしている

「あつ、皆来たね」

リオン達が来た事に気付いたなのは6人を呼び寄せる

その呼び掛けに反応したFWとギンガは、なのはの前まで駆け寄り
整列する

リオンだけは相変わらず面倒臭そうに歩いてFW達の隣に並んだ。

リオンが並んだ事を確認したのはは口を開く

「それじゃあ午後の訓練だけど、今日はFW対隊長陣の模擬戦をや
つてみるよ」

笑顔で言い放つなのは

FW達の顔が見る見る青ざめていく

「えっと……なのはさん？本気ですか？」

「うん。本気だよティアナ」

「でも……僕達じゃ隊長達に敵いませんよ……」

「あたし達はリミッター付きだ。上手く頭を使えば互角くらいには戦えるだろ？」

ティアナとエリオの申し出も軽く流されてしまう

どうやら既に決定事項のようだ。

「それじゃあ作戦を立てる時間は10分。10分後には配置に付いておいてね」

なのはは笑顔で言うと隊長陣を引き連れて自分達の配置場所へと向かう

それを見てFW達は腹を括るしかなかった。

F W達は木陰に集まり作戦を練る

作戦指揮は勿論ティアナ

「今回はかなりキツイわね」

しかし流石の彼女も今回ばかりは頭を思い切り捻る

相手は魔導の世界では有名も有名な人達ばかり

生半可な作戦では手も足も出ない事は分かり切っている

「……………悩む必要は無いだろっ……………」

そう口にしたのはリオン

F W達は一斉にリオンを見た。

リオンは樹の枝で地面に丸を4つ描くと話を続ける

「……まずシグナムだが…こいつは僕が相手をする。…あいつ、僕に殺気紛いの視線をぶつけて来ていたしな…」

4つの内の1つの丸をバツ印で消すリオン

「……次にフェイトだが…エリオ、お前に任せる」

「ぼ、僕ですか!？」

「……当たり前だ。そもそもフェイトの機動力に付いて行ける奴はお前しかいない…。何、普段の僕との打ち合い通りにしていれば問題は無い……やれるな？」

「……は、はい!」

エリオの返答を聞いたリオンは、更にもう1つの丸を消した。

「……ヴィータに関しては…スバルとギンガ、お前達二人に任せる」

「あたしとギン姉が…」

「……ヴィータはお前達と同じフロントアタッカーだ。まともなやり合うとなれば二人掛かりで丁度良い……出来るな？」

「うん！ギン姉、あたし達で頑張ろう！」

「そうね。二対一は卑怯かもしれないけど全力で行きましょう、スバル」

スバルとギンガの意気込みを確認したりオンは3つ目の丸を消す

残るは1人……

リオンは顔を上げティアナを見た。

「……最後になのはだが……。ティアナ、お前に任せるぞ……」

「……あたしが……なのはさんと……」

「……別になのはと真っ向からやり合えと言っている訳じゃ無い。……同じセンターガードとして戦場をなのはより先に読め。……チームに指揮を出すお前にしか出来ない仕事だ」

「あたしにしか出来ない……仕事……」

リオンの言葉にティアナの緊張は高まる

“ チームに指揮を出す ”

FWの司令塔であるティアナはいつもその事を身に言い聞かせていたが、やはり再認識すると緊張する

特に今回は普段の模擬戦とは違う

隊長全員を相手に回した模擬戦

下手な任務より難しい

「 ……出来るか…ティアナ? 」

「 わ、分かったわよ…! やってやるんじゃないの…! 」

「 ……良い心掛けた。 ……最後にキャロ。お前はティアナのサポートをしてやれ 」

「 はい、頑張ります! 」

一通り話し終えたりオンは地面に描いた丸を全て消すと全員の顔を

見ながら言葉を繋ぐ

「……僕が今言ったのは取り敢えずそれぞれがマークするべき相手だ……。戦闘が始まった後の指示はティアナから受ける」

リオンの言葉に全員が頷く

「……行くぞ……」

リオンの掛け声を皮切りにFW達はバリアジャケットを纏い配置場所へと散って行った。

リオンも又、騎士甲冑モドキを展開し森の中へと身を隠す

『坊ちゃん、“仲間”とのコミュニケーションが上手くなりましたね』

「……全くだ。自分でも驚いているぞ……」

リオンは自嘲気味に笑いながら戦闘開始の合図を待った。

それから数分後：

模擬戦の審判であろうはやてがヴィヴィオを連れてやって来る

「ああ、ああ、テストス！」

何処からともなく取り出したマイクの電源を確認したはやては海上訓練施設に取り付けられているスピーカーから声を流す

「私が今回の模擬戦を取り仕切らせて貰うで。因みにヴィヴィオはなのはちゃんとフェイトちゃんの戦う姿が見たいそうや。格好ええ処見せたりや」

「なのはママ〜！、フェイトママ〜！、頑張つて〜！」

「うん！頑張る〜！」

ヴィヴィオの応援にマイクも無しに施設中に広がる程の答えで返事

をするのはとフェイト

「……………シャル…」

『場所の特定出来ました』

居場所がバレバレであった。

「リオン、聞こえる？」

不意にシャルティエから聞こえるティアナの声

デバイスの通信機能を介しての声

そこでリオンは久々に“シャルはデバイス”という事を思い出した。

リオンは通信に出る

「……………どうした？」

「今思つたらリオンは念話使えないでしょ？だから戦闘中は中々通信出来ないと思うからこの模擬戦での動き方を先に言っておこうと思つて…」

「……僕はシグナムの相手をする筈だが？」

「それはそうなんだけど、シグナム副隊長ばかりを相手にしてても埒が明かないから傾合いを見計らつてなのはさんを撃墜しに行つて欲しいの」

「……僕一人でか？」

「ううん。エリオと二人だよ。援護は私がするから」

「……出来るかどうかは分からないが覚えておこう」

「お願いするわ」

それを最後にティアナとの通信が切れる

模擬戦の開始を目前にしてリオンは晶術の詠唱に入った。

試合開始と同時に放つ

以前行つたFW達との模擬戦と同じ戦法

この方法でなのはやフェイトを落とせるとは思ってはいないが足止め、もしくは相手の陣形を崩すには十分だろう

「それじゃあ始めるで〜！」

カウントを始めるはやて

「3…2…1…始め！」

腕が振り上げられた瞬間、リオンはシャルを突き出した。

「ブラック　！」

『坊ちゃん！魔力砲、来ます！』

「……何っ!？」

次の瞬間、リオンの晶術発動よりも早く桃色の砲撃がFW達の居る

陣地に飛来した。

ドゴオンツ、と激しい爆音を荒げ土煙が舞う

『魔力反応照合……。なのはさんのデイバインバスターです！』

「……いきなり撃って来るのか……！あの悪魔は！」

模擬戦開始直後のデイバインバスターに悪態を付くりオン

その間にももう一撃、デイバインバスターがFW達の陣地へと飛来し爆発した。

「リオン！聞こえる！？」

焦った声で通信を入れて来るティアナ

彼女が焦るのも無理は無い

リオン自身も焦っていた。

いきなり砲撃魔法を放って来るなど普通は誰も考えない

「……聞こえるがどうした？」

「今のなのはさんの砲撃で完全にあたし達の陣形は崩れたわ！一旦体勢を立て直すから戻って来て！」

「……それが得策だな……。……分かった、今すぐ。」

「見付けたぞ！マグナス！」

後退しようとするリオンに叫び掛けて来る声

この状況で考えられる奴は1人しかいない

「さあ！私と楽しく死闘おつではないか！」

「……済まない、変な奴に捕まった」

リオンは迫り来るシグナムを見ながら諦めた様にティアナに言った。

「……済まない、変な奴に捕まった」

「……あつ、ちよつ！」

それを最後にリオンからの通信は途切れる

何度か呼び掛けて見るがシャルティエへの通信は完全に繋がらない

ティアナは急いで周囲を見渡す

まずは迅速な状況整理…

リオンはシグナムに捕まり戦闘に入った。

キヤロは自分の後ろに居て無傷

前に出ているスバルとエリオとギンガの様子は土煙で見えないが念話が入って来ない為無事と判断

そして目の前の木々はなのはの砲撃によって吹き飛ばされている

「…………マズイっ！」

そこでティアナは咄嗟に気付き念話の回線を開く

《エリオ！直ぐに行つて！このままじゃ一気に全滅するわ！》

《はい！》

エリオはティアナの指示に従い駆け出した。

ティアナが危惧したのは陣地の木々が薙ぎ倒され、場が開けてしまった事

それは則ち障害物が無くなるということ

そうなればフェイトの接近を許してしまう

今のこの状況でフェイトが高速機動で突撃して来れば間違い無く全滅

だからティアナはエリオを先に行かせた。

ティアナは続けてFW達に念話を送る

《スバルとギンガさんはエリオが突っ込んだ後を追い掛けるように
ヴィータ副隊長に攻撃開始！キャロはあたしから絶対離れちゃ駄目
よ！》

《了解、ティア！》

《了解です！》

《分かりました！》

それぞれの反応を示すFW達

ティアナは念話を切ると数歩下がりキャロと合流する

「……キャロ、援護お願いね」

「はい、頑張ります！」

ティアナは自分とキャロに『フェイク・シルエット』を発動する

「(さて、隊長達相手に何処まで戦えるかしらね…)」

幻影を2体散らばらせながら、ティアナはセンターガードとして戦場を見詰めた。

ティアナからの指示を受け、エリオは陣地である木々の中から飛び出す

目差すは自分が足止めをすべき相手

だが、その前に立ち塞がる者が居る

「敵の目の前にこのこと出て来る馬鹿は居ねえぞ！いいのだ！」

待ち構えて居たかの様にヴィータがアイゼンを構え、左手には数個

の鉄球を持っている

「抜いてみせます！ヴィータ副隊長！」

「へっ！やれるもんならやってみろ！アイゼン！」

『Schwalbefliegen』

「うおりゃああっ！」

ヴィータはアイゼンを用いて鉄球を打ち出した。

高速でエリオに向かって飛来する鉄球達

だがその速度は飽くまでも“高速”

高速の先を走るエリオには足止めにも何もならない

エリオは鉄球が降り注ぐ直前に足を踏み込んだ。

『Sonic Move』

刹那、エリオの体は雷となる

“消えた”と感じる程の速度で降り注ぐ鉄球の合間を抜けて行く

「逃がすか…っ！」

再度、『Schwalbfliegen』を撃つとするヴィータだったがその行動は目の前を横切る“魔力の道”によって遮られた。

その数は2本

しかも御丁寧に様々な方向へと伸び螺旋を描き、ヴィータの居る周辺空域は制圧されているに等しい

「はぁあぁっ！」

ヴィータの背後から殴り掛かって来るスバルの攻撃をプロテクションで受け止める

「てやあああっ！」

「……………っ！」

それに波状で仕掛けて来るギンガ

流石のヴィータも2人のフロントアタッカーの攻撃に一度跳び退ける

同時に足場を無くしたスバルとギンガはウインググロードの上へと着地した。

「ヴィータ副隊長！」

「私達二人が相手をします！」

シューティングアーツの構えを取るスバルとギンガ

「へっ、面白ねえ！数であたしを圧倒出来ると思っちなよ！」

ヴィータはアイゼンをスバル達に向けながらニヤリと笑った。

ヴィータを抜いたエリオは敵陣の手前へと足を踏み入れる

「フェイトさん！行かせません！」

「…エリオ…」

『Sonic Move』を解除しフェイトの前に踊り出るエリオ

「…速くなったね、エリオ」

我が子の成長を喜び眼を細めるフェイト

しかし次の瞬間にはその眼は戦士の物となる

「…それじゃあ、私も少しだけ本気を出そうかな…？エリオが何処まで強くなったのか見せて貰うよ」

フェイトの手に握られるバルディッシュは普段の戦斧状態では無く、近接特化の鎌形態

エリオは重心を低く保ちストラダの矛先をフェイトに向けた。

「行きます…！フェイトさん！」

掛け声と同時にエリオはフェイトの間合いへと踏み込む

「……うん、良い突き」

迫り来るストラダを前に冷静に判断するフェイトは魔法を発動した。

『Blitz Action』

『Blitz Action』

同時に流れるバルディッシュとストラダーの電子音

ストラダーの矛先が当たる直前に高速回避を行いながらエリオの背後に回り、バルディッシュを振り抜くフェイト

エリオはフェイトの姿が視界から消えると同時に自らも『Blitz Action』を発動させ跳び上がった。

「……………!？」

フェイトのバルディッシュは空を斬る

フェイトは確実に決まったと思っていた一撃が回避され眼を見開いた。

「ストラダー！」

『Speerangriff』

「……………っ!？」

頭上背後から聞こえた声にフェイトは『Blitz Action』を咄嗟に使い前方へと跳び退く

直後、音を立て地面に突き刺さるストラーダ

フェイトの攻撃を『Blitz Action』で回避したエリオは高く跳び上がりながら後方宙返りを行い、フェイトの背後を取ると同時に重力とストラーダの推進力を利用して突撃したのだ。

しかしフェイトには回避されてしまった。

普通の敵ならば十分に決定打を与えられた攻撃だが今回の相手はフェイト

高速戦闘を極めている彼女には生半可な奇襲や不意打ちは回避されてしまう

「…驚いたよエリオ。油断してたら落とされちゃうかも…」

フェイトはバルディッシュを構え直す

シグナムに次ぐ“バトルマニア”の称号を持つフェイトは今気分が高揚していた。

自分の教え子であり息子が、自分と同レベルの高速戦闘を行い立ち向かって来る

まだまだリミッターを外した自分には及ばないだろうが、今の自分なら十分追い付いて来ている

このまま強くなればいつかはリミッターを外した自分とも戦えるだろう

「…さあエリオ。私達だけの世界……高速を越えた先の戦いをしよう…?」

フェイトは楽しそうに微笑むと『Blitz Action』を常時使用しながらエリオに躍り掛かった。

なのはは少し後方の上空から戦場を見渡していた。

「……うん。中々良いね」

それは、各隊長達と戦いを繰り広げるFW達に向けて送った言葉

スバルとギンガはウイングロードを自在に扱い擬似的な空中戦を繰り広げ、ヴィータにプロテクションの上からダメージを与えている
エリオはその機動力を生かしてフェイトと互角の速さで戦っている

「……それにティアナ……」

なのはは厄介な相手を見るかの様に木々の中に見えるティアナを見据えた。

勿論、なのはが見ているティアナは幻影

それもなのはは承知している

ティアナの幻影が居るのは問題は無い

ただ厄介な事に、なのはが誰かを攻撃しようとアクセルシューターを撃つと何処からともなくクロスファイアシューターが放たれ、アクセルシューターは迎撃される

場所を特定しようにもキャロのブーストによって強化されたティアナの幻影の中から本物を簡単に捉えられる筈も無い

「教え子が成長するのって嬉しいよね、レイジングハート。わたしも久々に前に出ようかな？」

372

なのはは高度を低空まで落とすとレイジングハートをFW達の居る方向へと向けた。

「てあああっ！」

雄叫びを上げながらスバルのリボルバーナックルがヴィータを捉える

だが、ヴィータの堅固なプロテクションはびくともしない

「へっ、お前らの攻撃なんかじゃあたしの防御を抜く事は出来ねえよー！」

『Schwalbefliegen』

「落ちろおお！」

ヴィータは鉄球を打ち放った。

誘導射撃である『Schwalbefliegen』は様々な軌道からスバルとギンガを襲う

迫り来る鉄球を様々な方向へと伸ばしたウイングロードの上を走り、跳び移る事で鉄球の段幕を潜り抜ける

「スバル！」

「ギン姉！」

二人は眼で合図を取るとヴィータの前方からギンガが、少しタイム
ングをずらしてスバルがギンガの背後を走る

ヴィータはアイゼンを振りかぶった。

「あたしに真正面からぶつかりに来るとはいいい度胸じゃねえか！」

ヴィータはギンガに向かって飛び掛かる

左手を引くギンガとアイゼンを振りかぶるヴィータ

両者共にその腕を振るった。

「おりゃああっ！」

「はあああっ！」

ガンツ、と交わるアイゼンとリボルバーナックル

「…………ぐうっ！」

刹那、ヴィータが顔をしかめた。

アイゼンを持つ腕に走る衝撃

「ナツクルバンカー！」

それはギンガの放ったカウンター技だった。

リボルバーナツクルの前面に作り出された硬質の障壁がアイゼンを受け止めると同時に障壁の上から衝撃を与える対近接戦用の高等技

「スバル！」

ギンガが合図を送ると共に、ギンガのウイングロードを走っていたスバルがギンガを跳び越える様に跳躍しリボルバーナツクルを回転させる

痺れた腕では対抗出来ないと感じたヴィータは直ぐさま跳び退いた。

「リボルバーキャノン！」

「…………ちいっ！」

ギリギリで届くスバルの攻撃

スバルの一撃はヴィータの障壁を砕いた。

ヴィータが跳び退いた事によりヴィータ本人へのダメージは与えられていない

しかしそれでも“ヴィータの障壁を砕いた”という事実はスバルの成長を物語っていた。

「スバル！もう一回行くわよ！」

「分かった！ギン姉！」

スバルの攻撃が通用すると判断した二人は次こそはヴィータを仕留めるべくウインググロッドを滑走する

しかし、それを黙って見ているヴィータでは無い

「あたしの防御を抜くなんてやるじゃねえか…！なら、あたしもちよつと本気で行くぞ！アイゼン！」

『 R a k e t e n h a m m e r 』

カートリッジが消費され噴射口の現れるアイゼン

ヴィータはアイゼンの噴射を利用してクルクルと回転しながら空高くへと舞い上がった。

ギンガはヴィータを追って顔を上げる

しかし、それが悪かった。

「……………っ！」

ギンガの視界が一瞬にして真っ白になる

ギンガの視界を奪ったもの…

それは“逆光”

太陽を背にするヴィータは逆光を味方に付けギンガに隙を作った。

「でええりゃああつ！」

そのままアイゼンの回転を維持したままヴィータはギンガをプロテクションの上から叩き付けた。

視界を奪われていたギンガはプロテクションをまともに張る事が出来ずにウィングロードから落とされる

「……あつ…とつと！」

何とか体勢を整えウィングロードの上に着地するギンガ

「逃がしやしねえ！」

ヴィータはその隙を見逃さなかった。

アイゼンの持つ位置を柄の中心部に変え回転速度を上げる

「あたしの道を突き進む！」

己の新必殺技を高らかに叫びながら、ヴィータはギンガへと突撃した。

「スパイラルドライバー！」

「えっ…ええっ!？」

ヴィータの奇想天外な攻撃に完全に回避の遅れたギンガはドリルの様な回転攻撃を受けてウイングロードから落ちて行った。

ギンガを撃墜したヴィータはそのままの回転を維持したままスバルへと突撃する

「でええりゃああっ！」

「……………っくっ！」

全力でプロテクションを張り、ヴィータの突撃を防ぐスバル

ヴィータは回転を止めるとスバルを逃がすまいと踏み込みアイゼンを高く掲げた。

「続けて喰らえ！」

その言葉に続けてアイゼンを振り下ろす

それは神をもビビらす怒涛の連撃

「震天裂空斬光旋風　！」

ドゴンッ、ドゴッ、とアイゼンがスバルのプロテクションにぶつか

る度に重低音が鳴り響く

ヴィータのその一撃一撃に押され、歯を食い縛るスバル

アイゼンが一回当たる度に少しずつ後退して行く身体

ヴィータは、スバルの全力で張るプロテクションを押ししている自分の技を見て気分が高まっていた。

だからなのか…

彼女は忘れていた。

スパイラルドライバー直後の体は平衡感覚を失っている事に…

「滅碎神罰……!?!」

その瞬間、ヴィータの手からアイゼンが滑り落ちた。

「……………攻撃……!」

「……………」

何も持たない腕を振り下ろし、最後の締めをするヴィータ
スバルはプロテクションを張ったまま啞然としていた。

「……………」

「……………」

戦闘中であるにも関わらず無言で見つめ合う二人

その時間は数秒…

先に動いたのはスバル

リボルバーナックルのギアを回転させ大きく振りかぶる

「リボルバアアア……………！」

「……………へへっ……………」

「キャノン！」

苦笑いするヴィータに繰り出されたりボルバーキャノンはヴィータのプロテクションを打ち砕き、ヴィータを地面に向かって殴り飛ばした。

模擬戦開始直後のなのはの砲撃によって木々の薙ぎ倒された場所に剣撃が鳴り響く

「幻影刃！」

技を繰り出すのはリオン

一気にシグナムの間合いへと詰め寄り駆け抜ける

「ふっ…！甘いぞマグナス！」

だが何事も無かったかのようにリオンの攻撃をレヴァンティンで受け流すシグナム

今の彼女は“一度敗れた相手”と戦う事だけで頭がいっぱいの状態
リオンの一撃が軽い事もあり、シグナムは一度も退く事無く前へと出て来る

「……………くそっ！面倒な奴だ！」

『坊ちゃん！砲撃、来ます！』

その直後、リオンの遙か後方を桃色の砲撃が通過して行った。

『坊ちゃん大変です！今の砲撃でスバルさんが墜ちました！』

「……………何…っ！」

「余所見をしている暇があるのか！」

スバルが撃墜された事によってフロントアタッカーを失ったリオンはそちらを気に掛けるが、シグナムがそれを許さない

飛び掛かって来るシグナムの攻撃を受け止めずに流す

「月閃光！」

「ふん！」

「月閃虚崩！」

「はあっ！」

威力には自信のあった技と昇華剣技も尽く防がれてしまう

リオンは下級晶術による牽制を行おうと距離を取った。

「デルタレイ！」

リオンから放たれる三つの光

シグナムは横に跳び回避する

リオンはそこを狙って晶術を放った。

「プリズムフラッシュ！」

「……むう！」

ズガガガガン、と地面に降り注ぐ光の剣

大地を穿ち、舞い上がる土煙

「……ふつ。やはりお前と戦うのは楽しいな、マグナス」

土煙が晴れると、そこには今日初めて“防御”の姿勢を取ったシグナムの姿

シグナムはレヴァンティンの剣先をリオンに向けながら言葉を続ける

「お前に敗れた後、私はお前を倒す為に鍛練を重ねた……！全てはマグナス！お前を倒す為に！」

ガシャンッ、とレヴァンティンから葉莢が輩出される

カートリッジのロードにより燃え盛るレヴァンティン

その炎は以前戦った時よりも更に激しい

『坊ちゃん…!』

「……分かっている!」

リオンは直ぐさま晶術の詠唱に入る

カートリッジロードから来る技は彼女の最も得意な奥義

【紫電一閃】

あの時喰らった威力は忘れられない

シャルで防いだにも関わらず簡単に弾き飛ばされビルを貫く程の威力

非殺傷設定だとしても一步間違えれば死んでいた。

「行くぞ！マグナス！」

燃え盛る炎によって刀身が見えなくなっているレヴァンティンを中段に構え、地を蹴るシグナム

「グレイブ！」

リオンは晶術を放った。

シャルを突き出すと同時に現れるのは大地を突き上げる岩の槍

リオンとシグナムの対角線上に現れた岩の槍はシグナムの進路を塞ぐ……筈だった。

「はぁあぁっ！」

シグナムは足を踏み込むと高く跳び上がる

岩の槍が届かない程に高く跳び上がったシグナムはレヴァンティンを力一杯振り抜いた。

「紅蓮剣！」

「……何っ!？」

シグナムから繰り出された技に驚きを見せるリオン

シグナムが繰り出したその技は“かつての仲間”が使った技と全く同じ物

レヴァンティンから放たれた炎輪はリオン目掛けて飛来する

「……くっ!」

シャルで防御体勢を取りながらバックステップで回避するリオン

いくら紙防御のリオンでも、かつての仲間が使っていたこの技なら

ば対処法は何と無く分かる

「うおおおおおっ！」

突如として空中で雄叫びを上げるシグナム

紅蓮剣を回避したりオンはシグナムの姿を見て瞬時に思い出した。

記憶の中での18年前

海底洞窟での死闘の際、スタンも同じ事をしていた。

「（……マズイ！）」

リオンは考えるよりも早く体を動かした。

直後、レヴァンティンの炎を最大にしたシグナムが空中から急降下する

「緋凰絶炎衝！」

リオンを通り過ぎたシグナムは左足で地面を踏み切り体の向きを変え、リオンの背後から滑るかの様に襲い掛かった。

「焼き尽くせええ！」

刹那、爆発。

シグナムが通り過ぎた地面は、その炎の強過ぎる威力によって塵と化した。

シグナムが駆け抜けた地面は完全に破壊され、海上訓練施設の土台となる地面は二度と使い物にならない程に荒れている

「やり過ぎたか……」

シグナムは立ち込める爆炎を背に眩く

だが次の瞬間、シグナムは背中に突き刺さる殺気に振り向いた。

燃え盛る大地の上空で空間が歪む

煙の中からリオンが跳び出すと歪んだ空間から悪魔の槍を取り出した。

「デモンズランス！」

シグナムに向かって投げられる莫大な魔力を込めた槍

悪魔の槍は、シグナムが反応するよりも早く着弾し爆発を巻き起こした。

リオンは爆心地を警戒しながら着地する

本来、紙防御のリオンだが『緋鳳絶炎衝』を喰らったにも関わらず撃墜されていないのには理由がある

まず一つ目は、リオンがこの技の対処法を理解していた為に無意識でダメージを最小限に抑えれた事

もう一つは、爆炎の中から跳び出した時にリオンが装着していた“龍の頭蓋骨の仮面”

「……よりによって何故この仮面なんだ」

『仕方無いですよ坊ちゃん。これしか思い浮かびませんでしたから』

リオンは自らに装着された仮面を触りながら小さく文句を言う

その仮面は、かつて正体を隠していた頃に被っていた物

今のリオンの姿は、騎士甲冑モドキと仮面によって“ジューダス”の状態

どうやらシャル曰く、この仮面はプロテクションを張れないリオンに代わって擬似的に障壁を張ってくれるという優れ物らしい

しかし之を作り上げているのがシャルであり、シャル自身が晶術専門であり魔法には対応していない為強度は脆いとの事

その証拠に『緋凰絶炎衝』を防いだ仮面は限界を迎え半分に分れた。

「くはははっ！良いぞ！良いぞマグナス！」

疲れ切っているリオンとは対照的に気分が高揚しているシグナム

悪魔の槍に巻き込まれ吹き飛んでいたシグナムは立ち上がると右手にレヴァンティンを持ち、左手に鞘を構える

「どうだマグナス？この闘い、楽しくはないか？」

「……ふん。楽しい訳無いだろ」

「そうつれない事を言うな。私はお前と闘えてとても楽しい。このような気分させるお前には感謝している。だから、私の全力を以てマグナス！お前を倒す！」

レヴァンティンを左腋の下に通す様に構えたシグナムはベルカ特有の“魔力による筋力増強”によってリオンの前から姿を消した。

『坊ちゃん！後ろです！』

「……………っ!?!?」

シャルの警告に振り返ったりオンに襲い掛かるレヴァンティンの刃

力で元々負けているリオンが『緋凰絶炎衝』を受けた後の状態でレヴァンティンの攻撃を受け止めるのはキツイ

レヴァンティンの重い一撃に簡単に弾き飛ばされた。

そこを勝負と判断したシグナムはレヴァンティンと鞘を頭の上に掲げて連結させる

全て消費されるカートリッジ

「行くぞマグナス！これが刃、連結刃に続くもう一つの姿！」

『 B o g e n f o r m 』

シグナムは巨大な弓となったレヴァンティンを構えた。

シグナムの足元にはベルカの魔法陣が展開され、彼女を中心として周囲に炎が立ち込める

魔力の弦を引き絞ると魔力で形成された矢が番われる

矢の先端には羽の様に伸びる4つの炎

この技こそがシグナムの放つ“奥の手”

最高の射程と最高の威力を誇るその名の通りの“最強の技”

シグナムは弦を引く指に、レヴァンティンを持つ手に、弓を構える体に、全てに力と魔力を込める

標的は完全に体勢を崩し反撃の余地さえ無い少年

いつかのお返しとばかりにシグナムは自らの誇る最強の技を叫んだ。

396

「翔けよ！隼！」

『 Sturm falken 』

「シュツルムファルケン！」

シグナムは弦を引き絞る指を放った。

刹那、風を切り、音を鳴らしながら飛翔する炎の矢

その速度は“音速”

そして標的に向かって一直線に飛翔する姿はまさしく“隼”

『坊ちゃん、流石に無理です!』

「……この…僕がつ!」

着弾した“隼”はリオンを中心に広範囲を消し炭にする爆発を起こした。

397

駆け抜ける2つの雷光

それは平行に走っていたかと思うと急激に方向を変え激突する

雷光が交わる回数は2回、3回、4回…

『Sonic Move』同士の高速を越えた戦闘

「……………くっ！」

「…やるね…エリオ…！」

『Sonic Move』の使用時間が過ぎ、現実の流れへと戻る
エリオとフェイト

リオンとの鍛練により速さではフェイトに追いつけるようになった
エリオだが、やはりリオンにも指摘されていた通り“力”で押し負
けていた。

一定の距離を取り、ストラダーの矛先をフェイトに向けて警戒する
エリオ

ズドオンツ、とエリオの耳に爆音が響いた。

爆音のした方向を振り向いて見れば弓を構えたシグナムの姿

「（リオンさん…負けたか…）」

僅かの思考

「…余所見は駄目だよ、エリオ！」

「……………！」

次の瞬間にはフェイトはエリオの目の前にまで到達していた。

“高速戦”では僅かな隙が敗北に繋がる

振り抜かれるバルディッシュに対してエリオは『Blitz Action
ion』で回避する

その瞬間、拮抗していた戦況は大きくフェイトに傾いた。

『Blitz Action』を使用して襲い掛かるフェイトと『
Blitz Action』を使用して回避するエリオ

“攻撃対攻撃”から“攻撃対回避”へと変わる

フェイトの早過ぎる連撃を回避している内にエリオの動きは鈍くな

り始めた。

大きく回避させられる事でエリオの体力は奪われていく

更に、度重なる『Blitz Action』の行使によって魔力も底を尽きかけていた。

そんなエリオに対して同じ魔法を同じ回数使っているフェイトは魔力の残量にはまだまだ余裕がある

このままでは負ける

そう確信したエリオは賭けに出た。

「…っはあああ！」

フェイトがバルディッシュを引き戻す僅かの合間を『Blitz Action』を使ってフェイトに肉薄、体を丸めて体当たりを喰らわせる

体当たりを受けて怯むフェイト

エリオは右腕に残りの魔力の六割を、ストラダーに二割の計八割を電気として流した。

そして踏み込む

『 S o n i c M o v e 』

「うおおおっ！」

『 S p e e r a n g r i f f 』

残り二割の魔力から繰り出されるのは加速の魔法

一瞬だけでも良い

フェイトを越える“速さ”を実現させる

雷の速さで走る『Sonic Move』とストラダーからの噴射により加速する『Speerangriff』

二乗された速度はフェイトが『Sonic Move』を発動するよりも早くフェイトの背後を捉えた。

「……くっっ！」

フェイトはバルディッシュが自動で発動したプロテクションによって
エリオの攻撃を防ぐ

振り向き、自らの魔力も障壁へと注ぐフェイトだったがエリオの二
乗された速度からの突きはプロテクションに輝を入れる

エリオはストラダーを左手に持ちフェイトのプロテクションを突い
た。

電気を帯電しているストラダーは放電しながらプロテクションを削る

エリオの空いている右腕に纏う雷

「貫けえ！ストラダー！」

エリオは左手を離すと同時にストラダーの柄頭を全力で殴

『 Short Buster 』

「えっ…！ぶぎゃっ!?!」

突然のエリオの真上からの砲撃

桃色の砲撃はエリオとストラダを巻き込んで爆発した。

「危なかったね、フェイトちゃん」

「…なのは」

レイジングハートを持ち直し降下して来るのは

フェイトは折角楽しくなって来た処を邪魔された感があったが、なのはが来なければやられていた為礼を言う

「…ありがと。もう少しでエリオに負けちゃう所だったよ…」

「エリオ、強くなったね。……ううん、エリオだけじゃ無い。スバルもティアナもキャラも皆強くなった」

「…ヴィータ、落とされちゃったもんね」

「ヴィータちゃんの場合は自業自得だと思うけどね」

なのはそこまで言うと、レイジングハートの杖先をティアナとキヤロが居るであろう森へと向けた。

「ねえ、フェイトちゃん。まだ魔力に余裕ある？」

「…あるけど…何をするの？」

「ティアナの幻影は面倒だからね…。本人達をあぶり出そうと思うの！全力全壊で！」

「……なのは、字が違わない？」

“全壊”の部分にツッコミを入れるフェイトだが、なのははお構い無しにレイジングハートに魔力を込める

そしてとても笑顔で十八番の砲撃魔法を放った。

「デイベイインツ……！」

『 Divine Buster 』

「バスタアアアツ！」

砲撃は木々を消し飛ばす

なのははデイベインバスターを放射したままレイジングハートを横に動かした。

まるで鞭の様にしなりながら木々を薙ぎ払って行く桃色の砲撃

「きゃあああつ！？」

「きゃあああつ！？」

薙ぎ払われる木々の中から少女2人の悲鳴が上がった。

結局、なのはの砲撃によって幻影ごと吹き飛ばされたティアナとキ

ヤロは呆気なく撃墜

模擬戦は終わりを迎えた。

その日の夜

模擬戦で疲れ切り就寝したFW達を余所に部隊長室に呼び出された
なのはとシグナム

なのはとシグナムの前ではやては笑みを浮かべている

「なのはちゃん、シグナム……之はどういう事やるか？」

それはもう満面の笑み

笑顔の筈のはやての眉間や額に青筋が入っている

はやてがなのはとシグナムに2つの映像を見せていた。

「……………にやはは」

「これは…その…」

映像を見て苦笑いするなのと言葉を濁しながら眼を逸らすシグナム

2人の前に映っているのは今日の模擬戦の映像

1つはなのはが砲撃を何発もぶつ放す映像

もう1つはシグナムが『緋凰絶炎衝』と『シュツルムファルケン』を放つ映像

「いくら何でもやって良い事と悪い事があると私は思っんや」

はやては机に置かれた紙を2人に見せた。

そこに記載されているのは莫大な金額

「なあ二人共…訓練施設破壊するってどういう事なんやるか？」

普通は模擬戦では壊れない筈の処理を施していた訓練施設は設立時かなりの金額を掛けている

それを知ってか知らずか、目の前の“魔王”と“戦闘狂”は平然と破壊してしまった。

「二人共、之については給料から引いとくさかいに」

はやてはバツサリと言い捨てる

なのはとシグナムは悲鳴を上げるしかなかった。

『六課最大の模擬戦』（後書き）

最近、YouTubeにて【なのはさんが倒せない】を見て大爆笑しました（笑）

確かに魔王には萌えません！

はい。今回の懺悔の時間です。

まず、スカリエッツィ。

造っちゃいました『ベルセリオス』

後悔はしていません

尚、スカリエッツィが造った『ベルセリオス』と本物の『ベルセリオス』は何も関係はありません

ただ単にシャルティエの性能を真似て造ったスカリエッツィ製の違法デバイスに、スカリエッツィが偶然同じ名前を付けただけです。

『ベルセリオス』搭載AIはスカリエッツィの性格ですが喋りません
スカリエッツィが造っただけあり、本物のソーディアンであるシャ

ルやレイジングハート、バルディッシュには性能は負けるがFW達のデバイスよりは高性能

さてさて、FW達はベルセリオスが配備された数の子に勝てるのかな？

次にシグナム。

やり過ぎだ馬鹿者

ただ彼女はやはり之くらいの勢いが似合ってますよね？

ヴィータ共々成長して貰います（笑）

その次に、坊ちゃん。

久々に出た正体の隠せていない仮面

一応、仮面が張れる障壁の硬さは“本気時のスバルが張るプロテクションの3分の1”の硬さです

又、よくよく思い出してみれば坊ちゃんもキャラと同じく人參嫌いなんでしたよね。

でもこの二次創作では人参は食べられます。

そもそも『D2』の時点でリリース特製シチューをお代わりしてるんですからピーマンのように食べれないという訳じゃ無いと七夜は解釈しています

シチューには基本人参が入っていると思いますので…。

苦手だけど食べようと思えば食べられる 人参

食べたくも無い ピーマン

……みたいな感じですよ。

尚、今話の模擬戦の時点でFW達は原作より遥かに強くなっています
原作で六課解散後に獲得した『AA』ランクの能力は既に越えてますよ。

P.S.

マイスター七夜はシグナムやギンガさん、フェイトさん等の女性として一部が大きい人が大好きな変態さんの上に、リインやヴィータちゃんの様な幼女も好きな変態紳士さんなんですよぉ〜！（by・リイン）

『崩壊の日』（前書き）

原作改変と言うか崩壊と言うか…

原作と物語が少し変わりますので御注意下さい。

『崩壊の日』

スカリエッツェイの研究施設

大量に生産されたガジェット達が並ぶ道をスカリエッツェイは歩いて
いた。

「祭りの日は近い……。……君達も楽しみだろうか？」

薄暗い道を歩きながら唐突に呟くスカリエッツェイ

その言葉は道の先に居る2人の少女へと投げ掛けられる

「武装も完成したし……。ドカンと一発暴れてみたいっスね」

楽しそうに答えるのは巨大なサーフボードの様な物を持つ少女

スカリエッツェイが作り出した戦闘機人【ナンバーズ】の11番『ウ
エンディ』

「君達は最前衛の能力だ…。存分に暴れられるとも…」

「だって…。楽しみだね、ノーヴェ」

スカリエツィの言葉を聞いたウエンディは自分の後ろに居るもう一人の少女に笑い掛ける

「……別に」

しかしその少女、【ナンバーズ】の9番『ノーヴェ』はふて腐れた様に答えた。

「私は私達の王様がどんな奴か、そいつは本当に私達の上に立つ相応しいのかどうか……確かめただけだし」

「……ふっ」

ノーヴェの言葉を聞いたスカリエッツィは鼻で笑うと、通路に設置されているパネルへと近付く

スカリエッツィが通って来た道からは残りのナンバーズ達が歩いて来る

スカリエッツィはパネルを操作し目の前の暗闇をライトで照らした。

そこに在るのは“12本の剣”

それぞれのナンバーズの体型に合わせたサイズの漆黒の剣

その剣を見ながらスカリエッツィは口を開く

「ガジェット、ナンバーズ、そして12本のベルセリオス…。準備は整いつつある。一つ大きな花火を打ち上げようではないか…！」

楽しそうに、それでいて狂った笑いが研究施設に響いた。

9月11日、機動六課隊舎

時刻は午後7時を過ぎた頃

F W達と隊長陣、そしてリオンははやての前に並んでいた。

「明日は公開意見陳述会や…」

そう切り出すのは全員の前に立つはやて

聖王教会から提供された“予言”の解釈の結果、明日行われる公開意見陳述会が狙われる可能性が大きいと判断

その護衛の為にF Wと隊長陣を出勤させるらしい

「……なんやけども」

はやては言葉を繋げる

「流石に六課の戦力を全部回す訳にもいかへんのや。六課が手薄になつた処を狙われたら敵わんし」

そう言うとはやてはリオンとギンガに視線を送る

「……僕とギンガが残るのか……？」

「せや。リオン君とギンガは、ザフィーラとシャマルと一緒に六課で待機や」

「……別に構わない」

「はい！」

はやてからの命令に返事をするリオンとギンガ

リオンとしては命令されるのは癪だったが、六課に残れば面倒事は巻き込まれないだろうと考え了承した。

FW達とスターズの隊長2名、そしてリインは今からナイトシフト

で警備を開始

はやてとフェイト、そしてシグナムは明日の朝に中央入りする事になった。

ナイトシフトで警備に向かうFW達となのは、ヴィータは隊舎屋上に用意されているへりへと乗り込む

「……………あっ」

へりに乗り込む直前になのはは見送りに来ているヴィヴィオを見つけた。

なのははヴィヴィオに近づく

「なのはママ、今日はお外でお泊りだけど明日の夜には帰って来るからね」

「……………絶対？」

「うん。絶対に絶対」

眼に涙を浮かべるヴィヴィオに優しく声を掛けたなのははヴィヴィオに小指を出す

「良い子で待ってたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作ってあげるね」

「……うん」

なのはの小指に自分の小指を絡めるヴィヴィオ

「なのはママとフェイトママが帰って来るまでリオンお兄ちゃんと一緒に居るんだよ？」

「……うん」

「……何故僕の名前が出て来る……？」

『……坊ちゃん、何気に面倒見が良いですからね……』

リオンとシャルはヘリポートの隅で小さく呟いていた。

なのはが乗ったヘリを見送るヴィヴィオはリオンの服を握り締め
ている

なのはと約束はしたもののヴィヴィオは離れていく母親に泣き掛け
ている

「……………ヴィヴィオ……………」

リオンは口を開いた。

子供に泣かれると面倒だ、と自分に言い聞かせながらも泣き掛けの
子供を放っておく程リオンも廃れてはいない

ただ自分の“甘さ”を認めたく無いだけ

「……………何？リオンお兄ちゃん」

「……………なのはが帰って来るまでならピーマンを自由に残せるぞ」

その言葉を聞いた途端、先程までの泣き顔は何処へやら…

ヴィヴィオは嬉しそうにリオンの手を握り大きく振っていた。

その日の夕食は食堂スタッフが気を利かせてくれたのか、ピーマン抜きのオムライスだった。

リオンの隣に座り嬉しそうにオムライスを頬張るヴィヴィオ

「…ねえ、エミリオ」

ヴィヴィオと同じオムライスを食べていたリオンにフェイトが声を掛けて来ながらリオンの横に座る

「……………どうした？」

「…ヴィヴィオの事…宜しくね」

「……………急に何を言い出す」

「…別に深い意味は無いけど…明日は“予言の日”の可能性が高いでしょ…？だから、もしもの時はヴィヴィオを護ってあげてね」

「……僕に頼まなくてもギンガや他の連中が居るだろ……。何故僕に頼む……？」

リオンに問われたフェイトは人差し指を顎に当てながら上を見て考える事数秒

「……皆頼りになるけど、エミリオなら信頼出来るからかな？」

「………は？」

オムライスを食べていた手を止め呆気に取られたかのような表情をするリオン

それもそうだ。

“裏切り者”の汚名が付いている自分を“信頼出来る”とフェイトは言った。

「………さまでした！」

呆然としていたりオンの隣で食べていたヴィヴィオはオムライスを完食し元気良く手を合わせる

口の回りに大量のケチャップを付けて…

「…ヴィヴィオ、口の回りを綺麗にしておこうね」

席から立ち上がるとフェイトはヴィヴィオの口に付いているケチャップを拭き取った。

「…お風呂に入って寝ようか？」

「うん！リオンお兄ちゃん、また明日ね！」

フェイトに手を引かれて食堂を後にするヴィヴィオ

手を振るヴィヴィオをリオンはただただ見詰めていた。

『坊ちゃん、フェイトさんに信頼されちゃってますね』

「……何故……だろっな……」

『フェイトさんもマリアンと同じく坊ちゃんの良い所を理解してるんですよ、きつと』

「……嫌いぞ……シャル」

リオンはシャルを黙らせ、オムライスを口に運ぶ手を再び動かした。始めた。

勿論、リオンのオムライスにだけ入っていたピーマンは残して……

425

次の日の朝

はやて、フェイト、シグナムが六課を出発してからの朝食

リオンとヴィヴィオ、そしてギンガは食堂のテーブルに着いていた。

「……………」

リオンは無言で朝食を見詰める

今日の朝食はオムライス

昨夜に引き続き…という点は別に構わない

だが、朝からオムライスを食べる気にはリオンはなれない

「おいし〜!」

「リオンさん、食べないんですか?」

そんなリオンとは対照的にリオンを挟んで座る2人の少女は美味しそうにオムライスを食べていた。

「……………食べるが…朝から“コレ”はきつくないか…?」

「そうですね? 私なら後3皿は食べれますけど…」

平然と答えるギンガのオムライスはリオンやヴィヴィオの二倍位あ

る大きさ

それを後3皿…

計4皿食べるといふ事

リオンは自然と胸焼けがしてきた。

しかし食べなければ他に朝食は無い

リオンは仕方無くオムライスを食べ始めた。

朝食の済んだリオン達は六課周囲を軽く警戒しつつもヴィヴィオと遊ぶ

リオンは最初遊ぶ事を嫌がっていたがヴィヴィオが駄々をこねる為、シャルに『少しだけ…』と言われ付き合っている

遊びの内容は“飯事”

「アナタ、お帰りなさい。晩御飯にする？お風呂にする？それとも…あ、た、し？」

「……………ぶっ！？」

「……………何処で覚えた…！」

『ヴィヴィオ！そんな事は言っちゃ駄目ですよ！』

ヴィヴィオの発言に思わず吹き出す“姑役のギンガ”

それに注意をする“夫役のリオン”と“ペットの犬役のシャルティエ”

傍から見ていれば十分楽しそうに遊んでいるリオンだった。

そのまま何事も無く時は流れ、刻は夕刻

夕食を食べようと食堂に来たリオンとギンガとヴィヴィオ

リオン達と遊んだ事によりヴィヴィオの顔はとても笑顔だ。

ただ、付き合わされたりリオンとギンガはとても疲れたような顔をしている

3人は夕食を食堂のカウンターから受け取ると席に座った。

食堂に設置されているテレビでは公開意見陳述会の様子が映されて

いる

どうやらそろそろ終了のようだ。

「何事も起こらなかったですね」

「……ああ、そうだな」

テレビを見ながら安堵の溜息をつくギンガ

リオンは適当に相槌を打つ

「………何も起こらなければ良いがな……」

リオンは夕食を口に運びながら呟いた。

場所は変わり、スカリエッティの研究施設

椅子に座り、幾つものモニターを見るスカリエッティ

彼の前では【ナンバーズ】の1番『ウーノ』が宙に浮かぶパネルを操作していた。

「ナンバーズ……。【No.3『トーレ』】から【No.12『デイド』】まで、全機配置に付きました」

「お嬢とゼスト殿も所定の位置に着かれた」

「攻撃準備も全て万全。後は“GOサイン”を待つだけです」

ウーノに続くように言葉を続ける【ナンバーズ】の3番『トーレ』と4番『クアットロ』

それを聞いたスカリエッティは椅子にもたれながら嘲笑うかの如く笑みを漏らした。

「……………楽しそうですね」

パネルを操作したままウーノはスカリエッティに問い掛ける

「ああ…楽しいさ。この手で歴史を変える瞬間だ。研究者として…
科学者として…心が沸き立つじゃないか。…そうだろ、ウーノ？」

スカリエッティは椅子から立ち上がると手を大きく振る

「さあ！始めよう！」

スカリエッティの合図と共に悪夢の幕が開けた。

「……………何だこれは……………」

六課食堂でテレビを見ていたリオンは柄にも無く声を上げる

そこに映っているのは地上本部内部の様子では無く、地上本部を外から映した映像

そこには地上本部を覆う無数のガジェットの姿

次の瞬間、テレビの映像は途絶えた。

『坊ちゃん大変です！通信妨害が掛かっています！現場のFW達やなのはさん達とも連絡が取れません！』

「……………何だと…！？」

最後の最後に“起きて欲しく無い事”が起こってしまった。

リオンは立ち上がると降ろしていたシャルティエを腰に挿す

食堂にいた他の局員達は念話での通信を試みているが駄目な様である

緊張感の走る機動六課

そんな六課に追い撃ちを掛ける様に警報が鳴り響いた。

「総員！最大警戒体勢！バックヤードスタッフ、避難を急いで下さい！」

「……くそっ！ヴィヴィオ、来い！」

警報を聞いたリオンはヴィヴィオの手を引くと急いで食堂を出る

向かうはバックヤードスタッフが避難している避難場所

急ぎ足で歩いているとバックヤードスタッフを誘導しているヴァイスを見付けた。

「……ヴァイス……！」

「リオンか……！お前も早く避難しろよ！」

「……僕は構わない。それよりヴィヴィオを頼む……！」

リオンはヴァイスの前へとヴィヴィオを突き出した。

ヴィヴィオは「えっ？」という表情でリオンを見る

「リオンお兄ちゃんは行かないの…?」

「……僕はギンガと一緒に外を警戒する…。ヴァイス達と一緒に奥に行っている」

ヴィヴィオにそう言うとリオンは騎士甲冑モドキと仮面を展開しシヤルティエを鞘から抜く

「……フェイトにお前を護れと言われた…。だから大人しくしている……僕が全部倒して来てやる」

リオンはそれだけを言い残すと来た道に戻った。

食堂まで戻るとギンガがバリアジャケットとブリッツキャリバー、及びリボルバーナックルを展開していた。

「リオンさん、ヴィヴィオは…?」

「……ヴァイスに預けて来た。後ろに入れば大丈夫だろう…。ギン

ガ、お前と僕でガジエットの大半を叩く……遅れるなよ」

「はい！」

リオンとギンガは六課の玄関から外へと飛び出す

そこにはガジエット達の大群

今朝までであった機動六課の美しい姿は既に無かった。

ガジエット達のビームによって破壊される地面、隊舎、木々

「……ギンガ、お前は反対側に回れ…此処は僕が抑える」

「分かりました…。リオンさん、お気をつけて」

ギンガはブリッツツキヤリバーを飛ばして六課裏、訓練施設方面へと向かった。

ギンガが去った後、リオンはシャルを構えてガジエット達を睨みつける

『こいつ等、ボク達の居場所を!』

「……シャル、余計な感情は持ち込むな」

そう言うリオンであったがシャルを握る手には力が籠っていた。

数ヶ月も居ると流石に愛着が湧くもの

だから……居場所を破壊されるのは気に食わない

「……貴様達……目障りだ!」

リオンは晶術を怒りに任せて放った。

「グランドダツシャー!」

ズゴンッ、とガジェット達の足元の地盤が崩壊する

刹那、崩壊した大地から無数の岩の槍が荒れ狂う津波の様にガジェット達を飲み込み貫いた。

この一撃によって20以上のガジェットは鉄屑と化す

しかしガジェットの数は衰え無い

リオンは次の一撃を準備する

「ブラックホール！」

発動と同時にガジェット達の背後に現れる黒い穴

それはガジェット達を次々と吸い込んで行った。

その数が『ブラックホール』によって急激に減少したガジェット

リオンは残りのガジェットを殲滅する為に駆け出した。

残っていたガジェット達はリオンの前に尽く破壊されていく

ザフィーラの援護を受けたリオンは片っ端から視界に入るガジェットを破壊して行った。

「……………終わりか…？」

ガジェットを全滅させたりオンは周囲を見回す

増援が無い様子から第一波は迎撃したと見て問題は無い

空中にもガジェットが旋回しているが、あの程度の数ならばファイ
ーラだけでも十分だろう

リオンの頭の中に選択肢が流れた。

このまま第二波を警戒するか、もしくはヴィヴィオの元に顔を出し
てやるか…

「……………オン…さん…聞こえますか？」

シャルティエに繋がる通信にオンは思考を止める

妨害が酷いが何とか聞き取れない事は無い

リオンは返答する

「……聞こえるが……どうかしたのか……？」

「……訓……施設に……高エネ……ギー反応が……」

『訓練施設側に高エネルギー反応って……坊ちゃん！』

「……ギンガがマズイな……」

ギンガの危険を感じたりオンは訓練施設方面へと急いで駆け出した。

海上訓練施設

「……はあ……はあっ！」

ギンガは体中を血だらけにしながらか敵を見据えていた。

「いや〜意外としぶといっスね〜」

「当たり前だウエンディ。旧型と言えども戦闘機人だ。之くらいで倒れる程脆くは無い」

ウエンディにそう言うのは眼帯を付けた少女

【ナンバーズ】の5番『チンク』

彼女達2人を相手にしていたギンガは限界を迎えていた。

ブリッツキャリバーは度重なる攻防により全力で駆ける事が出来ない
リボルバーナックルもギアの回転が落ちておりカートリッジも使い
切った。

それに比べ、チンクとウエンディは無傷に等しい

幾ら2対1とは言え、ギンガが此処まで一方的にやられているのに
は理由がある

それは彼女達が持つ剣型デバイス

圧倒的な近接攻撃力を誇る彼女達のデバイスは、ギンガの攻撃を相殺しプロテクションを打ち砕いていた。

「ウエンディ、援護を頼む。アレは姉が仕留める！」

「了解っス！」

ウエンディは巨大な盾『ライディングボード』の先端をギンガへと向ける

盾の先端には砲門

「……………くっ！」

ギンガは傷だらけの体に鞭を打ち射線上から回避する

ドガンッ、と先程までギンガが立っていた位置が爆発した。

ライディングボードから次々と放たれる射撃を何とか回避するギンガだが、損傷の激しいブリッツキャリアーでは回避には限界が来てしまい

「捉えた！」

「……………っ!？」

チンクから放たれる“ステインガー”

その数は10本

体全体を使い回避するギンガだったが1本だけ直撃コースのステインガーが迫り来る

「……………っ!」

回避は不可能と判断したギンガはステインガーが左脇腹に突き刺さる瞬間に右手を割り込ませプロテクションを張る

ニヤリッと笑うチンク

チンクは左手を突き出すと【インヒューレントスキル（IS）】を
発動した。

「IS、ランブルデトネーター」

パチンツ、と右手の指を鳴らす

それに反応したスティングーは爆発を起こした。

「くっ…あああっ！」

吹き飛んだギンガは2回、3回と地面を転がる

地面を転がるギンガは動きを止めるとぐったりと倒れた。

爆発を諸に受けた右手は手首から先が失くなっており、左脇腹も少し挟れている

そして…

その両方から機械の部品が剥き出しになっていた。

「やっと大人しくなっ たっスね〜」

やれやれ、とでも言うつかの様に両手を肩まで上げながらギンガに近付いて行くウエンディ

「後はコイツを回収して〜」

「……………！ウエンディ！」

ウエンディがギンガに手を伸ばした瞬間、チンクは叫んだ。

ウエンディの足元に展開される円形の模様

ミッドでもベルカの魔法陣でも、ISのテンプレートでも無い

「下がれ！ウエンディ！」

「……えっ？」

しかしチンクの警告は遅かった。

次の瞬間には大気の圧力がウエンディを大地に張り付ける

晶術【エアプレッシャー】

「……貴様達…僕の“仲間”を攻撃すると言う事は…僕に対する宣戦布告と受け取って構わないんだな？」

晶術の主、リオンはシャルティエをチンクに向けながら怒りを込めた声で言い放った。

「ウエンディ、後退しろ。此処は姉が引き受ける」

「でもチンク姉……」

「心配するな。それにドクターが造ったベルセリオスの性能も試さねばならないしな」

チンクが腰の後ろから引き抜いたのはチンクに合わせて小型化された漆黒の剣『ベルセリオス』

「……………あれは…！」

リオンはその剣を見て驚いた。

それはかつて見たソーディアンの形と酷似している

焦っているのはリオンだけでは無かった。

シャルティエも大きく動揺している

ベルセリオスはスタンやディムロス達に破壊された筈

『……………これは…』

シャルは呟く

ベルセリオスを見た際に咄嗟に行っていたサーチの結果が出た。

シャルはリオンに告げる

『坊ちゃん、あの剣は形と名前が同じだけでソーディアンではありません。ただのデバイスです』

「……………！そうか……………」

『ただ…FW達が持つデバイスとは桁違いの技術で造られています。まさしく“違法改造”と言うやつです』

「……………スカリエッティとやらは気に食わない物を造るんだな……………」

チンクの手に収まるベルセリオスを見て悪態をつくりオン

リオンにとってベルセリオスは悪い記憶しか無い

「……………さて……………」

チンクはベルセリオスを下段に構えると視線をリオンからギンガへと向ける

「お前に一つ教えてやろう。そこで倒れている女は“戦闘機人”……つまり私達と同じ存在だ。それでもお前はそいつを“仲間”と言えるのか？」

「……僕の知った事か」

リオンはチンクの言葉に即答した。

「……僕の足を引つ張らなければギンガがどのような存在だろうと僕には関係無い」

「……リオンさん……」

朦朧とする意識の中でリオンの言葉を聞いたギンガは少年の名前を
呼ぶ

リオンは横目でギンガを見ると、ふんつと鼻を鳴らした。

リオンはシャルティエと短剣を構え直す

「……………覚悟は出来たか？」

「面白い。私に勝とうと思ってるのか？」

「……………行くぞ……！」

リオンは体勢を低くしチンクに向かって駆け出した。

「幻影刃！」

最初の一撃はリオンの十八番の強襲技

姿を消したりオンは一瞬の内にチンクの懐へ潜り込む

交わる鉄の音

体型が小さい上に剣を使った事の無いチンクは簡単に弾き飛ばされた。

『坊ちゃん迎撃を！』

「……………分かっている…！」

リオンはシャルティエを下から上へと振り上げ

「魔神 ……！」

ドガアアンツ！

「……………！？」

突如大きな爆発を上げた隊舎

リオンが爆発に気を取られた隙に距離を取り体勢を整えるチンク

「思ったより早いが頃合いか…。ベルセリオスの性能テストは出来

なかつたな」

チンクは呟くとベルセリオスを体の前で横に寝かせて構える

「タイプ・ゼロ・ファーストの回収には失敗したが“器”の回収には成功した。上々の結果だな」

チンクは自らのIS能力をベルセリオスを介して魔法攻撃へと変換させ放った。

「エクセキューション！」

発動と共にリオンを挟む様に上下に現れる闇の魔法陣

その魔法陣から闇のエネルギーが放出されリオンを襲う

しかし、チンクが擬似晶術を制御出来ていないからカリオンに命中はする事無く、リオンの周辺を攻撃するだけに終わった。

「……………疑似晶術まで放てるとはな…！」

【疑似晶術】とはソーディアンマスター以外がレンズを使用して使う“晶術に似た力”の事

カイルやロニ達が使った晶術もこの部類

「……………逃げられたか…」

リオンが伏せていた身を起こせば既にチンクの姿は無かった。

リオンは息を整えるとギンガを見る

「……………ギンガ、もう暫く我慢している…直ぐに戻る」

「……………はい…」

弱々しく答えるギンガに『ヒール』を掛けたリオンは隊舎へと向か

った。

リオンが辿り着いた時には六課隊舎は見るも無残な状況になっていた。

火の海

その言葉が当て嵌まっている

「……………あれは……………」

その中にリオンは人影を見付けた。

リオンは無意識に警戒を強める

このような状況で目の前の人影の様に突っ立っている局員などいない

リオンは人影へと走り寄る

「……………貴方は……………」

リオンの接近に気付いた人影が口を開いた。

その人影の正体は以前、下水道で戦った召喚士の少女

傍らには使役している人型昆虫のガリユー

そしてガリユーの腕の中に…

『ヴィヴィオ!』

シャルが叫んだ事によりリオンも気付いた。

ガリユーの腕に抱かれる様に捕まっているヴィヴィオの姿

ヴィヴィオは必死に抵抗しているがガリユーには全然効果が無い

「助けて…! リオンお兄ちゃん!」

「……………ヴィヴィオ……………」

『ヴィヴィオ、待ってて下さい！今助けに行きますから！』

シャルを構えリオンはガリユールへと接近する

「……………ヴィヴィオを…返して貰う…！」

「……………無理……………」

「……………！？」

突然、リオンの目の前に現れた栗色の髪の少女

【ナンバーズ】の12番『デイド』

エリオやフェイトの様に“見えない速さ”でリオンの前に現れたデイドの手には二本の赤い光を発する剣

IS【ツインブレイズ】

ガリユールへの攻撃モーションに入っていたリオンは突然割って入って来たデイドの攻撃に対応する事が出来なかった。

ズバンツ、とリオンの体はツインブレイズによって斬られる

「……………はっ！」

「リオンお兄ちゃああん！」

ツインブレイズの一撃により障壁を張っていた仮面が割れ、その姿を見たヴィヴィオが泣きそうな顔でリオンの名を叫んだ。

『坊ちゃん……！』

「……………分かっている……僕はヴィヴィオを護るとフェイトと約束した……！」

「……………へえ……まだ立ち上がるんだ……！」

リオンを見下ろす様に空中から声を向けて来るのはデイドと同じ茶髪の少女

【ナンバーズ】の8番『オットー』

リオンはシャルを2人の戦闘機人に向けるがその足はフラフラ

既にツインブレイズの直撃を受けた時点で紙防御のリオンの体力は危険区域にまで入っていた。

今リオンが立っているのはフェイトとの約束を守る為

“裏切り者”である自分を信頼してくれた相手を裏切りたくは無いです
という気持ち

そして、マリアンと同じ感じのするフェイトとの約束は絶対に破りたく無かった。

しかし現実は無情…

「……………体力的には限界みたいだね……………」

オットーは右手に光を蓄積しながらリオンに言う

IS【レイストーム】

それは様々な用途に使える光線

様々な用途……その中には“攻撃”も勿論含まれている

「……さよなら…剣士さん」

オットーはレイストームをリオンに向けて放った。

「リオンお兄いちゃああん！」

泣き叫ぶヴィヴィオの声だけが燃え盛る六課に響いた。

FWライティング分隊のエリオとキャロはスターズ分隊と別れて機

動六課への救援の為にフリードに乗り六課へと急行していた。

「…………酷い……」

フリードの背に乗り機動六課まで辿り着いたキャロは燃え盛る隊舎を見て言葉を漏らす

そこには昨夜まで見ていた隊舎の面影が一切無かった。

「……………！あれは……………！」

キャロの後ろに乗っていたエリオが六課から飛び立つ物体を見付ける

2人は目を懲らした。

六課から飛び立ったのは召喚士の少女とガリユー

そしてガリユーに抱かれて気を失っているヴィヴィオ

「……………」

連れ攫われるヴィヴィオを見たエリオの脳裏に過去の光景が思い出される

かつての自分の身に起きた出来事…

親と幸せに暮らしていたある日、黒い服を着た男達が家に押し入りエリオを両親から引き離した。

あの時の気持ち…

忘れたくても忘れられない

今、目の前である時と似た状況が起こっている

「（絶対に許せない！）」

感情が高ぶるエリオの体からは電気が放電する

放電される雷は之までに無い位の量

それはまさしく“暴走”

「ストラーダ！フォルムツヴァイ！」

『 D u s e n f o r m 』

次の瞬間、エリオは叫んでいた。

「……………エ、エリオ君…？」

突然叫んだエリオに驚くキャロ

しかもただ叫んだだけじゃない

体中から電気が放電している

「キャラ、後はお願い…！」

『Explosion』

ジャコンツ、とカートリッジが消費される

『Sonic Move』

エリオは『Sonic Move』の加速を利用しフリードから飛び出した。

462

「ブースト！」

『Start』

ストラダーのブースターから一斉に噴射される

「っおおおっ」

その速さは『Sonic Move』には及ばないものかなりの速度

エリオが突っ込んで来る事に気付いたガリユーが迎撃に向かうが…

「どけえええっ！」

エリオの速度はガリユーが腕を振るうよりも速かった。

胴体を斬られたガリユーはダメージの大きさに強制送還される

エリオはそのまま召喚士の少女が乗るガジェットへと着地した。

体中から放電されている雷の量は先程よりも遥かに多い

「ヴィヴィオを…返せえ！」

エリオは叫んだ。

体中の電気を全てストラダに集める

「……………失礼……………」

「……………っ！？」

リオンの時と同じ様に突如として現れたデイド

エリオは『Blitz Action』を使用し背後からのデイドの強襲を防いだ。

464

「ストラダああ！」

『Form Drei·Unwetterform』

エリオの雄叫びに呼応し第三形態へと変形するストラダ

エリオの魔力変換資質『電気』を生かす為のフォルム

しかしストラーダには限界が近かった。

度重なる電気の帯電

リオンとの鍛練によるエリオの強化

その全てが“ストラーダ”のスペックを上回ってしまっていた。

そして今現在は“暴走状態”のエリオの電気を全て受け止めている

ストラーダからは煙が上がり始めていた。

「うおおおおっ！」

エリオはストラーダを大きく振りかぶる

標的は目の前の二本の剣を持った少女

デイドはツインブレイズを振り下ろす

「サンダアアアッ！」

エリオはストラーダを振り抜いた。

「レイジイイツ！」

ストラーダから全ての電気を解放する

バジバジバジッ、と拮抗するストラーダとツインブレイズ

「ス……ト……ラーダああっ！」

エリオが拮抗を崩そうと相棒の名を叫び全ての電気を解放した時

バキヤッ！

「……………えっ…？」

エリオは我が目を疑った。

「……………スト…ラーダ…？」

ストラーダが負荷に耐えられなくなり大破したのだ。

それはもう粉々と言っても間違いでは無い

ストラーダの刃は10個の破片に別れ、柄はまるで木の枝が折れたかの様に砕けた。

エリオの手に残るのは自分の手で握っていた柄の部分のみ…

「……………残念……………」

武器を無くしたエリオにデイドのツインブレイズが襲い掛かった。

まばゆく光る閃光

ツインブレイズの直撃を受けたエリオは海へと落下して行く

「エリオ君！」

キャラはフリードを飛ばしエリオを救出に向かった。

「なんで…っ、こんな…っ！」

落下するエリオを受け止めたキャラは地上にフリードを下ろす

キャラの隣で完全に気を失っているエリオ

「竜騎…召喚…」

涙を浮かべながらキャラロは唱えた。

アルザスの守護竜の名を…

「ヴォルテール！」

キャラロの呼び掛けに答える様に浮かび上がる召喚魔法陣

そこから現れるのは巨大な龍

「……………壊さないで……………」

キャラロは泣きながら叫ぶ

「私達の居場所を……………壊さないでえ！」

キャラロの心からの叫び

それに反応するかの様にヴォルテールから圧倒的な火力の砲撃が放たれた。

その威力は空中に待機していたガジェット達を全滅させる程

六課を取り囲んでいたガジェット達は全て消し炭になった。

丁度その頃、地上本部にはスカリエッティからの声明が送られていた。

「ミッドチルダ地上の管理局員の諸君……。気に入ってくれたかあい？細やかながら之は私からのプレゼントだ……」

狂った笑みを満面に浮かべながら話すスカリエッティ

「……予言は……覆らなかった」

「まだや…機動六課は…私達はまだ終わってない…」

スカリエッティの声明を聞きながら六課の炎上する映像を見て落胆するカリムに対して強く答えるはやて

彼女にはそうするしか無かった。

『崩壊の日』（後書き）

“ 借り暮らしのスカリエッツィ ”

……いや、何でも無いです。

はい。今回の懺悔の時間です。

まず、ギンガ。

ギンガさんは坊ちゃんと狸の御蔭でナンバーズに連れて行かれる事無く、無事（？）六課に残りました。

流石に【ゆりかご戦】には参加出来ませんがね

次に、ベルセリオス。

チンクが直ぐに撤退した為、性能が分かり難かったですか…

原作で3人掛かりでギンガを倒したのに対し、チンク1人でギンガを倒す直前までダメージを与えた、と言えはある程度ベルセリオスの性能が想像できますかね？

尚、チンクが使った擬似晶術【エクセキューション】ですが、ベル

セリオスと同じく本物のエクセキューションとは関係はありません
スカリエツテイが、特化した性能である【IS】をベルセリオスを
介して擬似的に万能性能である【魔法】として遠距離攻撃を行える
様にプログラムして造り上げた物です

何故に【エクセキューション】かと言うと、ベルセリオスのマスタ
ー『カーレル・ベルセリオス』がミクトランを倒した際に使った晶
術だからです

ドラマCDか小説の設定でしたけどね

又、七夜がベルセリオスがそれ以外に使える晶術を知らないからで
す（笑）

ギンガを圧倒したチンクがリオンに簡単に押し負けたのには、“ま
がい物は本物には勝てなかった”“幻影刃の速さにチンクが反応出
来なかった”という理由があります。

さてさて、次回ですが…

少しずつ原作と内容が変わりながら、物語は佳境へ向かいます

最近、二次創作の執筆に自信が無くなり掛けていますが何とか最後まで書き切る様に努力します

P . S .

よくよく思い出して見れば、ザフィーラとシャマルとシャーリーが全然登場してないですよ！（by・ライン）

『折れない心』(前書き)

坊ちゃんの出番が無い上に坊ちゃんの性格が全然違う…。

『折れない心』

スカリエツティによる地上本部襲撃から一夜

管理局員達は負傷者の救助や現状の把握に全てを注いでいた。

それは勿論六課も例外では無く、昨晚の戦闘で比較的無傷に近いなのは、シグナム、ティアナは六課の状況把握に徹する

「……………はあ……………」

崩れた隊舎を見たティアナは深い溜息を漏らした。

「酷い事になってしまったな」

「……………シグナム副隊長……………」

ティアナに近付き声を掛けるシグナム

ティアナは返事はするものの声には覇気が無い

ティアナはその口調のままシグナムに問う

「……………病院の方は…………？」

「重傷だった者は峠を越えたそうだ」

「……………そうですか……………良かった」

シグナムの言葉にティアナは安堵する

「高町隊長は？」

今度はシグナムがティアナに問う

ティアナは崩れた隊舎に視線を移しながら答えた。

「……………中です……………」

「様子はどつだ？」

「…いつも通りです。しっかりお仕事をされてます……攫われちゃったヴィヴィオの事とか…負傷した隊員達の事を確認したら後は少しも…」

「そつか…」

シグナムはそこまで聞くとティアナが持っていたファイルを半ば強制的に取り上げる

「こちらは私が引き継ぐ。お前も病院に顔を出してくると良い」

「……ですが…」

「行ってやれ…」

「……はい……！」

ティアナはシグナムに深く礼をすると早足で病院に向かった。

病院に到着したティアナはF W達が入院している病室へと向かう
ギイイツ、と音を立てて開く扉

「…………ティアナ……」

ティアナに気付いたスバルが口を開く

「差し入れ、持って来たわよ」

無理に笑顔を作り持参して来た袋を見せるティアナ

だが、スバルの表情は沈んだまま

ティアナは病室内を見回すと自ずと気が沈む

スバルが居るのは4人が入院出来る一般的な病室

スバルは手や足、頭に少しばかり傷を負い包帯を巻いていたが他の3人に比べればマシだった。

ティアナは今朝受けた被害報告を思い出しながらベッドの上に居る仲間達を見る

病室入口から見て左奥の窓側に居るスバルは昨晚、六課本部にて戦闘機人『ノーヴェ』と戦闘

互角の勝負を繰り広げていたが、ノーヴェが【ベルセリオス】と呼ばれるデバイスをを使用した事により敗北

幸いにもそこでノーヴェが撤退した為に重傷を負う事は無かった。

右奥の窓側、スバルの対面側のベッドに居るのはギンガ

彼女は戦闘機人2名と戦闘し重傷

現意識は覚醒しておりベッドの頭側をギャツジアップしてもたれ掛かっている

ギンガの体にはスバル以上に包帯が負かれており、右手と左脇腹からは包帯で隠しているものの機械の部品が見えていた。

入口から見て右手前、ギンガの隣のベッドに居るのはリオン

彼は戦闘機人3名と戦闘し意識不明の重傷

峠は越えた様だが今だ意識が戻らずベッドの上で寝ていた。

そしてスバルの隣、リオンの対面に居るのはエリオ

エリオはこの中である意味1番の重傷であった。

戦闘機人との戦闘によって負った怪我は殆ど完治している

しかし、その戦闘によりストラーダは大破

ストラーダの核となる部分は無事なのだが本体がほぼ修復不可能な状態

そして何より“皆を護れる騎士”になる事が目標のエリオにとって目の前でヴィヴィオが攫われた事は彼の自我に大きな傷を付けた。

ティアナは袋を病室に備えられている机に置くと中身を取り出す

「皆、何も食べて無いんでしょ？」

そう言いながらエリオとエリオの見舞いに来ていたキャラロにパンを渡す

「ありがとうございます」

「……ありがとうございます……」

パンを受け取り御礼を言うエリオとキャラロだがエリオの言葉には覇気が無く、目は死んでいる

それに気付かないティアナでは無かったが、そればかりはエリオ自身が自分の心に決着を付けるしか無い為何も出来なかった。

「……ん」

スバルにジュースを差し出す

「……ありがとう、ティア」

「ギンガさんもどうぞ」

「ありがとうございます」

ギンガに渡すジュースの缶は片手が使えないギンガに代わりティアナが開ける

ギンガにジュースを渡すとティアナは自分の分のジュースを開けた。

ティアナの前でベッドの上に身を起こしているスバルはゆっくりとした動作で缶のフタを開ける

一つ一つの動作の際に機械音が鳴る

「腕…もう動かせるんだ…」

「神経ケーブルが逝っちゃってたからまだ上手く動かせ無いんだけど…何日かで元通りだった」

「……そう…」

ティアナはスバルの話を聞くとジュースの缶を口に付けながらエリ

才とキャラ口を見る

「チビっ子達には何処まで…?」

「あたしとギン姉の生まれとかそこら辺は……。後、ギン姉が言うにはリオンも昨日の戦闘中に知ったみたい」

「……………そう…」

ティアナはスバルのベッド横にある椅子に腰掛けた。

「……………」

キャラ口は何か重い雰囲気を感じたのか少し考えた後…

「スバルさん、ティアナさん、ギンガさん。食堂に暖かいスープが売ってましたので買って来ますね。それまでエリオ君をお願いします」

それだけを言残しキャラ口は病室から出て行く

「気を使わせちゃったね……」

「……………うん」

スバルとティアナは気を使ってくれたキャラ口に感謝しつつも、自分より年下の子供に気を掛けさせてしまった事に申し訳ない気持ちになった。

ティアナは小さな声でなのはが言っていた今後の六課の方針を口にする

今後、六課はレリックク搜索からスカリエッツィの追跡に変わる事

「奪われたものは取り返す、全部よ」

その中にはヴィヴィオも当然含まれている

「うん…！」

スバルは力強く頷いた。

スカリエッツェの研究施設

そこに様々なケーブルに繋がれた12本のベルセリオスがあった。

ベルセリオスを硝子越しに見るチンク、ウエンディ、ノーヴェ

「よおっ…！」

そこへ片手を挙げながら駆け寄って来る少女

【ナンバーズ】の6番『セイン』

「セインか…」

「チンク姉、ベルセリオスの調整は？」

「今クアットロがしている」

「は〜あい！クアットロさん、只今頑張り中ですよ〜！」

チンクの背後でパネルを触りながらクアットロは笑顔で答える

「昨日の戦闘でドクターが気にしていたベルセリオスの問題点……
只今絶賛調整中ですよ〜」

「調整したらどうなるっスか？」

「そうねえ〜。簡単に言うと威力増強つてとこかしら〜」

「なら、これであの鉢巻きをぶっ壊せる！」

ノーヴェは拳を握り声を荒げた。

昨晚の戦闘で自分が旧型のスバルと互角だった事が許せなかったらしい

スバルを壊すと意気込むノーヴェにクアットロは言う

「壊しちゃ駄目よおくん、回収しなきゃ」

「……………くっ…オレンジ頭の幻術使いもだ…！あいつが居なけりゃ勝ててたんだ！」

「ああ分かった分かった。次は絶対やつつけような」

ノーヴェを宥める様に撫でるセイン

すると突然、クアットロの横にモニターが浮かぶ

そこに映るのは【ナンバーズ】の10番『デイエチ』

「クアットロ。ドクターが呼んでる」

「はい。きつとベルセリオスを参考にして造る新型兵器のお手伝いでしょ？」

「うん。そうみたい」

「分かったわ。セインちゃん、ベルセリオスにもしも異変が起きたら直ぐに教えてね」

「はいよ」

クアットロはセインに言付けるとスカリエッティの所へと走って行った。

クアットロが去った後、チンク達はベルセリオスを見る

12本製造されたベルセリオス

しかし製造した後、後方支援であるウーノとクアットロには必要無いと判断された2本は別の使用者の為に改造されている

「私も剣での戦い方を学ばねばな…」

チンクは自分用のベルセリオスを見詰めながら呟いた。

その日の夜

フェイトは病院の外でなのはを見掛け話し掛けた。

なのははヴィヴィオとの約束を守れなかったと泣き、今すぐに助けに行きたいと叫ぶ

その気持ちはフェイトも変わらない

だからなのはが泣き止むまで胸を貸した。

落ち着きを取り戻したなのははフェイトに礼を言い仮隊舎へと帰って行く

フェイトも帰ろうと駐車場に向かい歩を進ませていると闇夜に佇む影を見付けた。

「……………エミリオ…？」

「……………！」

背後から声を掛けるとリオンは会いたくない人に出会ったかのような表情を浮かべる

フェイトは何か話そうと口を開いた。

「エミリオ、意識が戻ったんだね…戻ったなら早く言って欲しかったな。…心配したんだよ」

「……………」

しかしリオンはフェイトと目を合わそうとしない

フェイトは何とかこつちを見て貰おうと話を切り出す

今後の六課の事、六課の局員達は皆峠を越えた事…

その誠意が通じたのかリオンは目を逸らしたままだが口を開く

「……………僕に…構わないでくれ……………」

「……………え？」

開口一番の言葉にフェイトは固まった。

「……僕はヴィヴィオを護れなかった……。……お前との約束を破った……裏切ったんだ……。だから……もう僕に構うな」

リオンはそれだけを言い放ちその場から去って行く

フェイトは時間が止まった様に去り行くリオンの背中を見詰めるしかなかった。

リオンは病室へと戻らず病室の敷地内を途方も無く歩き続ける

リオンの心には後悔が渦巻いていた。

“裏切った”

その気持ちが引っ掛かる

裏切るといふ行為は正直リオンにとってどつとどつといふ事は無い

現に18年前も仲間を裏切った。

だが、今回は18年前とは違う

あの時はマリアンを救う為に自分から仲間を裏切った。

だから後悔はしていない

しかし今回はどうだろうか…

今回はフェイトからの頼みを破り、彼女の信頼を裏切った。

それが赤の他人からの信頼ならリオンも割り切れる

だが、マリアンと同じ存在であるフェイトの信頼を裏切ったとなると話は変わる

フェイト裏切る、則ちマリアンを裏切る事と同義

だからリオンはフェイトに合わせる顔が無かった。

リオンの頭に後悔の念が走る

あの時、直ぐにヴィヴィオの元に戻っていれば…

あの時【エアプレッシャー】等では無く【デモンズランス】等の一撃必殺の晶術を放っていれば…

溢れ出した“過去への未練”は止まらない

チ ガ チ ヲ コバム

「……………っ！」

頭に浮かび上がる文字

リオンは足を止め頭を両手で抱えた。

ココロ ガ ココロ ヲ クダク

「……………やめる…っ」

流れて来る文字に抵抗するリオンだが文字は次々とリオンの頭へと流れ込む

キセキ ハ オトズレナイ

「……………僕の頭に…入って来るな…」

ユメナド…

「……………煩い…」

ソコニハ ソンザイシナイノダカラ…

「……………黙れ…！僕は過去を…！」

ムダダ！ サカラエヌサダメガアル

「……………っ！？」

文字が最後まで流れ切ると同時にリオンは地に膝を着いた。

「……………僕は…どうすればいい…」

リオンは暗闇の中独り呟いた。

「……………護れなかった…」

消灯時間がとつくに過ぎた病室でエリオはベッド端に座りながら呟く

もうこの言葉を呟くのは何回目か自分でも分からない

静まり返った部屋ではエリオの声が呟き程度でめ響いた。

スバルとギンガは既に就寝

夕方過ぎに意識を取り戻したりオンも出て行ったきり帰って来ない

『かなり滅入ってますね』

暗闇に響いたエリオとは別の声

この声に聞き覚えのあるエリオはリオンのベッドを見た。

「……………シャル…ティエ？」

そこにはベッド横に立て掛けられているシャルティエがあった。

リオンが置いて行ったのだろう

シャルティエは就寝中の2人を起こさない様に小さな声でエリオに話し掛ける

『エリオ、もう知っているかもしれませんが…六課はスカリエッテ
イの追跡の任務が言い渡されるでしょう』

「……………そうだね…」

エリオは心の抜けた返事をする

『…エリオ、貴方は強くなりたいですか？』

唐突なシャルティエからの質問

エリオはシャルティエを見詰める

シャルはもう一度言葉を発した。

『エリオ、貴方は今よりも強くなりたいですか？』

「……なりたいたいさ……皆を護れるくらいに……。でも護れなかった……」

『なら、今から強くなりましょう』

シャルティエの言葉に首を傾げるエリオ

シャルは言葉を続ける

『六課はスカリエツティを追い、ヴィヴィオを……奪われた大切な物全てを取り返すつもりです』

「……取り返す……？」

『はい。そしてヴィヴィオを救い出す事…それは一つの“護る”という形です』

「それじゃあ僕は……」

『まだヴィヴィオを…皆を護れるチャンスがあります』

シャルの言葉にエリオの眼に生気が戻る

シャルはそれを確認した後、再度エリオに問い掛けた。

『エリオ、貴方は強くなりたいですか？』

「…なりたい。僕は皆を護れる様に、救える様になりたい…！」

エリオの決意は揺るぎ無いもの

シャルはエリオを呼ぶと自分の持ち手を握らせた。

『エリオ…ボクの使用権限を一時的に坊ちゃんから貴方に譲渡しま

す。∴最後の戦いが始まるまでに、ボクと坊ちゃんが知り得る全ての近接戦闘手段をエリオに伝授します。∴厳しいですが覚悟は宜しいですか？』

「覚悟は出来てるよシャルティエ。だから∴僕を強くして」

『その願い、承りました』

エリオは鞘からシャルティエを抜き、強くなる決意を交わした。

地上本部、及び六課壊滅から一週間

退院した六課メンバーははやてが用意した新たな本部「L級巡航艦“アースラ”」へと乗り込んだ。

アースラ内部の作戦会議室にて、今この場に居るのは、フェイト、ティアナ、キャロ、そして重傷を負ったヴァイスに代わるヘリパイロットのアルトが部隊長であるはやてから今後の六課の方針を受ける

六課の方針は飽くまでも“レリックの搜索”

スカリエツティはその捜査線上に居るだけ…

その過程において誘拐されたヴィヴィオを救出する

それがはやての決めた方針であつた。

はやては六課の方針を言うと退室

フェイト、キャロ、アルトも解散する

会議室に残つたなのはティアナに話し掛けた。

「ティアナ、スバルは？」

「まだ本局ですけど午後には合流出来るそうです」

「……そう……」

なのははそれだけを聞くと部屋から退室

その後、アースラ艦内を歩いているとラインと遭遇した。

リインがなのはに飛び寄って来る

「リイン、怪我は大丈夫なの？」

「はいです。お蔭様で完全回復ですう」

体全体を使って元気である事をアピールするリイン

なのはが手を差し出すとリインは「失礼しますう」と掌に座る

なのははリインを肩へと乗せた。

「シャーリーからFW達のデバイスのファイナルリミッター解除を頼まれたですよお？」

そう切り出すのはリイン

なのはは少し遠くを見て考えた後、答える

「うん。本当はもう少し慎重にしたかったんだけどね…。皆なら使い熟せると思うけど……問題は……」

「エリオのストラダとスカリエッティが所持しているベルセリオスですねえ……」

「うん……」

なのはは俯いて返事をした。

FW達のデバイスのファイナルリミッターを外すのは慎重に行きたかったが仕方無い

それに、FW達の力量なら大丈夫だとなのはは確信している

ただ問題が2つ

エリオのストラダが大破した事はかなり痛い

エリオはフェイトと同レベルの高速戦闘が出来るのだ。

その彼がデバイスを失い戦線離脱となればFWの戦力は一気に下がる

これは別にエリオ以外のFWが弱いと言う意味では無い

FW達はそれぞれに長所や強味がある

しかし、スバルが突撃するにもティアナが作戦を実行するにもエリオの前衛と後衛を行き来出来る機動性があってこそ…

そしてもう一つの問題は戦闘機人が所持していたデバイス【ベルセリオス】

流石、天才科学者であるスカリエツィが製造しただけであり性能がFW達のデバイスとは段違いである

正直、ファイナルリミッターを解除しても対抗出来るかどうか…

「あ、そう言えば…」

悩んでいるなのはの文字通り耳元でラインが何かを思い出した様に声を上げる

「どうかしたの？」

「シャルティエさんが、暇な時で良いからデバイスルームに前線メソバーとはやてちゃんを連れて来るように言ってたです」

「シャルティエが？リオン君じゃなくて？」

「はい、シャルティエさんです」

「……何だろっね？」

シャルティエがメンバーを呼び出した疑問になのはとリオンは首を傾げた。

アースラ内、簡易訓練施設

激しい剣撃が鳴り響く

一方は剣を構えた少年

もう一方は同じく剣を構えた女性

エリオとシグナムは既に2時間近く本気に近い打ち合いをしていた。

勿論、シグナムは本気を出すまでも無いが絶対に防御に回る様な真

似はしない

何故なら…

『エリオ！隙を見せ過ぎです！もっと腰を落として！剣先は相手から見えない様に！』

「分かってます！」

目の前の少年は普段使う槍では無く剣を使用しつつも、その剣に指摘された事を次の一振りではしっかり直している

守ったら攻め切られる

シグナムは本能的にそう感じていた。

「はぁあああっ！」

シグナムが大きく後退したエリオへと斬り掛かる

『エリオ！』

「行くよ！シャル！」

エリオはシャルティエを下段に構えるとシグナムに突撃、下から掬い上げる様にシャルティエを振った。

「はあああつ！」

「てあああつ！」

ぶつかるシャルティエとレヴァンティン

爆発
！

シグナムとエリオは距離を置いて着地する

「……はあ…はあっ」

「……ふむ」

肩で息をするエリオに対して冷静に居るシグナム

互いに次の一撃を入れようかと相手の隙を伺っていると、セツトされてきたタイマーが鳴り響いた。

「……時間だな」

「はい…」

2人は剣を下ろし一礼

「私からは何かを教えてやれる訳じゃないが……大丈夫か？」

「はい。シャルとはまた違う物を盗ませて頂いてますから」

『エリオに重要なのは実戦ですからね』

「……ふっ、生意気な。フェイト隊長にあまり心配を掛けるなよ」

「はい！ありがとうございます！」

エリオは深い御辞儀でシグナムを見送った。

訓練室にはエリオとシャルティエだけが残る

「シャル、どうだった？」

『エリオは吸収が早いですからね……。教えるのは楽で嬉しいですよ』

「そんな事無いよ」

『いえ、そこは貴方の誇っても良い所です。……さて、僕がエリオに付き合えるのももう少しの間だけです……。いつもの鍛練を始めましょうか』

「はい！」

エリオはシャルを構えると上段、中段、下段の構えと素振り始める

シャルは剣である為槍とは構えが違っのだがそこから辺はシャルが上手く教えていた。

エリオと打ち合ったシグナムは訓練室の外でフェイトと鉢合わせ

「テストロッサか…」

「どうも、うちのエリオがお世話になってます」

「…ふっ、世話になっているのは私の方だ」

「……………?」

「エリオの成長速度が早過ぎると言っても良いくらいでな…。楽しんでます」

「……………と言つと、成果は良いんですね?」

「いや、十分過ぎる成果だ。次は私がやられるかもしれない。正直驚いた…あの年齢にしては行動と瞬発力が早過ぎる」

「……………なのはがそういう風に育ててくれるから…」

「それだけでは無いと思うがな」

「……………?」

「高町が鍛えたからという理由もあるだろうが、エリオの眼は私を奮い立たせる様な戦士の眼だ。…恐らく何かを決意したのだろうな。」

之からの成長が楽しみだ」

ふふっ、とシグナムは笑みを零した。

それから時間は少し経ち…

アースラ艦内をティアナ、エリオ、キャロが歩いているとティアナが道に迷っているスバルを見付けた。

「スバル！」

「あっ、ティア！みんな！」

「お帰りなさいスバルさん。体の方はもう大丈夫なんですか？」

「うん、もう大丈夫だよ！」

エリオに答えたスバルは少し腕を大袈裟に振り回した後、待機状態のマツハキャリバーを見せる

「あたしもマツハキヤリバーも無事に完治。それにギン姉からも力を貰ったから」

「ギンガさんから？」

「あ、スバル。帰って来たんだ」

スバルがギンガから受け取った“力”という単語が気になったキヤロが質問しようとするが、その言葉はなのによって遮られた。

なのの後ろには隊長陣とはやての姿

「隊長達と…八神部隊長まで…どうかされたんですか？」

「いや、私たちはシャルに呼ばれて来ただけだよ」

「えっ？シャルに？」

ティアナの問いに答えたはやて

そのはやての言葉にスバルはシャルを見る

『はい、僕が皆さんをお呼びしました。それではデバイスルームに行きましょうか』

エリオの手の中で答えるシャルティエ

シャルティエに促されて前線メンバー達はデバイスルームへと向かった。

デバイスルームに到着するとシャルは話し始める

『それでは、皆さんのデバイスを一時ボクにお預け下さい』

「…えっ？何で？」

『皆さんのデバイスを強化するからですよ、フェイトさん』

「…強化？何でまた急に…？」

『ベルセリオスに対抗する為です』

フェイトの問いに一つずつ答えて行くシャルティエ

一通り答え終わると今度はシグナムが口を開く

「しかしシャルティエ。強化と言っても簡単に出来るものなのか？」

『はい。3時間くらいあれば出来ます。ボクが構築したデータを入れるだけです。』

「構築したデータ？お前はアレの性能に対処する術を知っているのか？」

『知ってるも何も………というか皆さん御忘れになっていませんか？ベルセリオスと言う名前を』

シャルにそう言われ全員頭の中の記憶を引っ張り出す

【ベルセリオス】と言う名前

「……………あっ！」

なのはが思い出したのか手を叩きながら声を上げた。

「確かりオン君の過去の話を聞いた時に出て来たソーディアンの1本だったような……」

『御名答ですなのはさん。正確に言えばアレはデバイスですので関係はありませんが、通常のデバイスを凌ぐ性能があります。ですので、ボクの中にあるベルセリオスへの対抗手段のプログラムを移植し皆さんのデバイスを少し改造します』

シャルが口にした“改造”という言葉に少し気が引けたメンバーだったが、データを入れるだけ、と言うシャルの言葉を信じて承諾

各々が自分のデバイスをケイジへと入れて行った。

「……………あの…シャル…？」

その中でエリオが怖ず怖ずと手を挙げる

『どっかしましたか？』

「僕のストラーダは壊れちゃったんだけど……どうすれば良いのかな？」

『それなら心配には及びません。リイン、お願いします』

「はいですう！」

フェイトに手伝って貰い電極を自身に取り付けているシャルティエはリインに予め頼んでいた事をお願いすると、リインは布の掛かったケイジに向かって飛んで行く

ケイジに辿り着くとリインは布を捲った。

「……………あつ……！」

頭になったケイジを見たエリオは言葉を詰まらせる

そこにあったのは粉々に砕けたストラーダ

待機状態では無く、第一形態の【スピーアフォーム】の状態

ケイジの中にある幾つもの作業用アームがストラーダの破片を元の

位置へと復元させていた。

『取り敢えず可能な限りは修復してみますが元通りになるかは分かりません……。ただ、最後の戦いにまでは間に合わせてみせますよ』

「ありがとう…シャルティエ」

『礼には及びません。……では、此処から先はボクとラインの仕事ですので皆さんはゆっくり体を休めていて下さい』

「ありがとな、シャル。ラインも頑張るんやで」

「はいです！はやてちゃん」

ベルセリオスへの対抗プログラムの移植をシャルとラインに任せ、前線メンバーはデバイスルームから退室して行く

全員が退室すると音を鳴らして自動ドアが閉まった。

デバイスルームに残るシャルとライン、そしてデバイス達…

『それじゃ始めましょうか、ライン』

「はいですう。……処でシャルティエさん、データを入れるだけで

ベルセリオスに対抗出来るんですかあ？」

『うん…。正確に言えば、データを入れると言うよりデータを元にしてデバイスの性能を底上げする、と言った方が正しいですね』

「へえ、そうなんですかあ…。」

話をしながらもラインのパネルを操作する手は止まらない

シャルは電極に繋がれているだけだが、彼なりにそれぞれのデバイスの耐えられる出力を計りデータを選別する

「……………あれえ？」

作業開始から十数分後…

パネルを操作していたラインがちょっとした異変に気付いた。

それはバグ等では無く、シャルティエから送られて来る“解析不能のデータ”

ラインはシャルティエに問う

「あの、シャルティエさん。この解析不能データは何でしょうか？」

「あ、それですか？大丈夫ですよ。簡単に言えば一時的にデバイスの性能を“限界突破”させるデータです」

シャルの言葉にリインは眼を丸くした。

リミッター解除なら聞いた事はあるが、デバイスの限界突破など話を聞いた事が無い

そもそも“限界突破”をさせてデバイスの耐久力は持つのだろうか…

「……………ええ…つと…。それはデバイス達は大丈夫なんですかあ？」

「はい、大丈夫です。“限界突破”と言ってもそんな無茶苦茶なものじゃありませんよ。一発限りの大技ですし、デバイスの全機能を冷却に回しますので壊れる心配もありません。ただ、使用後は少し戦闘は出来ませんがね」

それに…、とシャルは言葉を続ける

『限界突破は簡単には使えない様に制限を掛けています。正真正銘の“切り札”になるでしょうからね』

「……………は…はあ…」

シャルの説明にリインは相槌を返すしか無かった。

シャルの説明を手を止めて聞いていたリインは気を取り直しパネルを操作する

そして視線は修復中のストラーダへ…

何とか見た目は槍の形にはなっているものの“修復不可能”と言われたまでの破損ぶり

完全に直るとは思えない

『ストラーダも派手に壊れちゃいましたね』

「そうですね…。エリオの成長速度にストラーダが耐えられなくなっただんだと思うですよ…」

『このまま修復してもまた直ぐに壊れちゃうでしょうね』

「……………何とかならないですかねえ……」

『何とかありませんよ?』

「……………えっ?」

リインは再度腕を止めシャルティエを見る

シャルティエを“信じられない”と言う様な表情で見るリイン

“何とか出来ますけど?”と言う雰囲気醸し出すシャルティエ

リインは体ごとシャルの方を向き口を開く

「どっつするんですかあ?」

『修復は不可能なので、大破したストラダーを元に新しくストラダーを造るんですよ』

「造る……って! デバイスは簡単には造れないですよお!?!?」

『確かに一からは難しいでしょうが、今回は“ストラーダ”と言った元があります。ですので、回収したストラーダの部品を使用して新しく造るんです』

「……でも、造り直してもストラーダはエリオの能力に耐え切れ無いですよあ？」

『そこはストラーダを改造するんですよ』

「……改造……？」

『はい。……ですがその為には、レイジングハート、バルディッシュ、レヴァンティン、グラーフアイゼンの協力が必要ですがね』

シャルティエの含んだ物言いにデバイス達は首を捻った。

デバイスルームから退室したフェイトは一つの部屋の前で立ち止まった。

あれから1週間

全く見ていない少年に会う為に……

「……エミリオ……居る？」

ドアをノックしながら中の人物を呼んでみる

しかし反応は無い

フェイトは今日もリオンと会えなかったと思い身を翻す

「……………！」

「……エミリオ……」

丁度そこへ帰って来たリオンと眼が合う

しかしリオンはフェイトと眼が合った途端、直ぐさま身を翻し逃げる様に早歩きで行ってしまった。

「……………エミリオ……！」

リオンを呼び止めようとするフェイトだったが既に遅し

リオンの姿は見えなくなっていました。

フェイトは溜息をつくと沈んだ表情で自室へと戻って行った。

リオンはフェイトと眼が合った瞬間、彼女から逃げる様に立ち去った。

それからどれくらい歩き回ったのだろうか

リオンは自室に戻る気も無く、誰とも会いたく無かった為、適当に近くにあった部屋へと入る

『……………あれ？坊ちゃんじゃないですか？』

部屋に入った途端に掛けられた声に顔を上げてみれば、そこには電極に繋がれたシャルティエの姿

その後ろにはケイジに入れられたデバイス達

「……………何をしているんだ？」

『それはボクの台詞ですよ、坊ちゃん』

「……………何？」

『坊ちゃん。ヴィヴィオの事を後悔しているんですか？』

シャルに凶星を突かれたリオンはその場に固まる

シャルはリオンの反応を見て凶星と判断した後、言葉を続ける

『坊ちゃんは聞いていないと思いますが、六課はヴィヴィオを救出しに……………奪われたものを全て取り返す為に行動する様です』

「……………」

『エリオにも言いましたが、救出する事も“護る”と言う事の一部です。……………坊ちゃん、18年前の様に全てを失っても護るモノの為

に今一度立ち上がりましょう。なのはさんの様に全力全開で』

しばしの沈黙

リオンは話し終えたシャルをじっと見詰める

何かを考える様に深く

「……………ウツドロウも言っていたな……。……………自分が納得出来るまで考えて考えて、考え抜くと……………」

シャルから視線を逸らしたりリオンは近くにあった椅子へと腰を掛け眼を綴じ考える

自分が成すべき事を……………」

「……………シャル……………最後まで僕に付いて来てくれるか？」

『はい。何処までも御共致しますよ』

今だ表情は曇ったままだが何かを決意した様な口調で話すリオン
シャルティエは笑顔で答えた。

『折れない心』（後書き）

最近『innocent starter』を聞いていると、サビのなのはとフェイトの戦闘シーンに何故かエリオがストライダーのフォームツヴァイで乱入して来る描写を妄想してしまいます。

はい。今回の懺悔ですが…。

あれですね。

坊ちゃんの出番が無さ過ぎだ！

しかも性格が女々しくて坊ちゃんじゃねえ！

まあ、仕方無いです

坊ちゃんには“過去への後悔”を引きずって貰わないと、最終決戦で過去を断ち切れ無いんでね

尚、途中で坊ちゃんの頭に流れた文字

皆さんならもうお分かりだと思いますが“あの技”への伏線です。

この文字は坊ちゃんの“後悔の念”という形で出しました。

このネタを下さった読者様、有難うございました。

後、シャルティエによるストラーダの魔改造が始まりました。

ストラーダがえげつない事になります

又、後書きの最初に書きましたが、何故かエリオが原作1期に介入する妄想が止まらないです。

その内、新しく書き出すと思いますが生暖かい眼で見てやって下さい

やっぱり七夜は“エリオ魔改造”が大好きです

P・S・

ゆりかご戦ではリンも原作以上に頑張るですよ〜！（by・リン）

『決戦の刻』（前書き）

いよいよ始まります【ゆりかご戦】

“魔改造ストラーダ”の登場です。

『決戦の刻』

シャルにデバイスを預けてから1日

シャルは3時間位でデータの移植が出来ると言っていたが、最終調整をしたと言う事を申し出た為、結局1日が経ってしまった。

なのは達はデバイスルームを再度訪れる

『皆さん、お待たせ致しました。どうぞケイジからデバイスをお取り下さい』

入室して来たなのは達にシャルはデバイスへのデータ移植が完了した事を告げ、前線メンバーへデバイスを返却した。

各々のデバイスを手にしたメンバー達だが、本当にデバイスが強化されたのか疑う様な表情をしている

それを感じ取ったシャルティエは説明する

『外見は変わっていませんので分かり辛いでしょうが性能は完全に底上げされています。共に作業をしていたリインも確認済みですので保証します』

「リインがすっかりチェックしましたですよお」

それを聞いたメンバーは安心する

シャルティエを疑っている訳では無いが“データ”と言う見えない物である以上、本当に性能が底上げされたのかは確認出来ない

しかし、リインがチェックを入れた上で“大丈夫”と言っているの
でメンバー達はデバイスの性能が底上げされている事を信じた。

『ただ…』

シャルティエが少し低くした口調で言葉を続ける

『はやてさんのデバイスはややこしい物だったので他の方に比べてそんなに強化出来ていません』

「…………え？そうなん？」

『はい。……と言っか、データを入れようとしたら何かこっちが浸蝕されそうな勢いでしたのであまり深くは入れなかつたです。…ボクのようなデバイスでははやてさんのデバイスの中に入るのは難し過ぎるんです』

シャルははやての持つデバイスの特殊性故に強化が一部しか出来ない事を説明

デバイスの“強化”にかなり乗り気だったはやては軽くショックを受けた。

何処か残念そうな顔をして項垂れるはやてを無視し、シャルはエリオに話し掛ける

『エリオのストラダーも無事に完成しましたよ。リイン、お願いします』

「はいですう〜」

シャルに合図をされたリインはふわふわ〜とストラダーの入ったケイジへと向かうと、そこから“腕時計”を取り出す

そして、それを体全体で担ぐとフラフラと浮遊しながらエリオの元へと持って来た。

「シャル…！これって…！」

『見ての通りストラーダですよ。エリオの力量に合わせて改修しておきましたのでもう壊れる心配はありません』

「ありがとう…シャル」

『いえ、礼には及びません。……それと、レイジングハート達に手伝って貰い“改造”しましたので使用の際には注意して下さいね』

えっ…？、とデバイスルームの空気が固まった。

この場に居る、リインを除く全員が眼を点にしてシャルティエを見ている

今何と言った？改造？

全員が同じ事を考えていると、シャルは全員の心境を知ってか知らずか“改造点”について説明を始めた。

『エリオ、取り敢えず貴方の力量を計りストラダーに5つのフォルムを新たに取り付けました』

「えっ！5つも!？」

シャルの説明に声を挙げるエリオ

声を挙げてはいないが他のメンバー達も啞然としている

シャルはエリオの驚きに構わずにそれぞれのフォルムに付いて話す

まず始めに第一、第二、第三形態は性能を底上げしており今までと同じ様に使える事を説明

それを聞いたエリオは内心でかなり安心する

無茶苦茶な改造じゃなかった…と。

しかし、それはシャルから語られた第四、第五、第六、第七、第八形態の説明によって崩れ去る

第四形態は、魔力とカートリッジを全て持って行かれるフォームであり、文字通り“一撃破壊”に特化した形態

第五形態は、第三形態の上位互換と言うに等しいフォームで、文字通り“広域殲滅”に特化した形態

第六形態は、今はまだ解禁されていないらしいが第四形態とは違う“破壊”に特化した形態

第七形態は、エリオの今までの六課での訓練成果を存分に発揮する“対人戦用”に特化した形態

第八形態は、エリオのスピードを極限まで生かす“一閃必倒”に特化した形態

『……ですが、第四形態以降のフォームはエリオの魔力を莫大に消費しますので御使用の際には十分注意して下さい！』

恐らく今のシャルティエは満面の笑顔であろう

凄く爽やかに“魔改造ストラダ”の説明をし終えるシャルティエ

なのはも、フェイトも、はやても…

説明をされた当の本人であるエリオも顔を引き攣らせて苦笑いするしかなかった。

『あれ？お気に召しませんでしたか？』

デバイスルームに流れる静寂に不安げに口を開くシャルティエ

エリオは視線を泳がせる

何か想像以上の改造をされてしまったストラーダ

しかし第一、第二、第三形態に関しては今までと変わりはないと言っていた。

ならばそれだけを使う様にすれば良い

それにストラーダを修復して貰っている

「…ううん。とっても嬉しいよ、シャルティエ……ありがとう」

だから笑顔で御礼を言っておく

『喜んで頂けたなら幸いです』

御礼を言われたシャルは自分の力作を気に入って貰えた事に大いに喜んでいた。

シャルから強化されたデバイスを受け取ったメンバーは退室しそれぞれの待機場所へと戻って行く

デバイスルームに1本残るシャルティエ

前線メンバーが退室してから数分後、部屋の扉が開いた。

『坊ちゃん…！』

そこに居たのはリオン

リオンはシャルに近付くと、シャルに取り付けられている電極を取り外しシャルを鞘から抜く

「……シャル…もう一度、僕に付いて来い」

リオンは真つ直ぐにシャルのコアを見ながら言った。

『当たり前じゃないですか坊ちゃん。何処までもお供しますよ』

シャルは何の迷いも無く答える

ヴィヴィオを救い出す事を決意したリオンは、シャルの言葉に「…ふっ」と鼻で笑うとシャルを鞘へと戻す

リオンは戦う事を決意した。

その決意をフェイトに伝えようとデバイスルームを出た瞬間、アース艦内に警報が鳴り響く

「……………何だ!？」

『坊ちゃん、取り敢えずモニターを見てみましょう!』

突然の警報に戸惑うリオンにシャルは近くに浮かんでいたモニターを見るように促す

それと同時に艦内放送が慌ただしく響いた。

「アインヘリアル、一号機から三号機まで大破!撤退する戦闘機人はそのまま地上本部へと向かっています!」

「廃棄都市から熱反応膨大!これは……………戦闘機人!?こちらも地上本部へと向かっています!」

飛び交う放送

複数映し出されている映像の中の1つの映像が大きくリオンの前に映し出される

そこには地盤沈下を起こし崩壊する山々

そして山の中から姿を現す巨大な戦艦

「見えるかあい？諸君」

その映像から聞こえて来るのは六課の局員とは違う声

『……………スカリエツテイ……………』

シャルが小さく呟いた。

「これが古代ベルカの悪夢の英知……………見えるかあい？」

狂気的笑みを浮かべながらスカリエツティは映像を発信する

そこに映るのは玉座に座らされたヴィヴィオの姿

「待ち望んだ主を得て、古代の英知の結晶はその力を発揮する……！」

「ママ……。…うっ！痛いよ…！痛いよ！ママ〜！」

玉座に縛り付けられたヴィヴィオが苦しみながら泣き叫ぶ

その様子は勿論アースラ内にも配信されており…

「……………クズがつ！」

リオンはアースラの壁にシャルティエを突き刺した。

シャルを握るその手は怒りのあまり震えている

「ああ……そうそう…」

画面の向こう側からスカリエッティが楽しそうに言葉を繋げる

「古代の英知を呼び起こすのも私にとっては感極まる事なのだが…
…私も科学者という身でね…。面白い物を英知に取り付けさせて貰
ったよ」

「……………なっ！？」

「あれは…！？」

スカリエッティが映す映像にリオンとシャルティエは絶句する

映された映像は【聖王のゆりかご】の船底にあたる部分

そこに取り付けられているのは巨大な剣

『ベルクラント！？』

シャルは腹の底からの声を張り上げた。

まさかスカリエッツィはベルクラントまでも科学で再現してしまうのか…

「これは私が開発した兵器で『ベルクラント』と言ってね…。聖王の器から供給される魔力を使って地殻を破砕、そして砕けた地殻をこの“ゆりかご”が放つ莫大な魔力で空中に大地を形成する仕組みなのだよ」

効果まで“本物のベルクラント”と同じだった。

あんな物を放たれれば“3発”で大地は光を失う

「……この男…！」

『坊ちゃん、如何致します？』

「…決まっている！あの男を殺してでも止める！行くぞ、シャル！」

『この世界で殺しは御法度ですが……まあ今回はボクも頭に来てますからね。デバイスでは無くソーディアンとして戦わせて頂きますよっか』

リオンとシャルは殺気を振り撒きながらはやて達が居るであろう艦橋に向かった。

アースラブブリッジ

はやては聖王教会騎士カリムと“予言”に出ていた内容である【聖王のゆりかご】について通信を行っていた。

カリムと通信を行っているモニターの隣にはミッドチルダ上空をゆつくりと飛行する“ゆりかご”が映し出されている

「……………はやて！」

はやての背後にあるブリッジの扉が開き、リオンが声を荒げながら入って来た。

「どうしたんや！今こっちはちょお通信中なんや…！」

混乱する現状に思わずはやても荒々しい口調となりリオンに反応する

「……そんな事は関係無い…！それよりあの船を何とかして早く落とせ！取り返しがつかなくなるぞ！」

しかし、リオンの焦燥に溢れたその言葉にはやては少なくとも落ち着きを取り戻した。

「取り返しがつかなくなる…ってどういう事や？」

「……お前もスカリエッティの声明を聞いたなら知っているとと思うが、あの船には【ベルクラント】が積まれている…！あれを“3発”撃たれたら世界は暗闇に覆われるぞ！」

「何やて！？」

はやては艦長席から立ち上がり、驚きに声を張り上げた。

先程のスカリエッティからの声明ははやても勿論聞いている

そこに搭載されている【ベルクラント】の説明も聞いた。

そして、リオンから聞かされた過去は“完全に”とは言えないが、はやての頭の片隅に残っている

それがソーディアンやベルクラント等と言う“危険な兵器”ならば
尚更

スカリエッティの説明と、リオンの過去話によって“ベルクラントは危険”という事は把握しているつもりだったが、リオンの言葉は更に上に行く想像以上の言葉だった。

“3発”撃たれたら終わり

たった“3発”

それだけで世界は“予言”通り暗闇に覆われてしまうのだ。

はやては苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべると、リオンに作戦会議室に向かうように指示した。

作戦会議室に着いたりオンだったが部屋の中には誰も居ない

その時、シャルに通信が入った。

「ごめんやでリオン君！」

シャルから聞こえてくる声ははやて

そして第一声が謝罪

「……………何がだ…？」

「実はもう皆行動を開始しててな、FWとシグナムは既に地上の戦闘機人と騎士を倒す為に降りてもうたんや」

「……なっ！？なら僕はどうすれば良い！」

「今回は私も出動するさかいに直ぐ迎えに行くわ！」

通信が終わると同時にこちらへ向かって駆けて来る足音

リオンがそちらを見るとはやてが既にそこまで走って来ていた。

到着が速過ぎる為、通信しながら走って来たのだと思うがはやては息切れをしていない

流石は伊達に管理局で働いているだけある、と関していたリオンの腕を掴むとはやてはそのままアースラのハッチへと走った。

ハッチに着くとそこには【ゆりかご】に突入するメンバーであるシグナムを除く3名の隊長陣が既に待機していた。

「よっしゃ！なら隊長陣も出動や！」

意気揚々と言うはやてであるが流石に肩を上下させながら深く荒い

呼吸をしている

「はやてちゃん、取り敢えず息を整えようか？」

「……せやな」

はやてはなのはに言われ呼吸を整える為に深呼吸を繰り返した。

はやてが深呼吸して落ち着きを取り戻している最中、フェイトがリオンに近付き口を開く

「……………エミリオ……………」

「……………フェイトか……………」

少し気ままずくなり視線を逸らすリオンだったが、フェイトの目を見ながら昨日決めた“決意”を口にした。

「……………フェイト……………僕は必ずヴィヴィオを救い出す。そして、“ヴィヴィオを護る”というお前との約束は必ず守ってみせる」

「……エミリオ……」

その決意を示すリオンの顔にフェイトは胸がざわめく様な感じを受けた。

リオンの表情はまるで“死んでも後悔は無い”と言いたげな表情

「さて……そんなじゃ行こか」

フェイトの思考を打ち切ったのは呼吸を整えたはやての声

既にはやての準備は万端のようだ。

「処ではやてちゃん、リオン君はどうするの？」

そう切り出したのはなのは

善く善く思い出してみればリオンは空を飛べない

「ああ、それなら大丈夫や」

はやてはなのはの問いに、にっこりと笑顔で答える

「なのはちゃん、頼んだで」

「…ふええ？」

なのはの肩に手を載せるはやてとそれに戸惑うなのはだった。

地上、廃棄都市上空

「ごめんね皆！思いつ切り揺れるから掴まってて！」

FWを乗せたヘリの操縦桿を握るアルトはそう告げると、ヘリを思い切り傾ける

ヘリの背後から迫るのは2機のガジェット？型

ガジェットから放たれる攻撃をアルトはヘリを巧みに操縦し、ビルの間を飛ぶ事でガジェット達を撒いた。

「よしっ！振り切った！」

「アルト凄〜い」

「有難う、スバル！」

アルトの操縦に本心から感心するスバルに喜びの口調で礼を言うアルト

しかし、次の瞬間には口調は真剣な物に直ぐさま変わった。

「さあ、降下ポイントに着くよ。皆、準備は良い？」

それと同時に開かれるヘリの後部ハッチ

ティアナは今回の作戦についてFW達に説明する

今回の作戦は、ミッド中央市街地方面の敵戦力迎撃ラインに参加
地上部隊と協力して、敵側の厄介な戦力“戦闘機人”と“召喚士”
を最初に叩いて止める事が目的

これは戦闘機人との戦闘経験が唯一あるFWに任された任務

ガジェット、及び戦闘機人達に突破されてしまえば市街地に大規模
な被害が発生してしまう

「絶対に、それだけは防ぐのよ」

力の籠ったティアナの言葉に3人は力強く頷く

そして

「それじゃあ行くわよ!」

ティアナの合図と共にFW達はへりから飛び出した。

上空 【ゆりかご】 周囲

【ゆりかご】から出撃して来るガジェットが市街地へと向かうのを防ぐ為、はやてはなのは達と別れ、空戦魔導師達と共にガジェット迎撃へと向かった。

なのは、フェイト、ヴィータは【ゆりかご】内部に突入する為にガジェット達を撃墜しながら高速飛翔する

「……おい!早過ぎないか!」

そんな中、“なのはの背中”で文句を言うリオン

「仕方ないよりオン君。之くらいの速度じゃ無いとガジェットの攻撃に当たっちゃうよ」

なのはは苦笑いしながらリオンに答えた。

今、リオンなのはの背中にしがみついている状態

之が出動前にはやてが言っていた提案

なのはがリオンを負ぶう事によってリオンを【ゆりかご】まで連れて行くとういう提案

フェイトやヴィータは前に出て戦う為、リオンを背負うのは行動に支障が出る

はやてが負ぶうつもりでもあったが、はやては現場の指揮を取る為になのは達とは別れなければならない

その消去法からなのはガリオンを負ぶう事になった。

『坊ちゃん！ベルクラントに魔力増大！』

「……………何だと!？」

シャルティエの警告

次の瞬間、なのは達の視界はまばゆい光で埋め尽くされた。

激しい光に続くのは耳を劈く轟音

激しい光が収まりなのは達が目を開けると、そこには信じ難い光景が広がっていた。

「……………嘘っ……………」

「空に…大地が出来てる……………」

信じられ無いと言った表情を浮かべるフェイトと、目の前で起きた出来事を思わず口にするなのは

「……おい！アレをしてみる！」

ヴィータの焦った声に釣られそちらを見てみれば【ゆりかご】の真下にあった山が跡形も無く消し飛んでおり、大地も大きく割れていた。

「……分かったか……これがベルクラントの威力だ……」

なのはの背で怒りを押し込めた声を上げるリオン

なのははリオンの言葉を聞き、ベルクラントの脅威を目の当たりにした。

「……後2発か……。なのは、【ゆりかご】の前に回れ」

「えっ？急にどうしたの？」

「…時間が惜しい。突入口を作る」

「わ、分かった！フェイトちゃん、ヴィータちゃん！行こう！」

なのはは今だベルクラントの威力に固まっているフェイトとヴィータを呼ぶと【ゆりかご】前面に向かって飛んだ。

なのはの声に我に返ったフェイト達も直ぐさま後を追って飛ぶ

【ゆりかご】から放たれる砲撃を回避し、ガジェット達を撃墜しながら最短距離で【ゆりかご】前面に到達したなのは

「リオン君、着いたよ」

「……よし、動くなよ」

そう言うとりオンはなのはの体を登り、彼女の肩に足を乗せた。

「ふえっ？ちよっとりオン君？」

「……動くな……！落ちるだろうが……！」

なのはに文句を言いながらリオンはシャルを構え詠唱を開始する

動きの止まっているのはとリオンを絶好の的と判断したガジェツト達が次々と向かって来ているが…

リオンには問題無かった。

今から発動するのは、数多の敵を貫き、巨大な船の装甲に穴を穿つ威力のある晶術

悪魔…ならぬ『魔王の槍』

リオンはなのはの肩を踏み台にし、高く跳び上がった。

「リオンく …!?」

無防備にも跳び出したリオンを心配し名前を呼ぼうとしたのはだったが、その瞬間言葉が喉で悶える

背筋を走る強烈な寒気

自分に向けられてはいないにも関わらず“殺気”に冷汗が流れた。

跳び上がったリオンは自分の頭上後方の空間を歪ませ、“闇の槍”を取り出す

狙うは【ゆりかご】の甲板

迫り来るガジェット共は全て討ち滅ぼす

リオンは“槍”を持つ右手を大きく引き絞り、体を弓なりに逸らす
そして“闇”を放った。

「デモンズランス・ゼロ！」

リオンの手から投擲されるは『SS』級の殲滅晶術

それは『デモンズランス』を強化した“悪魔の槍”

飛翔する巨大な槍と、巨大な槍の周囲に纏い飛翔する数十の小型の槍

それらはガジェットを撃ち抜き、破壊しながら【ゆりかご】の甲板へと直撃した。

甲板へと着地したりオンは“悪魔の槍”の着弾地点を確認

そこには人が3人通れる大きさの穴が空いていた。

「……『デモンズランス・ゼロ』の直撃を受けてこの程度の損傷か……」

『まあ大きいですからね……この船』

「……まあ良い……。おい！なのは！」

リオンは突入口を作った事を報告しようと背後上空を見上げ

「……………エミリオ！」

「……………!？」

突然聞こえたフェイトの声

ガァンツ、と金属の交わる音がリオンの背後で聞こえた。

リオンが直ぐさま振り向くと、そこにはブーメラン状の刃物を振り下ろす戦闘機人の姿

そして、リオンと戦闘機人の間に割って入りバルディッシュで攻撃を受け止めたフェイトの姿

「……………流石ですね…フェイトお嬢様」

フェイトに攻撃を受け止められている戦闘機人とは違う戦闘機人がフェイトの動きに感心した言葉を投げ掛ける

ブーメラン状の武器を持っている戦闘機人は【ナンバーズ】の7番『セツテ』

そしてもう1人は、3番『トーレ』

「戦闘機人……2体も……!?!」

なのははレイジングハートを構え戦闘体勢を取る

しかし、フェイトはそれを遮った。

「…なのは、此処は私が引き受けるよ。なのは達はヴィヴィオを助けに行つてあげて」

「……でも」

「……なのは、フェイトがこう言っているんだ。僕達は先を急ぐぞ」

リオンのその言葉に何処か不服そうなのはだったが、ヴィヴィオを救出する目的は変えられない

「フェイトちゃん、気をつけてね」

なのははそれだけを言うと、リオンが作った穴から内部へと突入する
なのはに続いてヴィータも突入して行く

「……………フェイト……………」

「……………何、エミリオ？」

「……………引き受けた限りは無様に負ける事は許さんからな」

リオンは飽くまでも彼らしくフェイトを応援すると内部へと突入した。

「……………エミリオも……………気をつけて……………」

リオンの背中を見送りながらフェイトは呟いた。

【ゆりかご】 甲板に3人だけになるとトーレが口を開く

「フェイトお嬢様……これは我々への反逆ですか？」

「……違う」

フェイトはバルディッシュを2人に向け言い放った。

「犯罪者の逮捕……それだけだ」

地上、廃棄都市陸橋上

「……………あっ……………」

フリードに乗りFW達の少し後方を飛んでいたキャロは少し離れた前方に位置する廃ビルの屋上に人影を見付けた。

「…………あの娘っ！」

それは紫の髪をした召喚士の少女

少女は連れているガジェット？型に無言で指示をする

FW達を運んで来たへりを指差し

「フリード！」

キャラは相棒の名前を叫んだ。

それを直ぐさま理解したフリードはFW達から離れ召喚士の少女の元へと向かう

「キャラー!?」

突然、別行動を取り出したキャロに驚くティアナ

「前方のビル屋上に召喚士の女の子が居ます！」

キャロの行動に気付いたのはエリオ

エリオに言われ前方のビルを見てみると、ガジェット?型に乗った召喚士の少女が逃げる様に飛び去って行き、キャロがそれを追っている

召喚士の少女は1人

お供のガリユーも居ない

六課襲撃の際にエリオから受けた傷が癒えていない為召喚出来ないのだろう

「スバル、エリオ、作戦変更！先にあの娘を捕まえるわよ！」

「うん！分かった！」

「はい！」

ティアナの作戦に了解するスバルとエリオ

スバルはウイングロードを展開、エリオはストラードから火を吹かそうとするが、それは緑色の光線によって邪魔をされる

IS【レイストーム】

3人はレイストームの直撃を咄嗟に回避

「スバル！エリオ！無事！？」

「あたしは大丈夫！」

「僕も無　！？」

エリオは自分の安全を報告しようとした矢先、陸橋の先に居る敵が目映った。

まだまだ距離は遠いが見間違っ筈が無い

茶色の髪に二本の剣

あの時、ヴィヴィオを救出しようとしたエリオを邪魔をした張本人

「ティアナさん…ごめんなさい」

「…………えっ？」

「僕は今から別行動を取らせて貰います。ストラダー！」

『 F o r m Z w e i . D u s e n f o r m 』

ティアナがエリオの言葉に戸惑っている間にエリオはストラダーのヘッドブースターからの噴射で既に跳んでしまっていた。

「もう！エリオまで…!!」

「ティア！危ない！」

「……………っ!？」

スバルの言葉に前を見直せばそこにはライディングボードに乗り突撃して来るウエンディの姿

その手にはベルセリオス

ティアナは咄嗟に体勢を低くし、ベルセリオスの横薙を回避した。

「ティアア！」

「お前の相手は私だ！」

「……っ!?!」

スバルの真正面から獅子奮迅の勢いで襲い掛かって来るのはノーヴェ蹴りの一撃をプロテクションで防ぐが、その威力に体が押し戻されてしまう

スバルの背後で、ダガーモードにしたクロスミラーージュでウエンディからの一撃を何とか受け流すティアナ

ティアナは後退りスバルと背中を合わせた。

「3対2…。勝てなくは無い…かな？」

「ティア、あたしはやるよ」

弱気なティアナに強く答えるスバル

その“両手”にはリボルバーナックルが装着されている

これが、ギンガから受け取った力

戦えないギンガの想いを乗せた左手用のリボルバーナックル

「ギン姉も一緒に戦ってくれている…。3対3だよ、ティア」

「……………全くアンタって奴は……………」

ふう、と相棒の相変わらずな思考回路に溜息をつきながらも御蔭で
気が少しでも紛れた事にティアナは感謝する

「行くわよスバル。あたし達の根性の見せ所よ！」

「うん！見せてやろう。あたし達の力を！」

スバルとティアナ

ノーヴェとウエンディとオットー

六課スターズ分隊FWと戦闘機人との戦いが始まった。

「……Fの遺産がこちらに来ますか……」

迫り来るブーストを見ながら呟くのは【ナンバーズ】の12番『デ
イト』

その隣には腕を組み、低空を高速で飛来して来るエリオオを見る『チ
ンク』

「デイド、此処は姉が引き受けようか？」

チンクの提案にデイドは首を横に振る

「……いいえ、チンク姉様。私も最終調整が終わった身…Fの遺産の迎撃は私が入ります」

「そうか…。だが姉も任務なので…。デイド、奴の高速戦闘の対処はお前に任せる。姉は流石にあの速さに追い付けないのでな」

「……了解致しました、チンク姉様」

デイドは【ツインブレイズ】を振り上げ、迫り来る少年と高度を合わせ迎え撃つ為に飛び出した。

「（……来たっ！）」

エリオはストラーダの柄を強く握り締めタイミングを計る

互いに高速飛行するエリオとディードの前には距離など関係が無い

一瞬の判断ミスが命取り

「てああああっ！」

エリオはストラーダのリアブースターを噴射させ、ヴィータのラケ
ーテンハンマーと同じ要領で体を回転させながらディードに向かっ
てストラーダを振り下ろした。

575

遠心力を得て強化されたストラーダの斬撃

ディードはそれをツインブレイズを交差させて防ぐ

「……………成る程……………」

鏝せり合いの中、ディードはエリオの目を見ながら口を開いた。

「……以前戦った時よりは楽しめそうではありませんね」

その口調は変わらない

感情を排除されて生まれて来た彼女らしい口調

「……Fの遺産、貴方をドクターの元に連れて行かせて頂きます」

「断らさせて頂きます!」

「……そうですか……では」

「力強くで回収させて貰おう!」

「……!?!」

デイドの言葉に続く様に聞こえて来た別の声

そして、その言葉と同時に視界の端に映った物

エリオはストライダーのブーストを切り、力を抜く事で業と弾き飛ばされ距離を取った。

直後、デイドとエリオの間に視界の端に映っていた物　ステインガーが地面に突き刺さる

「今を避けるか……敵ながら流石と言ってやるっ」

エリオは声の出所である左側に顔を向けた。

そこにはいつの間にか近付いて来ていたチンクの姿

チンクは左手にステインガーを、右手にベルセリオスを構えエリオと距離を取る

ステインガーにより錯乱からのベルセリオスの一撃が目的なのだろう

デイドはツインブレイズを構え、いつでもエリオに飛び掛かれる体勢

「……………」

エリオは少し眉間に皺を寄せる

2対1の現状

戦闘機人相手に勝てるかどうか…

「やるしかないよね…ストラーダ」

エリオはストラーダの矛先をデイドに向け腰を落とす

矛先はデイドに向けつつも意識はチンクにも向ける

「行くよ！ストラーダ！」

デューゼンフォームを維持したままのストラーダを手にエリオは駆け出した。

地上、地上本部近くの上空

そこには地上本部に向かい飛翔する騎士の姿

騎士の隣には“融合騎”の姿

「……………ん？」

槍を持つ騎士は前方に待ち構える人物を見付けると飛行を止め、自身に立ち塞がる騎士を見た。

「局の騎士か？」

「本局機動六課…シグナム二尉です」

騎士の言葉にシグナムは静かに答える

「前所属は首都防衛隊。貴方の後輩と言つことになります」

「……そうか」

そのまま静かに語り続けるシグナム

それを聞いた騎士も静かに答えた。

互いに多くは語らない

「中央本部を……壊しにでも行かれるのですか？」

「…古い友人に……レジアスに会いに行くだけだ」

「それは…復讐の為に……？」

「言葉で語れる物では無い。……道を空けて貰おう……」

そう言うと騎士は槍の矛先をシグナムに向け戦闘体勢を取った。

シグナムはレヴァンティンの柄を握り締める

「言葉にして頂かなければ…譲れる道も譲れません…！」

鞘から引き抜かれるレヴァンティン

シグナムがレヴァンティンを構えるとカートリッジが消費され、刀身に炎が纏う

「……あっ……！」

レヴァンティンに炎が纏った瞬間、騎士の隣に居た“融合騎”アギトが炎を見て小さく驚いた。

「アギト、どうかしたか？」

「な、何でもねえ」

「……………そうか。……………アギト、お前は下がっている。これは騎士同士の戦いだ……」

「でも旦那あ……」

「大丈夫だ」

騎士『ゼスト』に下がっている、と言われたアギトは不服そうな声を漏らす。が恩人たるゼストの頼み故渋々と後退した。

「シグナムと言ったな……。こちらはいつでも大丈夫だ」

「……………行きます……！」

レヴァンティンを振りかざしゼストに斬り掛かるシグナム

ゼストも前へと飛び出し槍を振るう

市街地上空で騎士の戦いが始まった。

上空、【ゆりかご】内部

「うおおりゃああっ！」

ラケーテンハンマーを振り回すヴィータが【ゆりかご】内部に展開されているガジェットを次々と破壊して行く

その戦い方は酷く無茶なものであった。

先行しガジェットを破壊していたヴィータに続き、リオンを負ぶつたなのはがゆっくり降下する

「ヴィータちゃん、あまり飛ばし過ぎると……」

「……はあ……はあ……うるせえよ……」

心配するなのはを余所にヴィータは言い張る

後衛の魔力温存も前衛の仕事だ、と…。

「……おい、前衛なら僕も居るだろうが。お前一人でやる必要は無
いんじゃないか…？」

「……へっ。なのはにずっと負ぶわれてた奴に任せられるかよ…」

「……何だと…っ！」

「リオン君落ち着いて」

白熱しそうになっていたリオンとヴィータの言い争いを打ち止める
なのは

その時、なのはとヴィータの前にモニターが浮かび上がった。

「突入隊、機動六課スターズ分隊へ」

「はい！」

「【駆動炉】と【玉座の間】、詳細な位置が特定出来ました」

ロングアーチから送られて来る【ゆりかご】内部の構造図

それを見たのはは眉をしかめる

「真逆方向…」

【玉座の間】と【駆動炉】は全くの反対方向

【玉座の間】にはヴィヴィオが…

【駆動炉】にはベルクラントの動力部が…

どちらも行かなければならない所だが、位置が真逆となると一つずつ行っている暇は無い

【ゆりかご】突入部隊が揃うには後40分は掛かるとの事…

「仕方ねえ。スターズ1とスターズ2は別行動を取る」

ヴィータはそう伝えモニターを消した。

「ヴィータちゃん!？」

「……お前…死ぬ気が…？」

「心配すんな。あたしが行くのは【駆動炉】の方だ。そっちは2人で行ってくれ。破壊と粉碎はあたしとアイゼンの得意分野だ……必ず破壊してやるよ」

ヴィータはアイゼンを肩に担ぐと【駆動炉】に向けて歩き出す

「……お前一人で大丈夫なのか…？僕も付いて行ってやるが…？」

「へっ。お前なんか来なくてもあたし一人で十分だ。……さっさとぶっ壊して援護に行つてやるよ」

「ヴィータちゃん！絶対に直ぐに来てよ！」

なのはの叫びにヴィータはひらひらっと軽く手を振って答えた。

「…………行くよ、リオン君」

「…………良いのか？」

「ヴィータちゃんが大丈夫って言うてるから大丈夫だよ。…………だから、わたし達もしっかり頑張らないとね」

なのははリオンを背負い直すと【玉座の間】に向かって飛翔した。

【ゆりかご】 軌道ポイント到着まで、後2時間16分

【ベルクラント】 による照射が大地を暗闇で覆うまで、後2発

『決戦の刻』（後書き）

そついや【なのフェイ】のレズ疑惑って公式設定なのか？

だとしたら【エリフェイ】【なのユー】好きにはキツイ現実だなあ
…。

七夜もその一人です。

はい。今回の懺悔の時間です。

取り敢えず、皆さんのツツコミたい事は分かります…

“魔改造ストラーダ”ですね？

本来3つしか無いフォルムを8つまで増やしてしまいました。

きちんと全てのフォルムに役割を持たせた設定にはいますが、
恐らく本編に登場するのは第四、第五形態の2つくらいが限界です

本編終了後も不定期で短編を書いたり、エリオ主役の二次創作も考
えていたりしますので、時間は掛かりますが意地でも全フォルム登
場させます。

さて、次は…。

原作改変は面倒臭いからしない、と宣言した割にはバツチリ改変してますね…

チンクが最終決戦に参加してたり…

スバルが既にギンガのリボルバーナックルを受け取っていたり…

スカ様が【ゆりかご】内部に居る為、フェイトが【ゆりかご】に行ったり…

エリオが戦闘機人と戦ったり…

ベルクラント照射されたり…

広げたは良いけど事態の収集はどうしよ…。

広げるだけ広げておいて今後の展開にかなり迷っています

しっかし…

ウーノ姉さんは美人過ぎる

というか、数の子は皆好きだ！

……4番以外は……。

ウーノ、チンク、セツテ、デイドが七夜のツボです

何の共通点も無い4人だな…（笑）

さてさて、【ゆりかご】の最終決戦が始まり物語は終極へと向かい始めました。

最後まで頑張りますので宜しくお願いします

P.S .

リインは今、はやてちゃんの所に向かって必死に飛んでる最中です
よぉ〜！（by・リイン）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7153s/>

魔法世界の双剣士

2011年5月19日17時58分発行